

# 第六章 日高地域の祭礼

## 第一節 祭礼の特色

和歌山県中部に位置する日高地域では、秋祭りが十月に集中して催行される。十月二日の印南祭を皮切りに、十月五日は御坊祭、その後は同月の土曜日曜祝日を祭日にして祭礼が催され、十一月三日の寒川祭を最後に総じて約三十の祭礼が行われる。

日高地域の祭礼において大きく共通している点は左記の通りである。

- ・ 裃纏や色格子柄の腰巻き、赤い投頭巾などの奴装束
- ・ 幟や傘鉾などの祭具
- ・ 踊りや獅子舞、四つ太鼓等の諸芸能

これらの共通点を概観する。

日高地域の祭礼における傘鉾は、囃子を伴わない点の特徴である。御坊祭で見られる傘の頂きに御幣を立て、傘幕に組印などを配した傘鉾は、近隣では湯川祭（御坊市）、吉原祭（美浜町）、丹生祭（日高川町）などが同様の傘鉾を見せる。これらは昭和時代になって採り入れられたものが多い。御坊市塩屋の森祭には、氏子全体を代表し、神社から出される神輿渡御に付き随う傘鉾が一基ある。印南町の印南祭は山口八幡神社と印南八幡神社の祭礼が同日に開催されるが、双方の祭礼に登場する傘鉾は「オカサ」と呼ばれ、各氏子組の印の一つとして存在している。印南祭のオカサは、傘の頂きに人形や作り物を立てる点に特徴がある。

幟は、おおよそ二反から五反ほどの幅を持つ幟を作り、若衆が威勢よく担いで、行列の先頭に行く。また、それぞれの幟には大文字で「御祭礼」や神社や地区の名前などを染め抜いて、氏子組の存在感を観衆や他の組に示す。

日高地域の祭礼に奉納される諸芸能は、多彩な内容の踊りが伝承される。丹

生祭で奉納される山野の雀踊や山口八幡神社の印南祭に奉納される奴踊などは御坊祭に奉納される芸能から影響を受けたものと見られる。同じく、山口八幡神社の印南祭のケンケン踊りは、和歌祭に伝わる雑賀踊が伝わったものとされる。日高地域の祭礼で必ず奉納される芸能が獅子舞である。御坊祭と共通しているのは紙製の獅子頭を使用している点のみで芸態には類似点は見いだせない。また、印南祭や土生祭には木製の獅子頭による重箱獅子が見られ、明らかに御坊祭とは違いが見られる。

和歌山県内では、四つ太鼓が出る祭礼は日高地域に限られており、とくに御坊祭を中心にして日高平野から日高川中流域に分布する。太鼓台は瀬戸内地域の祭りに顕著に見られる。四つ太鼓が古くから行われている地域としては、日高川町土生・藤井・小熊周辺があるが、江戸時代後期には存在していたが伝承の経緯については不明な点が多い。

以上のように、日高地域の祭礼に奉納される諸芸能のなかには、御坊祭の影響を少なからず受けているものが散見できる。

本章では、それらの日高地域の祭礼のなかでも御坊祭との関係が顕著に見える祭礼、あるいは御坊祭の影響は受けはしたが独自の形で発展した祭礼を紹介する。

表6-1 日高地域の祭礼一覧

番号	祭礼	神社	番号	祭礼	神社
①	湯川祭	湯川神社	⑨	土生祭	土生八幡神社
②	熊野祭	熊野神社	⑩	紀道祭	紀道神社
③	塩屋祭	塩屋王子神社	⑪	吉原祭	松原王子神社
④	森祭	須佐神社	⑫	和田祭	御崎神社
⑤	吉田祭	八幡神社(吉田)	⑬	印南祭(山口)	八幡神社(山口)
⑥	志賀祭	志賀王子神社	⑭	印南祭(印南)	八幡神社(印南)
⑦	内原祭	内原王子神社	⑮	稲原祭	大歳神社
⑧	丹生祭	丹生神社	⑯	松原真妻祭	真妻神社

6-1 日高地域の祭礼位置図

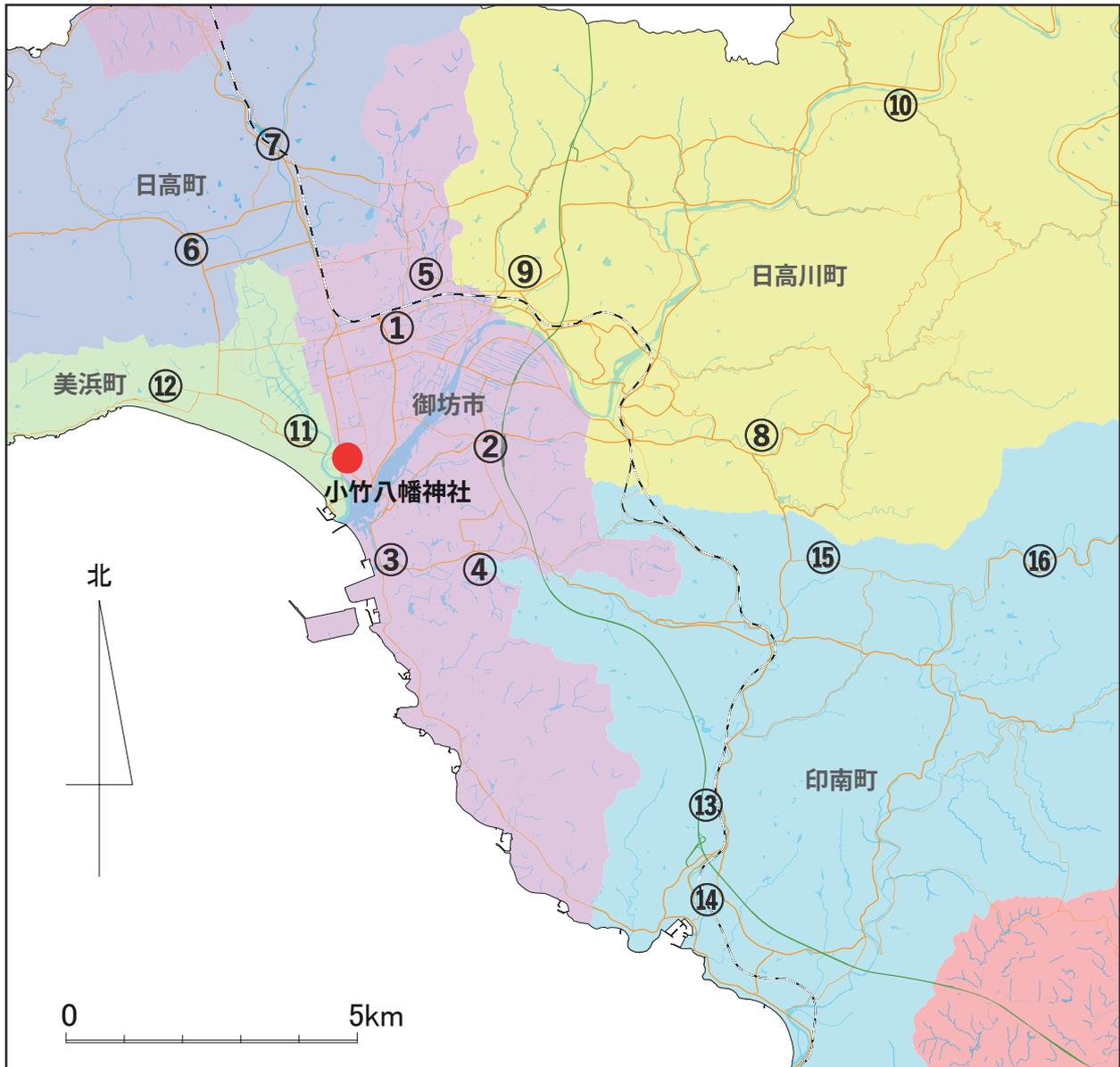


表6-2 御坊祭及び周辺祭礼（おもな祭礼用具・奉納芸能等）一覧

（○は、現在も奉納等しているもの、△は過去に奉納等していたもの、番号は地図の番号と対応している）

番号	祭礼名	神社名	市町村	組名 (地区名)	傘鉦	幟	額	屋台	獅子舞	奴踊	雀踊	鬼	四つ 太鼓	その他の芸能・祭礼用具 特徴等		
	御坊祭	小竹八幡神社	御坊市	神社		○						○				
			御坊市	中組	○	○	○	○	○	○			○			
			美浜町	濱之瀬組	○	○	○	○	○	△			○	○		
			御坊市	下組	○	○	○	○	○			○		○		
			御坊市	紀小竹組	○	○		○	○					○	○	
			御坊市	御坊町	○	○	○	○	○	○				○	○	戯瓢踊（現在：保存会）
			御坊市	名屋組	○	○		○	○						○	
			御坊市	東蘭組	○	○		○	○					○	○	
			御坊市	春日組	○	○		○	○				△		○	雀踊は、神社合祀前
			御坊市	上組	○	○	○	○	○	○	○				○	
御坊市	(鳥組)	△	△		△	△						△				
①	湯川祭	湯川神社	御坊市	神社		○										
			御坊市	富安		○		○	○					○		
			御坊市	丸山	○	○		○	○			○				
			御坊市	小松原		○			○			△			獅子舞（保存会）のみ参加	
②	熊野祭	熊野神社	御坊市	神社		○						○				
			御坊市	熊野		○								○		
			御坊市	北野口		○		○	○						屋台：四つ太鼓に似た掛け声、所作をする	
			御坊市	上野口		○		○	○						屋台：四つ太鼓に似た掛け声、所作をする	
			御坊市	下野口 古森		○								○		
			御坊市	岩内		○								○		
③	塩屋祭	塩屋王子神社	御坊市	神社	○	○						○		美人王子の舞		
			御坊市	北塩屋		○	○	○	○				○	○		
			御坊市	湊		○	○	○	○				○			
			御坊市	天田		○	○	○	○				○			
			御坊市	猪野々 中村		○	○	○	○				○			
④	森祭	須佐神社	御坊市	神社	○	○						○				
			御坊市	南塩屋		○	○	○	○				○	○		
			御坊市	森岡		○	○	○	○				○			
			御坊市 印南町	西		○	○							○		
			印南町	切山		○	○							○		
⑤	吉田祭	八幡神社 (吉田)	御坊市	神社		○										
			御坊市	吉田		○		○	○					○		

番号	祭礼名	神社名	市町村	組名 (地区名)	傘鉾	幟	額	屋台	獅子舞	奴踊	雀踊	鬼	四つ 太鼓	その他の芸能・祭礼用具 特徴等		
⑥	志賀祭	志賀王子神社	日高町	神社		○			○			○		鬼獅子（地区持ち回り）		
			日高町	柏		○		○	○						【唐船】	
			日高町	上志賀		○				○						太鼓台【子踊り】
			日高町	久志		○			○	○						【萬歳】
			日高町	中志賀		○			○	○	△			△		山車
			日高町	下志賀		○	△			○	○			△		太鼓台・山車【三番叟】
			日高町	谷口		○			○	○	△			△		【山車】

⑦	内原祭	内原王子神社	日高町	神社		○						○				
			日高町	萩原		○		○	○					○		
			日高町	荊木		○			○	○					○	
			日高町	高家		○			○	○					○	
			日高町	池田		○	○				○	△				

⑧	丹生祭	丹生神社	日高川町	神社		○									
			日高川町	江川	○	○	○	○	○				○	○	ドウセ太鼓 鬼の出迎え
			日高川町	和佐	○	○	○	○	○				○	○	踊り獅子 笑い神事
			日高川町	松瀬		○	○	○	○				○		竹馬駆け 小幡
			日高川町	山野		○			○	○		○	○	○	

⑨	土生祭	土生八幡神社	日高川町	神社		○			○			○		双頭の獅子（持ち回り）	
			日高川町	小熊		○				○			○		奴太鼓
			日高川町	土生		○		○	○				○	○	
			御坊市	藤井		○		○	○	△	△		○	○	赤幟（屋台付き）・纏
			日高川町	鐘巻		○		○	○				○	○	
			日高川町	下早蘇		○		○	○				○		
			日高川町	千津川		○								○	
			日高川町	入野		○		○	○						
			日高川町	中津川		○									
日高川町	若野		○												

⑩	紀道祭	紀道神社	日高川町	神社		○			○			○		頭屋獅子	
			日高川町	三百瀬		○		○	○						だんじり、駆け馬
			日高川町	北原		○							○		掛け馬
			日高川町	南原		○		○	○						
			日高川町	平川		○								○	

⑪	吉原祭	松原王子神社	美浜町	神社		○						○			
			美浜町	田井組	○	○		○	○					○	
			美浜町	吉原東	○	○		○	○		△			○	
			美浜町	吉原西	○	○		○	○					○	
			美浜町	新濱組	○	○		○	○	△				○	

番号	祭礼名	神社名	市町村	組名 (地区名)	傘鉦	幟	額	屋台	獅子舞	奴踊	雀踊	鬼	四つ 太鼓	その他の芸能・祭礼用具 特徴等	
⑫	和田祭	御崎神社	美浜町	神社		○			○			○		鬼獅子（地区持ち回り）	
			美浜町	本ノ脇		○		○	○						
			美浜町	西		○							○		山車 回り当番（馬当番、屋台 獅子、本当番、鬼当番）
			美浜町	西中		○		○	○				○		
			美浜町	東中		○							○		
			美浜町	東		○		○	○				○		
			美浜町	入山		○		○	○						
美浜町	小池		○								△				

⑬	印南祭	八幡神社 (山口)	印南町	神社		○								
			御坊市	野島	○	○	○	○	○	○		○		
			御坊市	上野	○	○		○	○	○		○		
			御坊市	楠井	○	○		○	○	○		○		
			印南町	津井	○	○		○	○			○		
			印南町	浜	○	○		○	○			○		
			印南町	地方	○	○		○	○			○		雑賀踊
印南町	山口		○		○	○			○					

⑭	印南祭	八幡神社 (印南)	印南町	神社		○									
			印南町	東山口		○		○	○						踊獅子
			印南町	宇杉	○	○		○	○	△					
			印南町	本郷	○	○		○	○						
			印南町	光川	○	○		○	○	△					
印南町	坂本	○													

⑮	稲原祭	大歳神社	印南町	神社		○								
			印南町	柳畑		○		○	○					
			印南町	中越		○		○	○					
			印南町	滝の口 奈良井		○							○	
印南町	白河 南畑		○							○				

⑯	松原真妻祭	松原真妻神社	印南町	神社		○					○		○	真妻若中含	
			印南町	脇の谷		○									
			印南町	見影		○									
			印南町	松原		○									
			印南町	丹生		○									
			印南町	崎ノ原		○		○	○						
			印南町	皆瀬川 小原		○		○	○						
印南町	西神ノ川		○												

## 第二節 祭礼の事例

### 一 湯川祭

湯川神社（御坊市湯川町小松原）

湯川神社は室町幕府の奉公衆を務めた湯川氏が築いた館（湯川氏館）の庭園があった場所に鎮座する。一隅に神明の祠を祀っていたが、天正の頃、十二代湯川直春は、姫の安産を浅間神社（木花咲耶姫命このはなさくやひめのみこと）に祈願し、その御分霊を現在の御坊駅北側亀山山頂に構えた亀山城中かんじょうに勧請した。その後、湯川氏館は天正十三年（一五八五）豊臣秀吉の紀州攻めで全焼したが浅間神社の御分霊は、現在の湯川神社の位置に社地を築き明神社と合祀し、子安大明神として再興した。明治時代に再び火災で全焼し、明治十五年（一八八二）に再建された。

明治四十二年（一九〇九）神社合祀令により富安王子神社（富安）、齋神社（丸山）、主計神社（富安）、里神社（富安）、氏神社（富安）、大明神社（富安）、神明社などを合祀した。

昭和十年（一九三五）九月に本殿を修築し、式殿、拝殿を新築した。その後、現在に至り安産守護、子育て守護の「子安さん」として崇敬を集めている。

### 地域

湯川神社の氏子域は、御坊市湯川町富安、丸山、小松原の三地区で総氏子戸数は約四百五十戸である。

約十年前の祭礼は、現在の祭礼形態と異なり各地区が決まった日程に行われず、「湯川子安神社祭礼保存会」によって小松原地区の獅子舞、丸山地区が幟を奉納し、その一週間後に西富組が湯川神社で祭礼を行っていた。その後、各地区で協議した結果、現在は十月六日以降の最初の土曜日に祭礼を実施をしている。

また、丸山地区では平成二十五年（二〇一三）十月に昭和二十六年（一九五二）の台風被害以降、跡地だけが残されていた齋神社を再建し、入魂式を行っ

た。以降は湯川神社、齋神社の二か所で祭礼行事を行っている。

### 祭礼日

十月六日以降の最初の土曜日

### 組織

神社総代は小松原地区から六人（小松原五人、西小松原一人）、富安地区から六人（西富安二人、下富安二人、上富安二人）、丸山地区からは三人、以上合計十五人で構成される。

祭礼の運営組織については、富安地区は西富安区の西富組、丸山地区は青年団である丸山雀会が中心となって運営している。また、小松原地区については湯川子安神社祭礼保存会が平成四年（一九九二）頃に小松原区から引き継ぎ、獅子舞の奉納を行っている。

西富組は、有志で役員を務めている。また、湯川子安神社祭礼保存会では責任者として会長が一人選出されている。

### 祭礼の次第と構成

#### 【準備】

八月中旬から九月に入ると各地区それぞれ準備と練習が開始される。

西富組は湯川神社秋季例大祭前日に「肩慣らし」を行う。二〇時頃から出陣式を行い、幟差し、獅子舞を披露する。その後、二二時頃まで氏子域を四つ太鼓で押してまわる。

湯川子安神社祭礼保存会では、八月中旬以降になると小松原集会场で笛、太鼓、獅子舞の練習を開始する。

## 〔湯川神社秋季例大祭〕十月六日以降の最初の土曜日

九時頃に各地区（組）の役員、四つ太鼓の乗り子、各地区（組）獅子頭を持った担当者が本殿に集まり、神事が行われる。神事終了後は各地区（組）の宮入が始まる。

### 西富組の宮入

最初に宮入をするのは西富組である。幟が境内に入り幟差しを行い、その後は獅子を載せた屋台が境内に入る。西富組の屋台は長持の上の四隅に笹を立て、紙垂がついた縄で囲む。獅子頭はその中央に配置されている（屋台は令和三年（二〇二二）十月に新調され、木製の社が長持の上に載り獅子頭を社内に安置する形状となった）。その後、四つ太鼓が宮入を始める。鳥居前で四つ太鼓を一度下ろし、「ヨンヨイ」の掛け声とともに境内に入り、勢いよく差し上げ、日高川流域で多くみられる「サツサ、ハリシヨ」の掛け声で太鼓を打ち、乗り子が外側へ反り返る「サイテクリヨウ」の所作を行う。境内正面右側に四つ太鼓を降ろすと獅子舞が奉納される。獅子舞はムシロの上で舞い、御坊祭で舞う獅子舞よりも比較的テンポが速い囃子である。

### 小松原地区の獅子舞奉納

西富組の獅子舞奉納が終了すると、次は小松原の獅子舞奉納が行われる。小松原では雀踊も行われていたが、現在は途絶えており、獅子舞のみを奉納している。平成四年から湯川子安神社祭礼保存会が古くから舞われている獅子舞を小松原地区から引き継ぎ、奉納している。二人立ちの獅子舞で笛は複数人で獅子を囲むように立ち吹く。ムシロの上で舞って外へは出ず、動きの緩やかな獅子舞で御坊祭で舞う獅子舞よりも囃子のテンポも遅い。

### 丸山地区の宮入

最後に丸山地区（丸山雀会）が宮入を行う。傘鉾を先頭に幟が続き、その後、勢いよく屋台が境内に入る。しばらく屋台が境内を周った後、本殿正面左側へ降ろす。次いで屋台の太鼓に合わせて幟差しを行い、その後、雀踊を奉納する。傘鉾を輪の中心に置き、三味線奏者、歌い手が内側を向き輪になって座り、それらを踊り手が歌い手を囲むように輪を作って踊る。雀踊の奉納が終わると獅子舞奉納が行われる。

丸山の獅子舞は西富組、小松原地区とは異なり、笛は一人が吹き、シートの上を二人立ちで舞い、御坊祭の獅子舞と同様の形態である。

全ての祭礼行事が終了すると、各地区は地下へ戻り各々祭礼行事を行う。西富組は湯川神社から宿（西富安集会場）を目指して屋台、四つ太鼓を押してまわる。二〇時頃から宿の前で屋台、四つ太鼓を押し、休憩後、若連行事として四つ太鼓のみ氏子域を押しまわる。

丸山地区は午後から斎神社の北方面（南ノ谷、中ノ谷、北ノ谷、蓮池、西山）の各家庭に獅子舞で厄払いにまわる。一八時三〇分から丸山中央集会場にて雀踊、獅子舞を奉納する。

### 〔湯川神社秋季例大祭翌日〕

西富組は氏子域北西の山頂に位置する春日大明神社跡（通称「めんじ山」<sup>さへ</sup>）で祭礼を行う。現在は湯川神社に合祀されているが、西富組は、「本祭」と位置付けてこの場所で祭礼を行う。

八時頃に西富安集会場に集合し、八時三〇分に屋台が出発し、各家庭をまわり通称門づけと呼ぶ獅子舞を奉納する。続いて、四つ太鼓も乗り子や担い手の準備が整い次第出発し、氏子域を押しまわる。西富組では屋台と四つ太鼓は、別れて氏子域をまわる。一五時頃にめんじ山麓に幟、屋台、四つ太鼓が集合し、

一六時から幟差しが行われ、次いで獅子舞が奉納される。四つ太鼓は、めんじ山山頂まで屋台の先導を行い、その後、屋台と別れて鳥居前で押す。獅子舞奉納後は餅まきが行われる。

二〇時頃から四つ太鼓を担ぎ氏子域をまわり西富組の祭礼行事が終了する。

丸山雀会は氏子域にある齋神社にて丸山祭を実施する。九時より蛭ヶ崎ひるがさきから南方面（丸山坪、衣奈原、齋）の各家で獅子舞をする。

一三時頃から齋神社（ちびっこ広場）にて昼食会を行う。その後、一五時から幟差し、雀踊、獅子舞の奉納を行う。

### 【祭礼日以降の行事】

西富組は月曜日に「傘破ち」を行う。日曜日に「門づけ」に回れなかった個人宅で獅子舞を披露する。

### 由来と歴史

西富組の祭礼については、昭和二十年代には屋台が存在していたとされているが、昭和二十八年（一九五三）の大洪水により流された。また、地元の方から拝見した写真によると、四つ太鼓も昭和三十八年（一九六三）には湯川神社の祭礼行事に参加していたことが確認できた。その後、西富組の祭礼行事は中断したが、平成十六年（二〇〇四）に屋台、平成十七年（二〇〇五）に再び四つ太鼓が新調され、現在の祭礼の形態になった。

小松原地区ではかつては獅子舞の他にだんじり引き、馬駆け神事、太鼓打ち、雀踊を奉納していたとされる。太鼓打ちに関しては、明治四十二年（一九〇九）頃には行われていた。また古写真から昭和四十二年（一九六七）頃には「湯川町小松原雀踊保存会」として湯川神社において雀踊が奉納されていたことが確認できた。

丸山では古くより雀踊を奉納していたが長い期間中断していた。平成二十三年（二〇一一）に復活し奉納が再びされるようになった。雀踊の復活にあたり、古

くからの歌詞は残されていなかった。踊りに関しての資料は残されておらず、現在も笑い祭で奉納している「山野の雀踊」など日高地域で行われている雀踊を参考に復活した。

丸山の獅子舞は大正二年（一九一三）頃以降途絶えていたが、平成二十五年（二〇一三）に復活し、奉納するに至った。

### 二 熊野祭

熊野神社（御坊市熊野<sup>いんや</sup>）

熊野神社は日高川河南地域の御坊市熊野の山間に位置し、氏子は上野口、北野口、下野口、古森、岩内、熊野の六地区となる。

熊野祭は、昭和五十年代後半まで十月十七日に行われていたが、現在は毎年十月の第三日曜日に秋の豊作を感謝する「神嘗祭」として行われている。上野口、北野口、下野口・古森、岩内、熊野の五つが参加しており、上野口、北野口は屋台、下野口・古森、岩内、熊野は四つ太鼓を出している。

### 祭礼日

十月の第三日曜日



6-2 湯川子安神社祭礼保存会による獅子舞

## 組織

熊野神社の運営組織として熊野三人、岩内二人、上野口二人、北野口二人、下野口一人、古森一人の合計で十一人が氏子総代として選出されている。選出の際は各地区の区会で決定される。

また、祭礼組織としては各地区の責任者として年行司が置かれる。岩内地区以外の五地区では大年行司、小年行司を定め、大年行司は祭礼の最高責任者をつとめ、小年行司は大年行司の補助を行い、運営の中心となって祭礼に臨む。

岩内地区では他の地区同様に大年行司が最高責任者としての役割を担う。合同で四つ太鼓を出している下野口・古森では大年行司、小年行司をそれぞれ二地区から一人ずつ選出し、大年行司二人、小年行司二人の体制で祭礼に当たる。毎年、下野口・古森で交互に宿が変わるため、宿を担当する地区の大年行司が最高責任者となる。

その他の参加者は若中と呼ばれ、屋台や四つ太鼓の担い手、乗り子の化粧係、獅子舞の舞い手などを担っている。基本的には各地区ともに任期は一年となっている。

## 次第と構成

### 【準備】

九月の中旬から下旬に氏子総代、年行司、若中が集まり、その年の祭礼実施の有無及び祭次第を話し合う。各地区の出し物は九月中旬頃から宿で練習し、四つ太鼓を出す地区は宵宮の前日までに「ならし」を行う。

直近の木曜日に各地区所定の場所に幟を立てる。

### 【宵宮祭】

宵宮祭は、各地区で屋台や、四つ太鼓を各氏子域で押してまわり、熊野神社で

は通称「納魂のうこん」と呼ばれる神事が行われる。下野口・古森地区、熊野地区では四つ太鼓を九時頃から一六時頃までに氏子域で押してまわる。上野口、北野口、岩内地区では、「納魂」終了後、夜間に各氏子域を屋台、四つ太鼓で押してまわる。

一五時三〇分に各地区総代、子供神輿役員及び各区小学生子供神輿参加者が熊野神社に集合し、一六時三〇分から本殿前にて子供神輿参与祭を行う。その後、一七時三〇分から各地区の年行司、獅子舞担当者、乗り子が集まり、本殿にて宮司による祈祷が行われる。そこで、御神酒とともに干イカ、昆布が振舞われる。これらの行事を「納魂」と呼ぶ。

終了後は、拜殿下の参道にて獅子舞が奉納される。

### 【本祭】

本祭は七時頃に若中が各地区の宿に集まり、八時頃から各地区大年行司の号令で祭礼を開始し、熊野神社を目指す。

一〇時頃に全ての地区が御坊市立野口小学校の南で合流し、各地区の幟が先頭を歩き、上野口、北野口の屋台二基が続き、次いで下野口・古森、岩内、熊野の四つ太鼓が熊野神社を目指す。屋台及び四つ太鼓の順は毎年変わる。各地区は、一一時一〇分頃には熊野神社に到着し、本殿前に向かう。神社境内では、各組の幟は本殿に向かって差立てられ、各地区の屋台、四つ太鼓三基がそれぞれ入る。

熊野の四つ太鼓が本殿前から退出し、一二時頃に本殿にて出興祭（出御の儀）を行い、上野口、北野口が獅子舞を奉納する。獅子舞の奉納後、子供神輿及び各地区の屋台、四つ太鼓は西広場（中申宮跡前）に移動し、昼休憩になる。

一四時頃に本殿にて渡初式が行われ、稚児が参列し、その後、渡御が始まる。順番は次のとおりである。

幟（熊野、北野口、上野口、岩内）、太鼓（荷太鼓）、猿田彦、威儀物、神饌

唐櫃、巫女、神籬（和御霊）、稚児、宮司、子供神輿（荒御霊）、北野口、上野口の屋台、下野口・古森、岩内、熊野の四つ太鼓が続く。

一五時頃には御旅所に到着し、一五時三〇分から駐輿祭を行う。その後、巫女舞と北野口、上野口の獅子舞を奉納する。巫女は、毎年祭礼に参加している地区の小学生の女子が選ばれ、「豊栄の舞」を奉納する。一六時頃に還御の儀を行い、太鼓、子供神輿、威儀物、神饌唐櫃は宝物殿前にかえり、各地区の出し物は解散し、神社を出る。神社を出た後、熊野神社北側県道交差点にて各地区の屋台、四つ太鼓が入り乱れ数十分程度押し合った後、各地区へ戻る。

### 各地区の出し物一覧

上野口	幟・鬼・屋台・獅子舞
北野口	幟・鬼・屋台・獅子舞
下野口・古森	幟（神社へは持参しない）・四つ太鼓
岩内	幟・四つ太鼓
熊野	幟・四つ太鼓

### 屋台の宮入と獅子舞奉納

北野口、上野口の屋台は熊野神社馬場から境内に続く階段を登って本殿前を目指す。到着後は屋台を地面に下ろして回転させた後、四つ太鼓を高く上まで



6-3 北野口の屋台

差し上げ、「サイテクリョウ」と唱える所作を行った後、所定の位置に下ろして獅子舞へ備える。

下野口・古森、岩内、熊野の四つ太鼓が宮入して退出後、北野口、上野口が獅子舞を奉納する。北野口の獅子舞は「大人」が一頭、「子供」が二頭の合計三頭で舞う。獅子頭は黒色、獅子幕は赤色で、「大人」の獅子幕には組印の「おたふく」が描かれている。祭礼当日の宮入後は、はじめに「大人」の獅子舞を奉納した後、「子供」の獅子舞を奉納する。

上野口の獅子頭は黒色であり、白の獅子幕を纏っている。獅子は一頭で舞う。上野口、北野口ともに獅子舞の笛は、大人、子どもを合わせて数人で同時に演奏する。

### 四つ太鼓の宮入

下野口・古森、岩内、熊野の四つ太鼓は本殿前へ続く側面の坂道から本殿前へ向かう。坂道の途中で一度地面へ下ろし、「ヨンヨイ」という掛け声とともに本殿前に移動する。

その後、本殿前で地面に降ろし、四つ太鼓を回転させて「サイテクリョー」の掛け声とともに高く差し上げ、熊野と岩内は「ホーエンヤ」と発しながら、本殿前で押して回る。

下野口・古森は「サイテクリョー」の所作を行う前に「サツサハリシヨ」の掛け声をかける。熊野は四つ



6-4 下野口・古森の四つ太鼓

太鼓を回転させる所作を行うときは「キリキリマイコ」という御坊祭の濱之瀬組と同じ掛け声で行う。その後、四つ太鼓は退場し、馬場にて地面に降ろす。

### 【祭礼日以降の行事】

岩内以外の地区では祭礼日の翌日に「かさやぶち」が行われる。岩内地区の「かさやぶち」は祭礼が終了日直近の土曜日に実施される。上野口、北野口は祭礼日翌日の午前中に野口小学校へ赴き児童に獅子舞を披露する。

### 由来と歴史

熊野神社は、明治四十一年（一九〇八）に岩内の春日神社（岩田・貝生）、王子神社（岩内）、野口の聖徳神社（揚の段）、春日神社（野尻）、金比羅神社（垣内）、熊野の大宮神社（釜屋）が合祀（統日高郡誌）され、現在の祭礼となったとされる。合祀以前の熊野神社の大祭は「申酉祭さるとりまつり」と呼ばれ、日高地域随一の  
大祭であったという。

熊野神社に伝わる「熊野権現宮記録（中村右膳永代直支配願書）」（安永四年（一七七五）写）には、毎年十一月の申酉の日に現在の和歌山県田辺市にある牛の鼻と呼ばれる所まで行列を組んで渡御を行っていたことが記されている。明治四十一年（一九〇八）の神社合祀令後は上野口、北野口、下野口・古森（合同）、岩内、熊野の五地区が別々の時期ではあるが祭礼に参加し、現在の「熊野祭」となった。

地元の若中によると、現在の出し物の中では下野口・古森が古くから四つ太鼓を所有して奉納していたとされ、製作年は不明であるが、熊野祭に参加している地区で唯一「サッサハリシヨ」の所作を行う。この掛け声は丹生祭や土生祭など日高地域東部で多くみられる。下野口・古森の四つ太鼓はこれを「サイテクリヨ」を行う直前、または担ぎ上げるときに非常に速い打ち方で行われ、

管内の四つ太鼓において非常に珍しい所作である。また、熊野地区では四つ太鼓の奉納以前は馬駈を行い、昭和五年頃（一九三〇）から昭和三十年（一九五五）頃までは山車を曳いて参加していたとされる。また、岩内地区では平成十四年（二〇〇二）に四つ太鼓を新調し、それ以前は神輿を押し参加していた。当時は全ての地区の先頭を行き、現在の組印にもなっている天狗も神輿の先頭に立ち参加をしていた。  
（森 真人）



6-5 上野口の獅子舞

### 三 塩屋祭

塩屋王子神社（御坊市塩屋町北塩屋）

祭神は、大日靈貴神<sup>おおひるむちのかみ</sup>。本社額には「塩屋王子宮」とある。神紋は二つ巴。神社本殿は西面して建つ。氏子域は、御坊市塩屋町の北塩屋、天田<sup>あまだ</sup>、猪野々<sup>いのの</sup>・中村、湊の四地区で、王子川の右岸に位置する。

#### 祭礼日

宵宮は毎年十月第三土曜日、本祭は十月第三日曜日。

以前は、十月十七日が幟立て、宵宮が十月十八日、本祭が十月十九日、傘破が十月二十日であった。元は「重陽会」とあるように旧暦九月九日の祭りである。

#### 組織

祭祀組織を構成する単位としては、北塩屋（二百八十四戸）、天田（三十から四十戸）、猪野々・中村（三十から四十戸）、湊（百二十から三十戸）の四つの組がかかわる。湊は、昭和五十六年（一九八一）時には「近年になって天田領と北塩屋領の各一部をもって湊地区が独立したが、この組は祭礼にあたって幟が参加するだけで他の行事は行わない」（『御坊市史』第二巻通史編Ⅱ）とあるが、平成十二年（二〇〇〇）頃に屋台を作り、獅子舞を北塩屋から習い祭りに参加している。

運営組織として、大年行司、年行司、若衆頭がある。保存会はない。年行司は、五十歳代から六十歳代の人から選ばれ、二年に一回交代をする。神輿昇きは、四地区の希望者から選ばれる。獅子を舞うのは二十歳代前後の青年である。

#### 祭礼の次第と構成

##### 【準備】

九月に入ると秋祭り全体会議が開かれる。五地区の区長、氏子総代、年行司、若中頭が集会所へ寄り、祭りの相談をする。平成二十八年（二〇一六）は九月三日に開催された。

宵宮の前日、平成二十八年は十月十四日朝八時から宮役員十四人全員で祭りの準備をした。

##### 【宵宮】

午前八時から馬場でお祓いの儀式の後、祭りの安全祈願祭を行う。参加するのは、北塩屋若中、四つ太鼓の乗り子、屋台鬼、湊若中、天田若中、猪野々・中村若中、宮役員、美人王子の舞をする少女たちである。

一三時から屋台（獅子箱）の宮入があり、美人王子の舞、獅子舞が奉納される。四つ太鼓は一時半頃まで押した。

かつては早朝、北塩屋の氏は浜へ降りて潮を汲み、海藻を拾って家を清めるといふ習慣が行われていたという。

##### 【本祭】

八時から塩屋王子神社で祭典を行う。社務所の「平成二十八年度秋祭り予定表」には「収穫を感謝」とあり、収穫祭と位置付けられている。参加者は、宮総代、各地区区長、年行司、若中代表、美人王子代表、天狗である。

九時、神輿を幕で囲い、神輿へ御霊移しが行われる。そのあと拝殿横に荒ムシロを敷き、お道具持ち十五人、神輿昇き十六人、天狗などが酒盛りをする。また九時一〇分、美人王子の舞手である少女たちが緋傘を掛けられ社参する。

北塩屋では、八時三〇分から北塩屋の屋台が集落内を端から端まで地下まわ

りをする。四つ太鼓は集会所の前に置いてある。北の端まで行き湊の屋台を迎え、神社まで同道する（湊が先で、北塩屋が後に付く）。その後、神社の前を通り過ぎ、王子川沿いまで行ったところに猪野々がすでに到着しているのを迎える。静かに御神酒を飲んで九時四五分出発、同道して神社前まで戻ってくる。天田はトラックに屋台などを乗せ、神社近くまで運んで来る。四地区揃ったところで宮入りする。

神社の広庭へ入ってくると、順に幟差しをする。差した幟は境内の樹木に立て掛けておく。四地区すべての幟差しが終わると、広庭に四基の屋台が横一列に並び、それぞれの前に正方形のシートが敷かれる。額は本殿の玉垣に立て掛ける。

一〇時三〇分、四地区の獅子舞がほぼ同時に始まる。それぞれの舞場の本殿側に鬼が竹杖とササラ竹を持って立ち、その横に笛なども並び、屋台の前にはシンジクや大鼓が並んで囃す。獅子舞は約五〇分間演じられる。

一〇時四〇分、本殿で「初渡り（渡り初め）」の祭典が営まれる。昨年の祭り以後に生まれた乳幼児が奴姿で親に抱かれて参る。

一一時二〇分、獅子舞が終わり、神輿が担ぎ上げられ「エーラク（永楽）ジャー」を練り返し境内を練る。

一一時三〇分、神輿が御旅所へ向けて出発する。神輿には鳥兜を被った天狗がついている。

御旅所への渡御は、「重陽会」の大幟を先頭に四神旗、矛などのお道具、神輿、各組の順である。天田の額、幟、オニ、屋台、猪野々の額、幟、オニ、屋台、笛、幟、湊の額、幟、オニ、屋台、笛、幟、北塩屋の額、幟、オニ、笛、屋台、幟、四つ太鼓と続く。初渡りもこれに従う。

渡御のコースは、神社横の馬場を通って下の道へ下り、王子橋の中程まで行く。サイテクリョウで神輿を捧げ上げたあと、一一時四五分、神輿は神社の鳥

居前を通り過ぎて熊野街道を北行し、八百屋の手前で左折する。鳥居前で幟差しが行われたあと、お道具や屋台などの行列は、鳥居前から左折し塩屋公民館の脇で国道四十二号に出る。信号まで進み、国道を横断し橋を渡り、一二時一八分、北塩屋の屋台が御旅所に到着し、四つの屋台が田の字形に並ぶ。一二時二五分、神輿が国道に出て四つ太鼓と練り、「エーラクジャー」「サイテクリョウ」、または伊勢音頭を歌う。一二時三〇分、神輿が御旅所に着座、その前で四つ太鼓が伊勢音頭を歌いながら練る。

北塩屋漁業会館の前が御旅所となっており、そこに神輿を据え祭典を始める。御旅所はもとは海岸にあったが、国道の付け替えにより移転した。神事と巫女舞のあと、総代他役員、巫女、神輿舁き、お道具持ち等は会館で、若い衆は組ごとに輪になって酒宴を開き、氏子も組ごとに屋外で昼食をとる。

一三時、屋台を神輿の前へ、神社と同じように左から、天田・猪野々・湊・北塩屋の順に横一列に並べ、それぞれの前へ四角形のシートを敷く。一三時三〇分、四地区同時に獅子舞を始める。一四時一八分獅子舞終了、一四時二二分天田の獅子舞終わる。

御旅所からは屋台が通って来た道をたどり神社へ戻る。一四時三三分、お道具が神社に帰着、神輿や屋台は正面の急な石段を上る。馬場の端で幟差しが行



6-6 本殿前に四頭の獅子が並んで舞う

われ、四台の屋台が揃ったところで神輿を先頭に戻り、一五時、神輿を本殿前に据え、北塩屋の屋台を先頭に神社の庭に屋台が戻る。すぐに神輿を幕で囲い霊抜きをして蔵に収める。

一五時八分、境内広庭の右端に重ねてあった幟をいったん左端へ移し、順に幟差しをして見せ場を作る。それを周囲の観衆が驚きの声を上げて喝采する。その後獅子舞を舞い神社での行事は終わる。

### 【祭礼翌日以降の行事】

カサヤブチでは、獅子が祝儀をいただいた家をまわり獅子頭の歯をかみ合わせるカクカクをする。湊では、本祭のあと引き続き獅子が回る。天田は月曜日、北塩屋は別の日に行うことにしている。

### 【奉納芸能ほか】

美人王子の舞は「越天楽」を舞うことになっている。

獅子舞は、北塩屋、猪野々・中村、天田、湊でそれぞれ伝承され、四組が各自演奏しながら同時に舞う。舞いは通して演じられ、何曲も舞い曲が独立してあるのではない。

四つ太鼓は北塩屋だけが伝承する。四つ太鼓が練るときは伊勢音頭が歌われる。四つ太鼓の時に歌う伊勢音頭は、昔はゆっくり歌っていたが、今はいくぶん早くなった。

湊は北塩屋から獅子舞を習った。天田だけ他の獅子舞と舞い方が異なる。天田の獅子は動きが激しい。

獅子舞に演奏する楽器は、屋台に付いた大太鼓（鉦太鼓）、小太鼓（締太鼓）各一、大鼓数人（本来は一）、シンジク（手片鉦）数人（本来は一）、篠笛数人、美人王子の舞を舞うのは、北塩屋の少女六人で、緋の着物を着用している。平

成二十八年は小学二年生一人一年生五人であった。

### 【用具など】

祭りに用いる用具としては、神輿のほかに幟、屋台、四つ太鼓などがある。神輿は頂部に鳳凰を差す。神輿の四隅及び四方の鳥居には榊の枝を立て、正面には稲穂のついた藁を左縄結びし、カケノイオ（鯛一對）を吊る。鯛は、氏子総代が一月前から準備する。腹の臓物を抜き、塩をいっぱい入れて乾燥させたものだという。

額は各地区に一つずつ所有している。額の頂部に付けた町印は、北塩屋が杉玉、猪野々は黒天、天田は白幣、湊は太鼓である。額の四面に書かれた文字は、北塩屋が「重陽会」「御祭礼」「塩屋王子宮」「今日今日」、猪野々は「重陽会」「御祭礼」「猪野々」「今日今日」、天田が「御祭礼」「王子宮」「阿満多」「今日今日」、湊が「御祭礼」「王子宮」「美奈登」「今日今日」で、この祭りが重陽節供に関係することを示唆している。

幟を差すのが祭りでは見せ場の一つになっている。宮元の北塩屋は五反三反二反とあり十本ほど差すが他の三地区は二、三本である。染められた文字を示すと、北塩屋が「重陽会／北若中」「御祭礼／北若中」「北塩屋／北若中」「北塩屋むら」「御祭礼」「御祭礼／北若中」「北塩屋／北浜会」、猪野々は「御祭礼／猪若中」「猪野々／猪若中」、天田は「御祭礼／天田若中」「あまた／天若中」、湊は、「御祭礼／湊若中」「御祭儀／湊若中」「美奈登／湊若中」で各組の若中が祭りを仕切っていることがよくわかる。なかでも「重陽会」の三反幟が重要とされる。幟の寄進者は、個人・若中・地区などであるが、かつて行われていた馬駆けを示すものとして馬方一同から寄進した幟もみられる。

屋台は、各地区に一基ずつある。長持の上に装飾を凝らした唐破風の屋形を載せ、その後ろに鉦太鼓、脇に締太鼓を据えたもので、長持の周囲は波に兎の

文様の紺地の幕で囲う。前後を数人の男で担ぐ。

四つ太鼓は北塩屋だけにある。上部と下部が緋羅紗で覆われ、正面に鳥居、裏面に菊の文様が付いている。井桁に組み、乗り子は小学生男子四人が務める。

### 【衣装など】

若中の衣装は、ヤッコまたは白い長袖シャツに格子柄の腰巻き、帯締め、腹巻き、高地下足袋を履く。各地区の区別をするため、ヤッコと呼ばれる紺半纏または白の長袖シャツの背にカタ（印）を付けているが、御坊祭のようにカタを背に張り付けるのではなく、ヤッコなどは直に刺繍またはプリントしてある。北塩屋では役付きの人は紺ヤッコに白い腰巻きをする。カタは、北塩屋が朱の鳥居、猪野々は瓢箪、天田は「天田若中」と描いた額、湊は「湊若中」の文字の上下に虎と龍の絵である。

神輿に付く天狗の衣装は、鳥兜を被り、鼻高面、迷彩色の袖なしの上衣、同柄のカルサン、手甲、腰に荒縄、顔に手拭いを巻き、白足袋草鞋ばきという出で立ち、屋台につく各組のオニは天田が鉾とササラを持ち、後の三組のオニは竹とササラを持つ。

獅子舞の舞い手は、白足袋白パンツで上半身は裸もしくは白シャツ姿である。

### 由来と歴史

『明月記（熊野御幸記）』建仁元年（一一〇一）十月十一日条に「超山参塩屋王子」とあり、『千載和歌集』に後三条内大臣、『新古今和歌集』徳大寺左大臣がこの地を詠んでいる。「美人王子」と呼ばれる。昭和五十五年（一九八〇）から美人王子に因んで「美人祭」と称し、小学校の女兒数人が巫女装束をまとい、巫女舞（越天楽）を奉納している（『御坊市史』第二巻通史編Ⅱ）。

南北両塩屋浦は山田荘九か村（名屋、北塩屋、天田、猪野々、森岡、南谷、

明神川、立石、南塩屋）の有力な浦としてともに荘の産土神武塔天神社（現須佐神社）の氏下であったが、明治六年（一八七三）、北塩屋、天田、猪野々が分離して塩屋王子社の氏下となった（『御坊市史』第二巻通史編Ⅱ）。

本殿脇に馬場があるが、かつては馬駆けが行われていた。各戸へ寄付集めにまわり、その金で祭りの三日程前から馬を借り、世話をして宵宮に足ならしをする。馬は、地元のほか、和歌山、南部、田辺などから十二頭から十五、六頭集められ、二頭ずつ走らせて優勝馬などを決めた。馬宿を務めるのは希望者、お金持ち、実入りが良い家で、優勝した家は鯛の尾頭付きのごちそうで散財する。北塩屋から馬方六人がでた。（長谷川嘉和）

### 四 森祭

須佐神社（御坊市塩屋町南塩屋）

須佐神社（武塔天神宮）、御旅所（権現磯の浜と馬場と二か所ある）、南塩屋の熊野街道で行事が行われる。

御旅所は「須佐の本といい、須佐の神様がはじめて塩屋へ来られた場所である。（『御坊市史』第二巻）」

氏子域は、御坊市南塩屋、明神川、印南町明神川、南谷、立石



6-7 湊の屋台

## 祭礼日

十月体育の日の前日。以前は宵宮十月九日、本祭十日であったが、体育の日がハッピーマンデーに変わり十日が必ずしも祝日でなくなったので、土日の祭りに変更した。その前は、十月十九、二十日の祭りで塩屋祭（塩屋王子神社）の翌日が祭日であった。

## 組織

氏子域は、御坊市塩屋町南塩屋、明神川、印南町大字南谷、明神川、立石で、御坊市と印南町にまたがり、祭祀組織の単位としては、南塩屋（印は、傾いた盃の中に「南」の文字）、森岡（行政上は南塩屋に含まれるが、集落が離れてあり、須佐神社の宮本になる。印は、赤鳥居に森若中）、切山（印は、扇子に稲穂）、西（印は、瓢箪に西若。西は、南谷、明神川、蕨野、中智、立石を一つにまとめたものであるが、それぞれが祭祀単位となっている。）の四地区に分かれる。戸数が少ないため南谷・明神川・立石が一組となって「南明立」という場合があり、額にも書いてある。各地区の戸数は、平成二十八年（二〇一六）の祭りに参加の各区長に聞き取ったところ、南塩屋三百五十四戸、森岡三十二戸、切山八十五戸、南谷三十五戸、明神川四十戸、蕨野二十二戸・中智十戸、立石十六戸であった。集落の規模が大きく異なり、それが神幸列の役割分担に大きく反映されている。すなわち六十七人のお道具持ちのうち過半の三十四人は圧倒的に戸数の多い南塩屋から出すことになっている。また、氏子総代十一人の内訳は、南塩屋が五人、それ以外の地区は各一人で、この場合戸数の少ない蕨野と中智は合わせて一地区と見なされている。

## 運営組織

祭りの責任者ともいう役を「年行司」という。南塩屋の年行司は若中頭を

卒業した人で任期が三年、毎年一人ずつ交代していく。若中頭も三年で交代する。「大年行司」はもめごとの最終責任者である。（『御坊市史』には、「南塩屋の場合、大年行司は四十五歳から五十歳前後の者三人、若中頭は三十五歳から四十歳ぐらいの九人で、前年の傘破の夜に指名される。」とある）。「西地区」からは「大年行司」を二人出す。任期は一年で再任されることもある。祭りでもめごと（ケンカ）があった場合に治める役だとされる。

青年の団体として、森若中、南塩屋若中、西若中などがあり、神社には総代会がある。

## 祭礼の次第と構成

### 〔準備〕

獅子舞の稽古は約一週間、予備練習を含めても二週間という。獅子舞と四つ太鼓の乗り子が稽古をする。

南塩屋では、九月三十日から毎晩一六時三〇分から二一時三〇分まで笛の稽古をしている。笛が独り立ちして吹けるようになると、腰巻の裾に「笛匠」と縫い取りを入れることができる。屋台の太鼓やシンジュクの稽古期間は一週間短い。

九月四日一〇時から神社で初寄合があり、総代、各区長、各地区若中が出席して今年の祭りについて協議する。『御坊市史』では九月十日。

祭りの約一ヶ月前に幟に用いる青竹を切りに行く。幟差しには、新しい弾力性のある竹が求められるためである。

十月二日（日）は八時から馬場作りで、各地区から割り当ての人数が出る。南塩屋は御旅所の草刈りもする。

十月七日八時三〇分から神社で若中の半数が御祈禱、残りの半数は浜で四つ太鼓を組む。一三時から南塩屋会館や橋など三か所で「幟立て」をする。

須佐神社では、神輿を出し、鳥居の注連縄を掛け替える。

## 【曹宮】

南塩屋では八時二〇分から屋台が地区を回る。そのことを「地下でおす」などと表現する。そのあと小学校まで戻り、金屋道場で額や屋台、幟をトラックに積み須佐神社へ行く。一〇時三五分、森岡の屋台が担がれ、額や太鼓・鉦・笛などの囃子とともに歩いて宮入してくる。

一一時、本殿で神前式が始まり、残りの南若中と森若中が安全祈願の祈祷をする。本殿下の「長床」の前では南塩屋の幟差しが行われ、立てた幟は右端の杉の木に立てかけておく。

一一時三〇分に幟差しが終わると、南塩屋と森岡が並んで獅子舞を始める。本殿に向かって長床の左手で、右（長床に近い方）に森岡、左に南塩屋が荒筵をそれぞれ三枚ずつ敷き並べ、本殿側の石垣の前へ額を立て、反対側に屋台を据え、ほぼ同時に獅子舞を舞う。一二時一八分南塩屋の獅子舞が終了し、同一九分森岡の獅子舞も舞い終える。

森岡で舞いをした（須佐神社は森岡にある）ので南塩屋が先に舞い終わる。本祭は浜で舞うので南塩屋が長く舞う慣例になっている。

午後はそれぞれの地区を回る。南塩屋では、一三時に出発し、大神宮で獅子舞、一四時には浜へ行き「えべっさん」で獅子舞を奉納する。子ども四つ太鼓や二人乗りの女四つ太鼓も出る。夜はそれぞれの地区で地下まわりをする。

## 【本祭】

早朝の暗いうちに南塩屋漁港の逃げ場のあるところで、区長、総代、オニ、笛吹き、有志の神輿昇きたちが禊ぎをする。

朝七時三〇分から須佐神社本殿で総代、区長、若中頭など役員が出席して神

前式を行う。式は八時に終わり、八時一五分、神輿へ御霊移しみたまをする。神輿を下段へ移し、頂部に鳳凰を差し、四方に鈴を掛け、縄を掛ける。神輿を昇く枠を取り付ける。

八時四〇分、神輿昇き、お道具持ち等全員が湯飲みで御神酒をいただく。「ヨイイサッサ」で神輿を担ぎ上げ、社務所と本殿前を三往復する。本殿前と社務所の前では「サイテクリョー」と声を上げ、進んだり走るときは「セーヨジャ、エイラクジャ」を繰り返す。

八時四七分、行列を組んで出発する。行列は、鉦太鼓、赤幟、傘鉦、幡、神子頭、毛槍、幸鉦、弓、金幣、太刀、長刀、唐櫃、神職・巫女、初渡り、雄オニ、神輿、雌オニの順である。東の鳥居を出て、引き返して西の鳥居を出る。九時、森岡を経て、もと宮さんがあった「大神宮」で神前式がある。

九時三〇分、神輿行列が南塩屋に着く。待機していた南塩屋の屋台が迎え、「サイテクリョー」を繰り返して頭上に持ち上げて出合いをする。一〇時過ぎ、西若中が浜に向けて出発する。南塩屋の端、王子橋まで行き、一〇時一〇分、行列を組み熊野街道を南に向いて御渡り、南塩屋の集落を縦断する。行列は、お道具、神輿、森岡の屋台、南塩屋の屋台の順で、屋台の前には額が付く。森岡の額の上には白幣、稲穂、金紙をはさむ。一〇時二〇分、国道に出て関西電力の入口に到着し、神輿や屋台を持ち上げ「サイテクリョー」をする。一〇時三八分、神輿は恵比須神社で少し留まり、屋台は浜に下りたところで留まる。

一〇時四八分、神輿が御旅所へ到着する。一一時、森岡の屋台が御旅所に到着し、御旅所祭（祝詞奏上、玉串奉奠）が始まる。一一時三〇分、祭典が終わり、屋台を並べて三頭（南塩屋が二頭）が揃って獅子舞を奉納する。一二時五分終了。神輿、屋台、四つ太鼓が練ったあと、額（南塩屋）、屋台、四つ太鼓、神輿、四つ太鼓、屋台、額（森岡）が横一列に並び、その背景に幟が並び立つ見せ場を作る。御旅所での行事は終わりお道具も神輿も屋台もトラックに乗せ

て神社へ運ぶ。

一三時、神社で初渡りの祭典が行われる。黒無地の袖口だけ赤い縁取りをしたヤッコを着、兵児帯を締め、格子柄の腰巻き、綿入れの太い帯、白いズボン、お守り袋、ズック靴といった出で立ちの乳児が親に抱かれて参る。

一三時三三分、神輿の神幸列が馬場先にある御旅所に向かって出発する。神輿は社務所と本殿下の長床との間を「エーラクジヤー」と「サイテクリョー」を繰り返して三

往復練る。下の道へ下りても練って行きつ戻りつする。初渡りの子は背に柿の枝を差し、父や祖父に抱かれて続く。幟、額、屋台、四つ太鼓も続く。南塩屋の幟だけで二十二本あった。

一四時二〇分、御旅所祭が始まる。額、幟、屋台などは下で待つ。一四時四〇分、祭典が終わり、下で森岡と南塩屋の獅子舞が始まる。一四時四五分、獅子舞が終わる。

神輿は下道を何度も往復したあと、長床下で四つ太鼓の間に入って「サイテクリョー」と持ち上げられたが、長床の階段を上がり、出発の時のように社務所と本殿下を往復して本殿の前へ据えられ御霊抜きをする。その間も下道では屋台と四つ太鼓が練り「サイテクリョー」を繰り返す。その間を幟がすり抜けしていく。屋台は何度も長床の階段を上ろうと試みるが出来ず、迂回して上の段へ上がってきて行きつ戻りつする。そして一五時五三分、本殿への石段を上がろうと試みる。

このあと、各組は、地下へ戻って獅子舞をする。



6-8 浜で差し上げられる四つ太鼓

#### 【祭礼翌日以降の行事】

祭りの翌日、朝八時から寄付をもらった家全てへ獅子舞いがまわりカクカクをする。婿酒や新築の家もまわるので、朝から夕方までかかる。

#### 構成・演目

森祭で伝承される芸能は、獅子舞と四つ太鼓である。獅子舞は、森岡と南塩屋、四つ太鼓は、南塩屋、西区、切山の三か所で保持している。これが御旅所では南塩屋から二組出て三つの獅子舞が舞う。獅子舞は三つともよく似ている。四つ太鼓は南塩屋から乗り子が二人の四つ太鼓が二台加わり四台となる。二人乗りの四つ太鼓は乗り子が男子と女子とがあり、小学三、四年生の女子が乗る。芸能や演目ではないが、幟を一人で持ち上げて立てるのも見ものになっていく。幟の棹は毎年祭りの一か月程前に切った竹であることから細くしなやかなため立てにくい。

#### 芸態・音楽

獅子舞は、二人が幕の中に入る形式で、伊勢太神楽の痕跡は残すというものの、前役は御幣その他の採り物は用いず、後ろ役は幕に入ったままで幕から出ることはない。獅子舞を舞うときは、ムシロを敷き、笛、太鼓、シンジユク（鉦）などで演奏する。獅子舞の道具を入れる長持の上に屋形を載せたものを日高地域では一般に「屋台」と呼ぶ。屋形があると獅子舞をすることを意味する。その屋台



6-9 御旅所へ向かう南塩屋の幟

の前には大鼓とシンジユクが並び、笛が筵を取り囲み、屋台では鉦太鼓を打つ。舞は一曲を通して舞い、何曲にも区切れてないが、四十五分間も舞うため途中で獅子が寝たり休憩が入ることがある。すなわち幕を被ったまま十分間程舞場で休む。寝ているときは演奏が続き、それも演技の一部かと思わせる。他の者が団扇で風を送ったり、歌を歌って場をつないだりする。芸態としては、獅子頭を両手で支えながら上下左右に振り回し、歯を開閉させてカクカクと音を立てる所作を繰り返すのを特徴とする。

また、舞い手が若者で体力があるからか、足を上げたり仁王立ちになって頭を左右に振るなど大ぶりの動きをするのも特徴といえる。後ろの役は幕を中から大きく広げるなどの動作をする。南塩屋は黒い獅子頭で雄、森岡のは赤いので雌とされ、雄の方が大きいというが、目立った違いがあるわけではない。森岡の獅子舞では後半で舞い手が前後を交代するところがある。

### 設備・道具

祭りの道具としては、屋台、獅子頭、額、幟、四つ太鼓、傘鉦などがある。屋台は長持の上に屋形を載せた形式で、屋形の中に獅子頭を納めるが、長持はなく幕で囲うだけである。屋形と鉦太鼓との間に緋羅紗を黒く縁取りした幟を立てる。

獅子舞の幕は、以前は木綿であったが、現在は麻製になって軽くなったが破れやすいという。南塩屋の獅子の幕には白字で「浦方」とある。獅子頭は、激



6-10 浜の御旅所で舞う獅子舞

しく長時間舞えるように紙製で軽くしてある。

南塩屋の額の四面には、「御祭礼」「須佐神社」「今月今日」「南塩屋」とある。額が一番大切とされ先頭を進む。森岡の額の四面には、「御祭礼」「須佐大神宮」「今月今日」「森岡」、西は、「須佐神社」「御祭礼」「今月今日」「南明立若中」とある。紀里弥満の額もある。

南塩屋の幟は「南鹽屋」の五反幟をはじめ、「南鹽屋／南若中」「南子若」「南鹽屋青年団」「南塩屋／浦方」など数多くあり、「幟祭り」と言われた。南塩屋の「塩」の字は多くが本字の「鹽」の字を用いている。また、「大漁繁栄祭／協栄漁業」「南塩屋／黒川水産」など地元の漁業者も幟を奉納している。このほか、「御立願」「森岡若中」「明神川」の幟もあり、西の幟は少なくとも五本、切山は四本出す。

南塩屋では幟に用いる竿竹を毎年新しく切り出すことになっていて、祭りの一か月前に切る。青竹は比較的細く、しなやかに曲がるので幟を差すのが難しいという。

四つ太鼓は、緋羅紗の天幕と乗り子を囲う緋幕の付いた、日高地域で一般的な形式の四つ太鼓である。天幕の正面や側面には組の印や二つ巴紋などが金糸で付けられている。

赤い傘鉦が一本あり、神紋である二つ巴紋が付いている。

道具を新調すると潮入していたが、平成十年（一九九八）に港湾が整備されて海へ入れなくなり、現在は、宮司に祈祷してもらう。

### 扮装・楽器

祭り装束について、森岡は、紺半纏に角帯または黄無地の長袖シャツ（Ｔシャツ）に腹巻きをし、赤鳥居の中に「森若」と書いた印を背に付ける。下衣は格子柄の腰巻き、タビと呼ばれる黒の高地下足袋を履く。南塩屋は、黒（紺）

の袴纏（ヤッコ）または白い長袖シャツに黒い腹巻き、女の帯締め、格子柄の腰巻き、高地下足袋を履く。西若中の印は、赤い瓢箪に西若とある。

獅子舞の舞い手は白パンツ姿。南塩屋の舞い手は二十歳代男性が務め、昔は大工や左官の人が舞い手になることが多かったという。南塩屋の獅子の幕には二頭とも寄贈／浦方とあり漁業が盛んであることを示すものである。

鬼は神輿に二人、屋台に一人付くが、神輿のオニは赤紫地、屋台のオニは紺地の迷彩色模様でモンペ風の下衣に綿入れの帯を締め、白足袋草鞋履き、頭にガッソウになった茶毛を着け鬼面を被る。神輿付きの鬼は烏兜を被り鼻高面である。雌雄があつて赤いのが雌、雄の顔がきつという。背丈ほどの青竹とササラ竹を持つ。青竹には藁束で作った藁箒のようなものと稲穂、メイ（海藻）、粟を付ける。腰に魚籠や袋を提げる。鬼は途中で出会った幼児の頭をササラ竹で軽く二、三度打つ、すると中には泣き出す幼児もあるので、魚籠には子供にあげる飴などを入れておく。

神輿昇きは、白長袖シャツに白袴、黒高地下足袋、背襷、白の腹巻き姿である。お道具持ちは、背に三つ巴紋の付いた紺半纏を上にはおり、ズボン、靴である。獅子舞を演奏する楽器は、屋台に付いている締太鼓と鉦太鼓、鉦、篠笛、手平鉦のようなシンジュクである。

（長谷川嘉和）



6-11 ササラ竹を持つ鬼

## 五 吉田祭

八幡神社（吉田）（御坊市藤田町吉田）

御坊市藤田町吉田の氏神で、道成寺の西約四八〇mの八幡山に位置している。祭礼は、吉田区の北吉田、出島、津井切、下吉田、藤吉田、天神、道成寺団地、新吉田、吉田道成の小字が参加している。

### 祭礼日

十月第四日曜日

### 組織

祭礼の行事内容は、吉田祭礼余興実行委員会を組織し、そこで協議、決定している。実行委員会は、委員長一人、副委員長一人、事務局兼会計一人、実行委員で構成している。委員長は、宵宮当番の小字区代表、副委員長は、次年度宵宮当番の小字区代表、事務局兼会計は実行委員の中から選出される。実行委員の構成は、神社総代長一人、各小字区長九人、各小字代表者八人、若中代表者、若中在任終了者、その他となっている。

余興行事の実務は、吉田若中が担っている。若頭一人、筆頭数人、四つ太鼓世話役数人、四つ太鼓乗子世話役数人、屋台役数人、四つ太鼓乗子四人、職役、笛役等の役付きがある。吉田区全体で一つの若中を組織しており、年齢の規定はないが、おおむね四十歳未満の若者で構成されている。また、若中を卒業したものは、世話人として、若中のサポートをしている。

### 祭礼の次第と構成

#### 【準備】

吉田祭礼余興実行委員会は、第一回が四月から五月頃に開催され、その年度

の取組について協議され、九月頃に第二回目の実行委員会が開催され、行事の日程確認、寄付金集め等について話し合いが持たれる。祭礼前の十月の初旬に第三回目の実行委員会を開催し、祭礼余興行事のスケジュール、役割分担、寄付金の配分について協議される。

四つ太鼓乗り子、獅子舞、笛等の練習は、吉田若中により十月中頃から始められる。

祭礼の一週間前に神社前の公園に各小字の幟がたてられる。

宵宮の前日は、「ならし」と称し、一九時三〇分から二一時頃まで四つ太鼓が地区内を練る。

### 【宵宮】

九時から一五時頃まで屋台を担いで区長や宮総代の自宅前を通りながら地区内をまわる。

一六時から二一時頃までは、乗り子の自宅前などを通りながら四つ太鼓が地区内を練る。

平成十一年（一九九九）から北吉田、天神、出島、藤吉田、下吉田、津井切の各小字にある集会場を一年ごとに順番に吉田若中の宿にしている。

### 【本祭】

屋台と四つ太鼓が一〇時三



6-12 吉田祭の四つ太鼓



6-13 吉田祭の獅子舞

〇分に藤田会館を出発し、一二時三〇分頃、神社前に到着する。そこで、幟差しを行う。一三時から宮人を行う。

一三時五〇分に神社から子供神輿が出発し、途中、平成二十三年（二〇一一）から始まった宮子姫顕彰会による宮子姫時代行列と合流し、一五時頃まで神社周辺を行進する。

一四時から神社で吉田若中の神事が行われ、その後昼休憩に入る。

一五時から神社境内で獅子舞の奉納が行われる。獅子舞の奉納が終わると、神社前の公園で待機していた四つ太鼓が出発し、屋台や幟も神社の長い階段を下りて、神社から出ると宮人終了となる。

宮人終了後は、夕方から藤田会館周辺で四つ太鼓が練り、二〇時から幟差しと獅子舞を舞い、二一時三〇分頃終了となる。

なお、宵宮と本祭の時刻は令和元年（二〇一九）の調査による。

### 【祭礼翌日以降の行事】

十二月頃、吉田祭礼余興実行委員会が開催され、その年度の祭礼の反省、会計報告、次年度の予定等が協議される。

## 由来と歴史

長く神事のみであったが、平成六年（一九九四）、地域の代表者、神社の代表者からなる「吉田八幡神社祭礼余興実行委員会」を組織し、「新よしだ祭」として現在の祭礼の原型がスタートした。当初は、前年に生まれた吉田区の女の子にご祈祷した宮子姫人形の進呈、宮子姫を描いた五反の絵幟作成、親子神輿などであった。

平成九年（一九九七）年度から四つ太鼓新調の機運が高まり、準備を進め、平成十年（一九九八）の祭礼から四つ太鼓が参加している。参加にあたっては、御坊祭参加の紀小竹組に乗子の太鼓のたたき方等について指導を受けた。

平成二十八年（二〇一六）からは、獅子舞の奉納を行っている。獅子頭、獅子幕、太鼓、どろ幕等は新調し、屋台は、御坊祭参加の下組から以前使用していたものを譲り受けた（明治の紀年銘がある屋台箱も一緒に譲り受けている）。獅子舞、笛等は、四つ太鼓と同じく御坊祭参加の紀小竹組から指導を受けた。

若中組織は、平成六年以前から小字に存在しており「幟たて」などを行っていたが、平成八年（一九九六）に「各小字区の若中の親睦を深め、より多くの若い人の交流を広げるとともに、若い力を結集し、将来的になお一層地域文化遺産の継承と創造発展を図ろう」という目的で「吉田若中」を結成した。

（前田和彦）

## 六 志賀祭

志賀王子神社（日高郡日高町大字志賀）

日高町志賀に鎮座する志賀王子神社は、志賀六地区の氏神として奉仕されており、柏、上志賀、久志、中志賀、下志賀、谷口が祭礼行事に参加している。

### 祭礼日

十月体育の日の前日であるが、かつての祭礼日は重陽の節句として、旧暦九月九日であった。昭和初期に新暦十月十七日に改められ、その後、体育の日の前日に改定された。

### 組織

各地区では祭礼組織として、若中を組織しており、およそ高校生から四十二歳までの男性が加入している。かつては十五歳の元服期より強制参加となっており、二十五歳までに若い衆頭（若頭）に就任し、祭礼行事の執行責任を負い、四二歳で年行司となって祭礼行事全体責任者を任されて退任となった。現状は、人不足の影響を受けて年齢通りにはいかない傾向が出ている。

一方、神社組織としては宮総代が六地区それぞれ一人ずつ選出され、六人より一人選出され総代長が選ばれている。宮総代は年間を通して、神社維持及び月次祭の執行に参加しており、その中でも六地区が一年交代で執り行っている持ち回りの神事芸能「鬼獅子」の当番である「鬼番」を務める地区が祭礼行事を執行する責任を持ち、その地区の区長が総責任者となる。

祭礼行事を担う若中は、「諸芸」といわれる奉納芸能を担っている。

## 次第と構成

### 【準備】

本祭までに行う獅子舞の練習などは「ナラシ」といわれ、二週間ほど行われた。昭和初期までは「宿」を定め、民家を借り受け、庭でナラシを行った。宿は一定の財力を有する有力者の屋敷を宛がう場合と、隣組織のような家並みを一組として組単位で宿を設定し、かかる諸費用を共同で賄う場合もあった。現在は戦後に設けられた集会場を宿としており、個人の家を宿とすることはなくなった。宵宮の前日の夕刻に集会場前に幟が立てられ、祭りの始まりが告げられる。

### 【宵宮】

宵宮はヨミヤともいわれ、当日は、屋台や山車などの組み立てが行われ、祭礼準備が始まる。また鬼番地区では鬼の持つ鉾に取り付けるホンダワラを採取するため、鬼役および世話人は柏地区の浜へ赴き、「鬼の潮浴び」が行われる。その後、鬼獅子を柏地区で奉納し、ヨミヤ行事が始まる。ヨミヤ行事より若中は正装で祭りに参加しており、ハッピー姿にオコシ、地下足袋となる。

ヨミヤは各地区の地下まわりを主とし、区長、年行司、若い衆頭の自宅を屋台、山車にてまわり、獅子舞が奉納され、夕刻には弓張り提灯、高張提灯に火が灯される。

### 【本祭】

本祭当日は六地区それぞれが祭具を持参して、早朝より志賀王子神社へ参集する。境内には各地区の「屯所」<sup>とんしょ</sup>が設けられており、全ての地区が到着後、本殿式を行い、祭礼行事を開始する。午前中は、本殿式後に鬼当番による鬼獅子が奉納され鬼番とは逆の順で各地区の諸芸が奉納される。各地区の諸芸の詳細

は左記の通りである。

- 柏 幟・屋台・獅子舞・(唐船)
- 上志賀 幟・太鼓台・獅子舞・(子踊)
- 久志 幟・屋台・獅子舞・(萬歳)
- 中志賀 幟・屋台・獅子舞・山車・(四つ太鼓・奴踊)
- 下志賀 幟・太鼓台・獅子舞・山車・奴踊・(四つ太鼓・三番叟)
- 谷口 幟・屋台・獅子舞・(四つ太鼓・山車・奴踊)

過去の志賀祭の特徴は、各地区の奉納芸能が多岐に渡り、ほとんど同じ芸能を奉納していないということである。

中でも大道具としての中志賀、下志賀、谷口の四つ太鼓は、明治後期の祭り争いによって廃止となり「下志賀区有文書」に、明治四十三年(一九一〇)の村会議によって、「賑わい物」として、四つ太鼓及び三番叟の廃止を決定しており、復活は許されなかったといわれている。その後下志賀と谷口は四つ太鼓の廃材を用いて、山車を作り、囃子は美浜町和田地区より習い受け、新たに取り入れたとされる。中志賀では山車の囃子の中に四つ太鼓を囃し立てた伊勢音頭が残されており、日高地域でも珍しく、大太鼓、小太鼓、笛、唄によって囃されている。



6-14 下志賀の奴踊

奴踊は、下志賀は昭和中期に土生祭の小熊地区より習い受け、復活した。

屋台を持つのは、柏、久志、中志賀、谷口であるが、柏の屋台は唐船の宮居部分を屋台に改良したものであり、上志賀、下志賀は大鼓台となっているが、屋台の古い形態を残しているといわれている。

また幟は村印として重要視されており、行列の先頭に立ち、一人で差し上げる幟差しによって力業を示し、幟を片手で差し上げたり、背中に回したりする曲芸によって観客を沸かしたという。

諸芸奉納の最中はオニ役らが本殿前で両脇を警護し、本殿前の人払いをする。諸芸奉納において先に奉納する地区が後に奉納する地区の年行司に諸芸を先に行う旨を挨拶する習わしがあり、先の地区が奉納の終了を告知しなければ、次の地区は動くことができない厳格なしきたりが残されている。

挨拶の間は諸芸奉納が行えないので、オニ・ワニの二人が飴や菓子を撒き、子供たちを沸かせているのも特徴である。オニ・ワニが持つササラで頭を叩いてもらうと元気で健やかに成長できるといわれている。

奉納のメインとなる獅子舞は、各地区趣向が違い、柏、久志は肩車を行う曲芸が伴い、上志賀は日高町原谷の獅子舞を習い受けたという。中志賀の獅子舞は地舞を中心としてゴシヤクを挟み、暴れ舞うが、下志賀の獅子舞と酷似している。下志賀の特徴は、獅子とチョスリという道化がふざけ合う内容であり、谷口は明治期中志賀より習い受けた獅子舞を奉納している。

獅子舞は、いずれも二人立てで、獅子頭は紙製を用い、太鼓、バツテコ（締め太鼓）、笛によって囃される。

下志賀の奴踊りは、太鼓台を中心に輪になって踊り、カイラギを持ち、化粧回しを付けた先奴を先頭に唄に合わせて踊らされている。

六地区の芸能奉納が終わると、渡御となり、各地区より四十二歳以上の二人ずつ選出された神輿昇きが担ぐ神輿が境内に出てくる。神輿は右回りに境内を周

り、頃合いを見計らってオニ・ワニに先導されて御旅所へ向かう。

渡御の行列も鬼番の順で定められ、神輿を先頭に六地区が渡御する。神輿のみかつては遠担ぎとあって、柏地区方面まで出向いたが、現在は、近場で休憩をする。御旅所前には志賀川を現在は橋を渡って御旅所に向かうが、昭和初期までは、各地区の屋台や山車も川渡りを行い、幟は仮橋を曲芸を披露しながら進んだという。

御旅所に神輿が到着した後は、鬼獅子を奉納し、境内とは逆の順番で再度各地区の諸芸が奉納される。神輿の還御は、すべての諸芸が奉納された後であり、神輿は神社へ、各地区は遠い順にお戻りとなって祭りは終了となる。

#### 【祭礼翌日以降の行事】

本祭りの翌日はカサヤブチといって、祝儀を貰った各家をまわり、獅子舞を披露した。現在はカサヤブチの行事は簡略化され、祝儀の御礼に回るだけで、獅子舞の奉納は行われない。



6-15 中志賀の獅子舞

## 由来と歴史

志賀祭の歴史は定かではないが、明治十五年（一八八二）作成の「村社祭典規則」や久志の萬歳の台本が寛政年間（一七八九〜一八〇一）のものであることから、江戸期には現在と同じ形で祭礼が行われていたことが推測される。また日高地域で四つ太鼓や奴踊が奉納される北限に位置している。

伝承によれば、志賀王子神社の祭神は柏葉の船に乗り、柏の浜に漂着、その後現在地まで移動を繰り返して、鎮座したとされる。柏地区では沙櫓<sup>さろう</sup>神社を村氏神としており、柏葉の船の棹差しを行った祭神を奉祀したという。また戦前まで行われた柏地区の村祭りでは、小舟に少年を奉祀し、柏の浜から神社まで練り歩いたという。これは志賀王子神社の祭神の漂着を再現しているといわれていた。

（裏 直記）



6-16 柏の獅子舞

## 七 内原祭

内原王子神社（日高郡日高町大字萩原）

氏子域は、日高町大字萩原、荊木<sup>いばらき</sup>、高家<sup>たいえ</sup>、池田の四地区である。もとは東内原村萩原、東内原村荊木、西内原村高家、西内原村池田であった。昭和五十年刊行の『日高町誌資料集』によると、氏子は、萩原二百戸、荊木百五十戸、高家百四十戸、池田五十戸とある。

神社は萩原と高家の境界、原谷川（西川）と池田川の合流点に位置する。

### 祭礼日

毎年十月十七日に近い日曜日。これは十七日の祭礼日を日曜日に変更したためで、明治三十年（一八九七）までは陰暦の九月が祭日であった。

### 組織

氏子が四つの区にまたがっているため、氏子総代も各区一人、区長が氏子総代を兼ねている。氏子総代は神社側の役員で、祭りを行うのに例大祭実行委員会が組織され、宵宮と例祭日の次第などの詳細を決める。

各区では祭りを行う組織を若中といい、ゆるい年齢階梯制をとっている。萩原では、高校卒業から三十五歳までが加入し、その上四十五歳までを準若中、その上を世話人という。萩原は集落内が上下六つに分かれているので若中の年行司が六人、長老的存在として大年行司が三から四人いる。世話人の中から大年行司が選ばれる。任期は原則一年である。荊木では大年行司一人、年行司六人、獅子舞頭一人、獅子舞を担当する人を獅子舞連といい、若中は十八歳から五十五歳（以前は五十歳）までである。高家では、大年行司一人、年行司一人、若中頭四人、年行司以下が若中で、若中頭の中から年行司を選び任期はないがだいたい三年から四年務める。三十八歳から九歳の人になる。

## 祭祀の次第と構成

### 【準備】

平成三十年（二〇一八）度は九月一日に例大祭実行委員会が社務所で開催され、神職、総代四人、各区年行事代表八人、鬼獅子代表萩原の二人が出席した。それによると、宵宮は主として祭りの準備にあて、諸行事は例祭日に行われることとなった。

### 【宵宮】

宵宮は、諸芸清祓が五時から一時間おきに、荊木、高家、萩原の順（宮入の順は抽選）に行われ、八時から神職・総代長・総代・各区長らで社殿と境内を清掃し、祭りの準備をする。一二時からは鬼獅子の清祓、一三時三〇分から池田若中の清祓がある。二〇時すぎから池田が神社で奴踊りをする。平成三十年は鬼獅子の清祓を午前に繰り上げた。

### 【本祭】

祭礼日の八時から、神輿の組み立てをする。一一時から神前式、総代長、総代、各区長、鬼、獅子の師匠および役人が参列する。神前式の後、一一時四〇分から二〇分間隔で、萩原、荊木、高家、池田の順に宮入する。最初幟が宮入し、四つ太鼓や屋台が続く。幟の数は、萩原一本、荊木一本、高家五本、池田二本で、境内で幟を差す幟祭りであることに変わらない。四つ太鼓などは鳥居の前でしばらくの間練り（地元では「ねばす」という）、なかなか鳥居をくぐらない。中に入ってから境内で時間いっぱい練り歩く。練ったあと、屋台などを所定の位置に据え、四つ太鼓の乗り子は肩車して本殿に参る。鬼は境内を回り、さらさらを参拝者の頭に軽くちょんちょんと当てて回る。池田だけは四つ太鼓や屋台がなく、奴踊りを演じる。池田の持ち時刻となると、額を先頭に参道

を進む。額の先端には白幣と榊を指し、四面に「福一満虚空蔵宮」「諸願成就」「今日今日」「池田」とある。裨纏を腰に巻き手拭いでほおかむりをした男たちが一列になって片足でケンケンしながら後に続く。これを俗に尻振り踊りと呼んでいる。最後尾に榊太鼓が続く。この太鼓は鳥居前で回転させたり頭上高く持ち上げたりするが、打ち手は太鼓に乗ったまま打ち続ける。

宮入が終わると、一三時から童巫女（小学五年生女子十二人）による豊栄舞が奉納され、その間オンの鬼が本殿側、メンが鳥居側に警護するかのように対面して立つ。続いて鬼獅子が奉納される。ここまでが神事に該当し、この後は各氏子地区が余興として演じる獅子舞や奴踊りといった諸芸となる。

諸芸が終わると、一四時四三分、「内原王子」の赤い幟を先頭に御旅所へ渡御となる。四地区から三人ずつが出て神輿を昇き、前後にオンとメンの鬼と獅子が付く。神輿を頭上高く差し上げたときはサイテクリョーと叫ぶ。神輿の行列のあとに諸芸が籤の逆順に続く。御旅所は萩原の集落のはずれにある。一五時三分、御旅所に着くとすぐに神輿の前で御旅所着御祭が営まれ、鬼獅子が奉納される。そのあと、順次到着した諸芸が御旅所下の道路で演じられ、小休して飲食したのち、一六時一五分発興祭をした後、四地区いっせいに余興を上演。十七時二分、薄暗くなりつつあるなか御旅所を出発、神輿の行列は神社へ還御し、四つ太鼓などは提灯を点し、三叉路まで戻ったところで四地区の行司、若頭等が役提灯などを前に並べて対面し、代表が挨拶し来年を約して万歳、それぞれの地区へ戻っていく。

## 【奉納芸能】

神前式に神楽として行うのが、豊栄の舞（乙女舞）と鬼神楽、そのあと余興として、萩原、荊木、高家が獅子舞と四つ太鼓、池田が奴踊を演じる。

神事としての鬼獅子は、萩原、荊木、高家の順に年番で勤め平成三十年は萩原が当番であった。池田は戸数が少ないせいかな当番から外れている。

萩原、荊木、高家は、それぞれ獅子舞と四つ太鼓を伝承し、池田だけ奴踊りを保持している。令和元年は都合で池田の奴踊りは出なかった。獅子舞は萩原の獅子が雌獅子で荊木と高家の獅子は雄獅子という。

四つ太鼓は伊勢音頭に合わせて乗り子が掛け声を掛け太鼓を打つ。

鬼獅子は、最初の八分間ほど鬼だけの演技があり、両鬼の所作はほぼ同じ動きをする。後から獅子が静かに加わる。獅子舞は幕に二人が入る二人立ちで、太鼓や笛の演奏はない。獅子はオン、メンの周囲を巡り、足を上げ大地を踏みしめる踊りのような所作もあり、地面に立てたオンの鉾を嘗めるような仕草で絡む。そして静止して休み、再びオンの鉾に絡む舞である。

余興としての獅子舞は、屋台を伴うもので太鼓と笛の演奏が入る。萩原では舞場に荒ムシロが敷かれ、四つ太鼓の乗り子が肩車してもらい、後ろから見る。

高家の獅子は白いシートの上を飛び跳ねるように頭を激しく上下に上げ下ろ



6-17 内原祭の鬼獅子

し、ときにテンポよく舞う。獅子が立ったまま眠ると笛太鼓が鳴り止む。やがてひとり笛と締太鼓の縁を打つ音に獅子がゆっくりと動き出し、獅子頭を地に付け天に向け高く上げ激しく舞う。笛は十数人が二列になって演奏する。

萩原の若中は、小太鼓、大太鼓、笛を経験した後獅子舞を務める。九月末から約一か月稽古を積んで祭りを迎える。荊木の若中は、二十歳代のものが獅子を舞う。屋台に付く鉾止めの太鼓と締太鼓、笛は多数が演奏する。池田の若中は中学卒業から五十五歳までの男子で、輪になり自ら歌いながら踊る。



6-18 荊木の獅子舞

## 【用具】

荊木の獅子頭は黒いので雄だという。荊木には、四つ太鼓と屋台があったが、昭和三十二年（一九五七）の室戸台風で青年会場の倒壊とともに破損した（『日高町誌資料集』）。

高家の獅子頭の髪は多色で、紺地に牡丹の幕を付ける。

幟は横幅の大きさに合わせて二反、三反、五反とある。特徴的なのは、幟の棹先に付けた笹を束ねて半円形に曲げ、もう一方の幟旗の先に付けることである。

『日高町誌資料集』には、「現在余興物道具は萩原四ツ太鼓太鼓一、屋台一、高家屋台一、荊木には四ツ太鼓太鼓一、屋台一あったが、昭和三十二年の室戸台風で青年会場の倒壊と共に破損してしまった」とあるが、現在では三区とも屋台と四つ太鼓を保有している。

## 【衣装等】

鬼は赤い鼻高面（猿田彦）をオン、角のある赤い鬼面（宇豆米）をメンという。ともに赤の烏兜を被り、長袖の上衣と足細の袴に白足袋草鞋履き、膝を荒縄で結ぶ。右手にささら、左手に鉾を持つ。

池田の奴踊の衣装は、先頭の先奴が赤いエボシ（頭巾）に化粧回し、カイラギ木刀を腰に差す。ほかの奴は小さなエボシを着ける。

祭りに参加する若中の衣装は四地区ともほぼ同じで、上衣は長袖シャツに袴纏、下衣は股引に腰巻、その上に腹巻きというスタイルであるが、各区微妙に差を付けている。萩原は、白シャツ、白股引、白袴纏と白で統一し、荊木は上下黒（紺）で統一し、高家は白シャツ、白短パン、紺半纏で、地下足袋なども、衣服に合わせている。池田だけは先奴がカイラギ（木刀）を腰に二本差し頭に赤頭巾を被り、それ以外の人はミニチュアの赤頭巾を頭に付け、何人かは地下足袋に荒縄を二重に巻いていた。また、高家は白と茶の段だらの帯を腰に巻く。

それぞれの区を示す印とシンボルカラーがあり、ヤッコ（または袴纏）やシャツの背に印を付け、区を示す色の手拭いを首に掛けています。萩原は印が朱の鳥居に「萩原」で色はピンク、荊木は黄瓢箪に色は黄色、高家は五弁の紅梅に色は紫、池田の色は赤であるが、背に何も付けていない。

## 由来と歴史

『日高町誌資料集』によると、内原王子神社は、明治二年（一八六九）に若一王子権現宮から王子神社に改称した。社地は高家王子跡とされ、祭神は皇太神、高家荘の総社であった。配祀合祀神社が二十三社も上がっており、多くは明治四十一年に合祀されたものと推測される。

御旅所は、神社の北五〇〇mにあり、三〇〇mの競馬場がある。大正初期まで祭りに競馬を行った。

豊栄舞について『日高町誌資料集』には、「十二、三才の女子六人により舞をする。昭和三十五年に始めた」「この舞は那智大社の西田御子により講習を受ける。現在に至った神楽である」と四人の名前を列記してある。

高家の芸能について、獅子舞は日高町原谷から習い平成二十年（二〇〇八）から参加している。四つ太鼓は、御坊の新町へ移り住んだ人の仲介で新町から習った。幟差しは今から十年前の平成二十年に川辺町（現日高川町）和佐から習ったとされる。

池田から日高川町土生八幡神社の小熊へ奴踊を大直だいなおという人が教えに行ったり伝えている。雀踊は池田より出ていたが昭和十三年（一九三八）より廃絶している。揃いの袴を着、丸帯を締め、化粧前垂れを着け、花笠を被り、日の丸扇を持ち、三味線および締太鼓、足拍子に合して歌詞につれて踊る。八歳より十二歳までの男子で見事である（いずれも『日高町誌資料集』）。（長谷川嘉和）



6-19 荊木の幟



6-20 荊木の屋台

## 八 丹生祭（笑い祭）

丹生神社（日高郡日高川町大字江川）

日高川町江川に鎮座する丹生神社で催される丹生祭は、別名「笑い祭」と称し、山野、江川、和佐、松瀬の四地区が祭礼行事に参加している。

丹生神社の呼称は、明治時代に改名されたもので、現在の丹生神社の社地は「江川八幡神社」である。明治四十一年（一九〇八）に実施された神社合祀令によって近隣の神社を江川八幡神社に合祀し、その大半が丹生津姫命を祀っていたため「丹生神社」と改称したという。

本来の江川八幡神社の氏子は松瀬、和佐、江川、玄子、早藤、若野であったが、神社合祀によって玄子、早藤、若野が氏子から離脱、山野が新たに氏子に加わり、現在の形となった。

### 祭礼日

十月第二日曜日

### 組織

丹生祭の祭礼組織は、各地区に組織されており、若中を名乗っている。江川若中はおよそ十八歳から四十歳くらいまでであり、四十歳くらいで祭礼委員長を一人選出し、副委員長が同世代か一つ年下の年代から選ばれる。さらに青年の中で先奴を務める者は独身者であり、刺繍入りの奴頭巾をかぶり、奴姿に帯締め、脚絆を付け、委員長と先奴のみ足元は草履となっている。その他若中は、赤い奴頭巾をかぶり、奴姿にオコシをまき、帯締めで脚絆、地下足袋姿である。

### 次第と構成

#### 【準備】

祭りの準備は宵宮前日の傘揃えから始まり、各小字毎にダン幟と呼ばれる幟を立て並べるが、かつて合祀以前の江川八幡宮の祭礼は「幟祭り」といわれたほど、幟の多い祭りであった。

#### 【宵宮】

宵宮はヨミヤといい、江川地区は昼前から丹生神社境内にて奴踊り・獅子舞を奉納し、四つ太鼓にて地下まわりを行っている。

#### 【本祭】

本祭は朝八時頃に神輿が、御旅所に到着し、それに合わせて、山野、和佐、松瀬の一行を江川の鬼が出迎える「鬼の出会い」が行われる。それぞれが御旅所横に参集し、額、傘、幟が揃うと和佐の踊獅子（鬼獅子）が御旅所で奉納され、各氏子地区の諸芸奉納となる。

各地区の諸芸は左記の通りである。

江川 ドウセ太鼓・傘鉦・額・赤幟・屋台・獅子舞・四つ太鼓・奴踊

和佐 幟・額・傘鉦・屋台・獅子舞・四つ太鼓・踊獅子・笑い神事

松瀬 幟・屋台・獅子舞・小幡・竹馬

山野 幟・屋台・獅子舞・四つ太鼓・雀踊

御旅所横では、四地区が一斉に獅子舞を奉納し、終了後、神輿は還御となつて、四地区はそれに従って神社を目指す。神輿が神社に到着した後に、和佐の笑い神事が行われ、柙に刺された供物は参拝者に配られる。四地区は馬場より

境内に入り、四つ太鼓が盛大に練り歩く。四つ太鼓の囃子などは、各地区特徴があり、和佐、山野は「サツサハリシヨ」が基調で、道中は伊勢音頭を囃す。

これは山野が和佐から四つ太鼓を習ったからといわれている。また江川は「ホーエンヤホーランエ、ドヤサノサ」で囃し立て、道中は伊勢音頭で進む。江川の四つ太鼓は、昭和中期に御坊市紀小竹組より習い受けたといわれている。

全ての地区が宮入すると、まず、和佐の踊獅子が奉納される。踊獅子とは、オニ・ワニが鳥兜をかぶり、鉦とササラを持って獅子と対峙する無音の獅子舞である。丹生祭においては、明治時代の神社合祀によって祭祀行事が合同で行われるようになったため、合祀以前に各神社で行われた芸能が、現在の祭りに奉納されていることが特徴である。

「踊獅子」が終了すると、各氏子地区の諸芸奉納となり、松瀬では、竹馬と称して、少年が春駒に跨り、境内を駆け抜ける。

山野の雀踊は、その来歴は不明であるが、三味線と拍子木、唄による囃子に合わせて、ほっかむりをした山野若中が輪踊りをしながら歌い踊る。

江川の奴踊は、先奴を中心に輪踊りをなし、先奴の問答形式の唄に合わせて、奴衆が唄い、踊る様は豪快である。御坊祭の奴踊とは一風変わった形式である。

各地区の踊り奉納が終わると、境内で四地区が一斉に獅子舞を行う。獅子舞は四地区同じ系統であり、ムシロを三枚敷いた上で二人立てで舞われる。



6-21 山野の雀踊

囃子は、太鼓、締め太鼓、笛であるが、獅子はムシロから出ない舞い方であり、日高地域の過半数を占める舞い方である。

獅子舞が終了となると、四地区は帰路について、祭りは終了となる。

### 由来と歴史

江川八幡宮の祭礼では、中世領主であった玉置氏の氏神として放生会が執行され、応永から天文年間（一三九四～一五五五）の祭礼における座順を記した古文書が残されている。

江川八幡神社の祭礼は、旧暦八月一日に執行され、『丹生村郷土誌』によれば和佐地区は、奴踊のみを奉納しており、その他の地域は獅子舞、雀踊、相撲、馬駆などその内容は多彩である。

現在執り行われている「丹生祭」自体は、和佐地区「丹生神社」の神事を踏襲したものであり、旧暦十月卯日に宿老（鈴振り）一人が袴を着用し、野山の珍珠を串にさし、それを一升枡に入れて掲げ、子ども達は竹を割いた物に同じく野山の珍珠をさし、掲げながら笑いをもって渡御するというものである。神社合祀後、一時途絶えた時期もあったようであるが、その後和佐地区有志によって復活し、枡持ち十二人、鈴振り一人という現在のスタイルにいつしか変化していった。現在の鈴振りは「道化」化したものであり、本来は袴姿の宿老がその任に当たっていた。先述の通り、丹生祭は明治時代の神社合祀令によって松瀬の里神社、江川の江川八幡神社、和佐の丹生神社、山野の丹生神社それぞれの祭祀行事を踏襲している。

松瀬の里神社では獅子舞、竹馬、馬駆けなどが行われていたが、合祀後は、竹馬と獅子舞が行われるようになった。

江川では、江川八幡宮が中世の領主の氏神であったため、中世より宮座の祭祀組織が形成されていたことを先に述べたが、近世に至って祭礼の様式が変わ

り奴踊、獅子舞、相撲、馬駆けなど盛大に祭礼が行われていた。なかでも祭具であるドウセ太鼓と同じ形状の物は、志賀祭での下志賀地区、土生祭の小熊地区などでも確認でき、練り込みの際や道中の囃子に用いられる。

和佐では丹生神社の祭神である丹生津姫大神の伝承が伝えられている。神無月の出雲に赴く際、寝坊した丹生津姫大神が、慌てて出雲に出立した際に、松の大木に着物が絡まり、裸になってしまい、恥ずかしくて神社に籠ってしまつたのを、氏子達が笑って外に誘いだしたという。これが笑い神事の始まりであり、奇祭といわれた所以である。

また和佐では古くから四つ太鼓を所持しており、山野に教えたという話が伝わっている。かつては奴踊も奉納されていたが、現在は廃止されている。古くより江川八幡神社の氏子でもあり、旧暦八月十五日の放生会には「出祭り」として、参加しており、その際は奴踊のみで参加していたとされる。合祀前の丹生神社の祭礼には、獅子舞なども奉納しており、現在は、丹生神社の祭礼で行っていた笑い神事、踊獅子、獅子舞などが残されている。

山野の丹生神社では馬駆け、山車、獅子舞、雀踊が行われており、雀踊が明治期にはすでに存在していた事が示唆される。その後合祀によって山車が四つ太鼓に変わり、雀踊、獅子舞が残された状態である。

(裏直記)



6-22 江川の奴踊



6-23 和佐の笑い神事



6-24 和佐の鬼の出会い

## 九 土生祭

土生八幡神社（日高郡日高川町大字土生）  
日高川町土生に鎮座する土生八幡神社は明治時代における神社合祀令によって土生、鐘巻、千津川、中津川、玄子、早藤、入野、若野、小熊、藤井という非常に広域な氏子域を持つにいった。

### 祭礼日

十月第三日曜日であるが、かつては旧暦八月十五日の放生会であった。

### 組織

土生祭における祭祀組織は、藤井では地区が広大なため、東、西、南、北、

中、下に加え宮田・駅前八組に分け、祭りにおける宿や当番を分ける御坊祭の御坊町のような形式で組織され、総取締、取締、会計、中老年行司、年行司と責任者を置き、四十歳までを若中、四十歳以上を中老と分けている。

一方、小熊は親年行司を四十歳で務め、その下に子年行司二人をおき、若中をまとめている。

どの地区も衣装は奴装束、もしくは長襦袢に腹巻、御腰、地下足袋姿であるが、近年ではタツツケ袴が多くなっている。

## 次第と構成

### 〔宵宮〕

宵宮は、早朝に鬼役を務める者が美浜町の海岸に潮かけに行き、鬼の鉾に付ける海藻を拾ってくることに始まる。昼過ぎには各地区の宿にて獅子舞が舞われ、屋台や四つ太鼓の地下まわりを中心に行事が進められる。

### 〔本祭〕

本祭は、朝八時より各地区宮入を行い、幟を境内に立て並べる。神事後、神輿渡御となり、神輿を先頭に各地区の祭具が供奉するが、神輿はお頭神事の当番地区に向くため、渡御時間は年によって長くなる時がある。

御旅所に到着後は、お頭神事と呼ばれる双頭の獅子舞が奉納される。獅子は、鬼面、ハナタカ面両者が持つササラの音を頼りに対峙し、穢れを払い清める。このお頭神事は、氏子内の当番制である。

その後、各地区の幟差し、小熊の奴練り込みの後、奴踊が奉納される。奴踊の後は、渡御順での獅子舞奉納となる。

現在の各地区の諸芸は以下の通りとなっている。

小熊 幟、奴太鼓、四つ太鼓、奴踊

土生 幟、鬼、屋台、四つ太鼓

藤井 幟、屋台付きの赤幟、纏、鬼、屋台、四つ太鼓、(奴踊、雀踊)

鐘巻 幟、鬼、屋台、四つ太鼓

下早蘇 幟、鬼、屋台

千津川 幟、四つ太鼓

入野 幟、屋台

中津川 幟

若野 幟

以上、九地区が諸芸奉納を行っている。

土生八幡神社の本来の氏子は土生、小熊、鐘巻、藤井、千津川であり、この中で藤井はかつて奴踊、雀踊を奉納してきたが、神社合祀によって祭具を処分し、諸芸の内、奴踊、雀踊がその後の復帰において廃絶状態となっている。

四つ太鼓は土生、藤井、小熊、鐘巻、千津川の五組が出すが、古くから所有していたのは小熊、土生、藤井、鐘巻であった。千津川は平成二十六年(二〇一四)頃に江川から習得したことを契機に所有し、鐘巻の四つ太鼓は第二次世界大戦後、途絶したが、和佐より習い受け、復活した。

土生祭では四つ太鼓の道中は伊勢音頭が囃されるが、要所においては「サツサハリシヨ」の囃子に変わり、伊勢音頭以前の古い形式が窺える。また宮入前には「キリキリマイコ」が囃され、「サイテクリヨ」などの見せ場があるところも御坊祭と酷似している。

屋台の所持は土生、藤井、鐘巻、入野であり、獅子舞なども奉納されている。獅子舞に関しては美浜町和田・日高川南部流域に分布する獅子舞と同系統のものである。屋台に関しては、構造上、宮居と長持に分かれるが、進行方向側に宮居を据え、後方に太鼓が置かれる様式が多く、土生祭のみ、進行方向側に太

鼓が来る逆なスタイルを取っている。

なお、鐘巻の長持には「寛政八年辰八月」の年号があり、現状確認できている日高地域の屋台の中で最古の物となっている。藤井では弘化三年（一八四六）の屋台箱が残されており、両者が江戸時代からの祭具を所持していることがわかる。また藤井では細工人として丸山村の朝木立慶なる人物が屋台を作成していることがわかる。

一方、小熊の奴踊であるが、渡御の際に行われる「練り込み」がよく知られている。『紀伊国名所図会』にも記載されており、その歴史が郡内の奴踊の中でも古い位置にあるが、日高町池田の奴踊よりの伝播であるとされる。通称「尻振り」といわれるコミカルな動作に笑いも含まれる。

小熊の奴踊には御坊祭のようにカイラギは見られないが、昭和初期の喧嘩において取り上げとなり、手拭いを用いるようになったという。皆朱色の奴頭巾を被り、奴装束にオコシ、先奴は化粧回しを付けている。

その他の地区の装束は、長襦袢にオコシ、地下足袋姿であるが、小熊以外は着流し風の法被を羽織る場合もある。

そして「御頭」とされる踊獅子は、県内唯一とされる双頭の獅子であり、木彫りの獅子頭に四人立ての演者によって構成され、雌雄の鬼が持つホコとササラによる音曲を伴わない静寂なる神事である。御頭とされる由縁はその木彫



6-25 小熊の奴踊

りの獅子頭にあり、頭高が薄く、角のある形態は近世以前の特徴を残すものであり、起源は中世までに遡ることも可能である。大社などの渡御に先払いとして参列している獅子と同義の意味合いがあり、神前において歯を噛み鳴らし、足を踏み鳴らすことで魔を払う。

御旅所での諸芸が終了となると、神輿は還御となり、神社境内で再度、各地区の幟差し、お頭神事、そして各地区一斉に獅子舞、奴踊を奉納し、本祭行事は終了となる。

二〇時からは御旅所前の道路において、若連行事として、各組が一同に会して幟差しを競い合い、四つ太鼓を豪快に押し合う行事が催されるが、これは近年始まったものである。

### 由来と歴史

土生八幡神社は当初、飛鳥明神のみが祀られ、「飛鳥山」と称されていたが、正平年間（一三四六―一三六九）に逸見万寿丸源清重が地頭として当地を治めた際、小熊に鎮座していた八幡神社を現在地に遷し、以来八幡神、飛鳥神の配祀となる。一方、現地の伝承によれば小熊に鎮座した八幡神は日高川の流れの水音が気に障り、飛鳥山まで移動したというもので、同じような伝承は印南町山口八幡神社にも伝承されている。

かつての祭礼は旧暦八月十五日の放生会であり、明治初年までは馬駆けも行われたという。この馬駆けに先駆けて小学生ほどの花男・花女郎と称する男女二人が厳しい精進齋の後に馬上にて社参することが習わしとされた。

明治期の神社合祀によって祭礼形式も大きく変遷し、多くの伝統が失われたが、藤井及び小熊の間で起こった祭り争いにおける嘉永五年（一八五二）の記事が残されており、それによれば嘉永二年（一八四九）に小熊が今まで祭具を持っていないだったので、「道中太鼓」を祭礼に持ち出した旨が記され、その当時



6-26 土生八幡神社のお頭神事



6-27 土生祭の各地区の幟

は藤井、土生、鐘巻には獅子舞があり、その他「賑ひ道具」があったこと、藤井、土生、鐘巻に「屋形台」があり、それを小熊の「道中太鼓」が追い抜き様に藤井の「屋形台」を損傷し、争乱になったと記されている。また翌年においても双方の意見の相違によって祭礼行事は中止されていたこと。そして当時は「馬駆け」が執り行われていた旨も記されている。

以上のことより、小熊の「道中太鼓」は氏子地区同士がすれ違い様に「屋形台」といういわゆる屋台の損傷に至ったという節から大型であり、かつ道中を大鼓にて囃す形状から嘉永二年に初めて小熊は四つ太鼓を新調したと考えられる。また「賑ひ道具」という呼称もおそらく四つ太鼓を指し、同様の事例は、志賀祭の「賑わい物」として、「四つ太鼓」を指している事や、瀬戸家文書にある「密々奉願上口上」にも四つ太鼓に関する記述が「賑物」として記されている事から、藤井、土生、鐘巻の三地区にはすでに、道中を賑やかにする道具「四つ太鼓」が存在した可能性を示唆するものである。

(裏 直記)

## 十 紀道祭

紀道神社 (日高郡日高川町三百瀬<sup>みよせ</sup>)

日高川の中流域に位置する紀道神社の氏子は、日高川町三百瀬、伊藤川、藤野川、平川、坂本、岡本、小津茂、下滝本、上滝本の九地区から構成される。

### 祭礼日

十月体育の日の前日 (日曜日)

昭和四十四年 (一九六九) までは十月十三日を祭礼日としたが、昭和四十五年 (一九七〇) より十月十日 (体育の日) に移行し、平成十二年 (二〇〇〇) より現在の日程となる。

なお、当社で行われる春 (四月)・夏 (七月)・冬 (十二月) などの主要な祭りは、すべて十三日に執行されている。

### 組織

紀道祭では、各氏子地区の氏子総代が集い、年ごとの神事や祭りの斎行や運営の決定が行われるほか、祭りを賑わせる神賑行事・余興などについては「若中」とよばれる四つの青年組織によって運営される。

若中は、日高川を境にした地形に沿って地区をまたいで組織される場合もあり、三百瀬若中、北原若中、南原若中、平川若中に分かれている。

なお、祭礼中の重要な神事芸能である「頭屋獅子」(鬼獅子) については、年ごとに四つの若中の輪番により奉仕する習わしになっている。

## 祭礼の次第と構成

### 【準備】

祭りの準備は、九月初旬に宮総代と四若中の代表が神社境内の参集殿に集まり、役割の確認や人選、各区からの幣の本数、馬の準備や馬場作りの日程、神輿昇きの人数割り、当番若中への頭屋獅子の衣装渡しなどが行われる。

九月上・中旬より各地域の若中を中心に行われ、祭り道具の組み立てや獅子舞や囃子の練習、だんじり飾りの製作などを開始する。

また、十月に入り祭りが近づく各地区では幟を立て祭り開催を標示するほか、若中ごとに「潮かけ」を行う。

潮かけは、祭り奉仕者や行事の安全のために日高川河口の日高浜から海水（潮）を汲み上げ潔斎をおこなう行事で、各若中の係りの若者が浜へ赴き、竹の折筒に海水を汲みホンダワラを付けて持ち帰る。かつては、駆け馬に参加する馬宿の当主も潮かけを行い、祭礼当日には汲んで来た潮を頭屋馬にかけて浄め、行事の安全を祈り、馬力が出るよう生米や茶殻、ビールなどを馬に与えた。

### 【宵宮】

紀道神社では、一六時から宵宮祭が営まれ、日高川近くの元宮碑において宮司が祝詞を奏上して翌日の祭礼齋行を奉告し、当番若中により頭屋獅子が奉納される。

宵宮の夕刻には、各若中においては地区内で「地下廻り」と称し、それぞれが保持する四つ太鼓、屋台（獅子舞）、だんじりなどを賑やかに巡行させ、翌日の本祭にむけての肩慣らしとする。

紀道祭における芸能・神賑行事・余興の種目は、次の通りである。

## 頭屋獅子（四若中による年番）

紀道祭の頭屋獅子は、二人立ちの獅子と二人のオニの三者による演技で、宵宮や本祭の神事の場面ごとに芸能が奉納される。オニ二人は雄雌に位置づけ、鼻高面を被る雄を「天狗」または「ハナ」、鰐口面をかぶる雌を「ワニ」と呼び、ともに頭に鳥兜をかぶり、青地の雲文様の上着と裁着袴。手には木鉾と割り竹のササラを持つ。祭礼中は所属の若中を離れて氏神に奉仕し、社殿や神輿を警護する役などが与えられる。

獅子は二人立ちで、前脚役は木製の黒い獅子頭を持って踊りを主導する。後ろ足役は「くさびら」と呼ばれ、獅子の臀部にあたる部分へ頭にキノコのような笠を被る。紺色に白の巴紋の入った胴幕を着ける。

頭屋獅子の演技には笛・太鼓の囃子が無く、獅子とオニ二人は静かに対峙しつつ時に激しい動作によってオニが獅子に戦いを挑む所作が繰り返される。途中、見守る当番若中は「麦打ち唄」をうたい、オニと獅子は唄に合わせて拍子をとって踊る所作が入る。

## 屋台（三百瀬若中・南原若中）

長持に宮屋を載せた屋台は、笛太鼓で囃す獅子舞が付く。獅子舞は二人立ちで、日高独自の紙製の獅子頭を用いる。囃子は、屋台に備え付けた太鼓と締太鼓の拍子に合わせ、十人ほどの笛方が取り巻いて曲を奏でる。三百瀬の獅子は赤い頭に白地の牡丹絵幕、南原の獅子は黒い頭に赤の胴幕である。

## だんじり（三百瀬若中）

三百瀬若中から出る三輪車の曳きだんじり。欄干を回した階上には、若中により毎年新しい趣向の作り物が製作される。この作り物にはからくりがあり、その年の話題になった人物や事柄を動く仕掛けにするなど見物人の楽しみになっている。だんじりの中では笛・太鼓・鉦の囃子により、「祇園囃子」などの曲目が奏される。

## 四つ太鼓（平川若中・北原若中）

四つ太鼓は、鮮やかな緋の天幕・横幕に飾られた太鼓台で、華やかな化粧を施した乗り子（小学生男子）四人が太鼓を打ち囃し、数十人の若中が昇く。

平川若中の四つ太鼓は、昭和二十八年（一九五三）頃に日高川町小熊より習ったもので、サイテクリヨウの場面では乗り子により「サツサ、ハリシヨ、ヨイシヨ」の掛け声がかかる。道中囃子では伊勢音頭を唄う。

北原若中の四つ太鼓は、昭和六十年（一九八五）頃から始められ、動作や囃し方は平川若中から習った。

練り方は軽快で、サイテクリヨウやキリキリマイコなど日高地域に共通した動かし方がみられる。

## 巫女舞

御旅所祭において、頭屋にあたった地区の女子中学生（四人）により「浦安の舞」が奉納される。「巫女神楽」ともいう。

## 【本祭】

祭礼当日は、一一時に神社役員らが神社に参集し、神輿蔵より神輿を出し社殿前の広庭の中心に据える。また同時に、各若中がそれぞれ集合場所から神社に向けて、宮入のために移動する。出発前には若中には浄めの意味を込めて潮かけの潮水を振りかけ、祭り運行の無事安全を祈る。



6-28 平川の四つ太鼓

昼前から正午過ぎにかけて各若中が神社境内に集まる。本祭への最初の宮入りは「練り込み」といい、頭屋獅子をはじめ、各若中の幟、馬、屋台、四つ太鼓、山車などが馬場道から鳥居をくぐり、神輿の周囲を巡るほか、屋台類を捧げ持ちサイテクリヨウを行うなどして次々に宮入を果たす。

若中の衣装は、若中の名や印の入ったシャツに、黒や藍、紫、赤などの半纏を着て、色とりどりのネルのお腰を巻き、腰に腹巻や兵児帯、腰紐などを巻く。頭や首には若中ごとの色手ぬぐいを着け、足に黒の地下足袋を履く。

駈け馬は、練り込み時には飾り鞍や鐙、胸当て、飾り手綱、刺繍入りの鮮やかな赤母衣、御幣、小旗などを豪華に飾り立て、騎手や綱持ちなど数人が取り巻き、馬場の端から鳥居まで練り歩いて宮入する。

祭り参加者が集結した後、正午頃から神職や神社役員らにより神前式が行われる。その後、一三時から「鬼の練り」と称し、頭屋獅子のオニ二人は神前の広庭において鉾を立て地面をしっかりと踏みしめ、手持ちのササラで地面を数所作や、上体を大きく反らす所作などを演じながら、大鳥居と社殿との間を数回行き交う所作を繰り返す「参拜」の儀礼を行う。この時、オニは飛び跳ねながら様子を見守る観衆をササラで打って回るなどして祓い清め、祭りの場の雰囲気を高めていく。最後に、大鳥居の下にハナ・獅子・ワニの三面が縦列に並び、御旅所への出発を誘う踊りを行う。

同じ頃、広場の中心に据えられた神輿を社殿に移動させ氏神の神霊を奉載し、一三時三〇分ごろから馬場道の先にある御旅所へのお渡りが執行される。お渡りは「練り出し」と呼ばれ、まず先祓いとしてハナと獅子が渡り、馬に乗った神職、御道具類（竹杖、御幣、金幣、社旗、神、剣、槍、幡鉾、太鼓、唐櫃）をもった役員が続ぎ、ワニが先導して神輿が渡御する。御旅所に着くと、若中が着くまでに早々と神職や総代を中心に御旅所神事が行われる。この間、オニ二人は神輿の左右に立ち氏神を警護する。

神輿が御旅所に着いた一三時四〇分頃、大鳥居前から各若中の練り出しが始まり、幟差し（四若中）、三百瀬の馬幟、馬（二頭）、屋台、だんじり、北原若中の馬幟、馬、四つ太鼓、平川若中の四つ太鼓、南原若中の屋台の順で練り、御旅所前の所定の場所で休憩する。

すべてのお渡りが完了して、一四時三〇分頃から神輿の前で頭屋獅子の踊りが奉納される。これは最も重要な神事芸能として三〇分以上にわたって踊り獅子の全編を演じられる。

その後、若中ごとの奉納の時間に移り、三百瀬若中の舞獅子、だんじり囃子、南原若中の舞獅子が奉納される。一五時二〇分にすべての奉納が終了し、神輿が神社境内へ還御すると、続いて各若中の行列も練り出しと同じ順番により神社へ戻る。

一六時頃から駈け馬の準備が進められ、馬場の整備や杭建てが済むと、一六時三〇分から駈け馬行事があり、二頭の馬が大鳥居から御旅所までの二〇〇mを競走する。都合三回駈け抜けるあいだ馬場道に集まった参拝客から喝采を受ける。現在、駈け馬には四頭の馬が出るが、かつては地域に運搬用の役馬が多く飼われていたため、祭りには数十頭の馬が速さを競ったという。

一六時五〇分頃に駈け馬行事が終わると、境内では三百瀬若中と南原若中の舞獅子の奉納や、北原若中と平川若中の四つ太鼓、三百瀬若中のだんじり囃子の奉納があり、すべての行事が終わるとそれぞれの地区に帰着する。

## 由来と歴史

紀道神社は、日高川町鐘巻に奈良時代に建てられた道成寺の創建に関わりの深い紀道成を祀った神社と伝えられ、もとは日高川河原に近い三百瀬の「紀道芝」にあり、現在も旧社地に元宮跡の碑が建てられている。

この神社は、江戸時代に少なくとも二度、日高川の洪水のために御神体が河

口の名屋浦（御坊市名屋）の地まで流され、その地の松の木に引つ掛かったという言い伝えがある。「名屋浦鑑」には、「同年（元和六年）洪水に舟津御前流れて當浦にと、まります由申伝。一旦舟津にかへし奉りしに又洪水に再び流来り給ふよし申伝。いさる御由緒書に有。再び来給ひし洪水年号不知」とあり、元和六年（一六二〇）に洪水があり舟津御前（紀道明神）が名屋浦に流れ至り、いったん舟津に還したが、再び洪水に遭って流れ来た。このため、名屋に小祠を建て明神を「船附大明神」として祀ったという。その後、明治時代末期に小竹八幡神社に合祀されたので、小祠は無くなったが、御坊祭の折にはその名残として名屋組に「船附大明神」の幟が建てられる。

紀道神社と名屋浦との歴史的な結びつきにはなお不明な点が多いが、双方の地域間の交流は不定期ではあるが現在も続く。また、双方の祭礼が直接的に影響したかどうかは確たる資料がなく、明治時代末期に名屋浦の祭りが御坊祭に集約される等で判然としない。だが、祭りを構成する幟、屋台、四つ太鼓、若中衣装などは、御坊祭とも共通する。（蘇理剛志）



6-29 三百瀬若中の獅子舞



6-30 南原若中の獅子舞

## 十一 吉原祭

松原王子神社（日高郡美浜町大字吉原よしはら）

氏子域は、美浜町田井たいと吉原である。西川（原谷川）河口の両岸にまたがり、右岸に吉原、左岸に田井が位置する。

### 祭礼日

毎年十月十七日に近い土曜日から日曜日。

以前は十月十六日（宵宮）から十七日（本祭）に行われてきた。旧暦では九月にしていたのを明治三十九年（一九〇六）から新暦の十月に変更した（「明治三十九年午九月吉祥・勸請帳」、東組所蔵文書）。

### 組織

祭り全体の運営組織として「代表連合会」が組織されるが、祭祀組織の単位として、吉原が、東組（印は雀かた）、西組（印は巴）、新濱組（印は鯛しんはま）に分かれ、田井組（印は鳥居）を加えて四組で構成される。四組が順に当番を勤め、当番組から三人、二番組（翌年当番組）から三人、そのほかの組から二人ずつが出て代表連合会を組織する。リーダーシップを取る当番組は毎年交代するので、代表連合会へ出す人数も御渡りの順により変動する。このことからどの組も平等で、中核となる組、特権を持つ組のないことが知れる。以前は東組と西組の間に中組があった。

祭礼の参加者は各組で決め、参加者には印（カタ）を付けさせることになっている。各組とも、幟、屋台、四つ太鼓を出す。子供がたくさんいた頃は、子供四つ太鼓があったが、現在も子供四つ太鼓を出すのは新濱組だけである。

組内の役割として東組では、神輿六人、警護二人、傘鉾一人、行司二人、四つ太鼓（乗り子）四人、獅子舞三人、笛二人、太鼓一人、締太鼓一人、神輿副

世話人、組頭六人、若連十二人、会計一人などがあり、集会所（宿）などにその氏名が張り出してある。神輿昇きは各組から六人ずつが出るようになっていて、田井では昔は四十二歳の厄年の者が務めた。四つの組はほぼ平等で、組と組の間に上下関係はない。四つ太鼓の乗り子は小学生の少年男子が務める。

### 祭礼の次第と構成

#### 【宵宮】

平成二十七年（二〇一五）は田井組が当番であった。このためお渡り順序は、田井組・東組・西組・新濱組の順となり、翌年は田井組が最後尾に回り東組が当番を務める。

宵宮の午前中、田井組は屋台と四つ太鼓が地回りする。一三時になると、まず当番組が宮入りする。鳥居の前の道路で幟を一人で持ち上げ立てる幟差しから始まり、屋台がひとしきり練ったあと境内へ入る。境内で田井組は三本の幟（うち一本は「子供中」）を差したあと、屋台を据え、その前に正方形のシートを敷き獅子舞を一三時二〇分頃から始める。獅子は先ず本殿に参拝し、四角形の舞場の縁を巡り見物する子供の頭などを噛んでから舞場の中央で一人の笛の演奏に合わせて舞う。田井組の人たちは幼児も含め前列に陣取り周囲で見物する。四つ太鼓は神賑わいということで、路上で練るが鳥居をくぐって境内へ入ることはない。四つ太鼓の乗り子が肩車されて社参し、正面の席（本殿を背にして）に座って獅子舞を見る。田井組の獅子舞は一三時四八分に終了し、同五分に幟を最後に退場した。

宵宮における各組の持ち時間は一時間であるが、その時間の管理は代表連合会長が行う。当該の組に対し会長から指示があって始めて幟差しを行う。そして、終了した旨の報告があると次の組に開始を指示する。このことは本祭の終了まで貫徹されていて、どの組も時間励行である。決められた持ち時間を厳守

する背景には、過去の歴史が反映されているものと推測される。こうした境内で行う幟差しや獅子舞のことを「式しきを行う」と呼んでいる。

一四時から東組が神社前の道路で二本の幟（御輿副 東組」と「御祭禮 東若中」）を用いて幟差しを行う。一四時五分に幟が境内へ入ったあとは、屋台が道路上で練り四つ太鼓も加わる。同八分、屋台は境内に入り広庭を一周して正面に据える。鳥居前では四つ太鼓が練り、両手で差し上げて「サイテクリヨウ」を繰り返す。同二〇分、笛一人太鼓二人の演奏で獅子舞が始まる。同四五分に獅子舞は終了し、五二分に東組は神社を出る。

以後お渡り順序に従い、それぞれの組が順に境内に入り、幟差し、屋台が練り獅子舞を演じる。どの組も一時間の範囲内でこれらを終える。各組は自分たちのシキが終了すると、宮付き連合会役員へ連絡する。四つ太鼓は鳥居の中に入れず外で練る。乗り子だけは顔に歌舞伎役者の隈取りのような化粧を施し、移動するときは大人に肩車されて地に足をつけない。

一七時まで各組が順次シキをする。一九時からは若連行事が始まる。宵宮に傘揃え式を行う。

### 【本祭】

本祭の朝、田井組では九時過ぎに、行司・組頭・若連・神輿舁き・警護ら全員が下田井集会所へ集合し、行司の挨拶の後、神社へ向け出発する。東組は朝七時から乗り子の化粧付けをする。西組は九時に集合する。

本祭は、一〇時から松原王子神社で神殿式が執り行われ、町長、区長、総代、警護、行司らが出席する。各組は当番組が一時までに入入りを済ませ、以後二〇分おきに御渡り順に入入をし、一二時までに終えることになっており、鳥居前で幟差しをして宮入後再び境内で幟差しをする。鳥居前では屋台や四つ太鼓が練る。本祭に宮入するのは幟だけである。

この日の田井組は一一時四〇分から鳥居の前の路上で三本の幟差しを始め、立てた幟を肩に立てたりして妙技を披露する。境内でも幟を差し、幟のシキをする。屋台は鳥居をくぐるような動きをみせるが結局入らず、四つ太鼓が伊勢音頭を歌いながら路上を練り、時間が来ると西へ向かい松原小学校で屋台や四つ太鼓を地に下ろす。一一時から東組が鳥居の前で二本の幟を差す。その間に田井組の乗り子が肩車をされて社参する。路上では四つ太鼓の舁き手が伊勢音頭を歌うと、乗り子が太鼓を打ちながら「ソラヨイトセ」と囃す。四つ太鼓を頭上に差し上げ、「サイテクリヨウ サイテクリヨウ」、そのあと地上に下ろし回転させる。

新しく生まれた当歳の男児は、奴の衣装（紺の半纏をヤッコと呼ぶ。半纏に太い綿入れの帯を締める。）を着て黄色い鉢巻きを締め、親や祖父母に抱かれ神社に参る。これを「渡り初め」と称し、一一時から渡り初め祈願が行われる。

一一時二〇分から西組の幟差しが始まる。また一一時三〇分からは、神輿舁き一同、オニ・ワニ、榊、宮印、太鼓などが出席して神殿で祭典がある。一一時四〇分から新濱組の幟差しが始まる。いずれの組も時間を厳守する。鳥居前で大小二台の四つ太鼓が伊勢音頭を歌いながら練る。四つ太鼓を地面に下ろし片方を上げて鳥居前まで引きずり、持ち上げて「サイテクリヨウ」と囃し、また下に下ろし地面を擦るように回転させ、再び頭上に差し上げ、地面に何度も落として楽しむ。

正午に、宮入していた各組の幟が境内を出る。新濱組の乗り子が肩車で社参する。神輿が神社を出発するが、最初神輿だけが宮司とオニ・ワニと東へ向かい田井へ行く。かつて春日神社のあった場所（春日大明神）の幟が立つまで行き、留まることなく引き返してくる。祭典も何もしない。「エイラクじゃ、エイラクじゃ」と繰り返すのが神輿舁きの言葉である。沿道で迎える人にオニ・ワニがササラで頭を軽くたたく。

一二時三七分、行列を整え御旅所へ向け出発する。列順は、榊、宮印（赤幟）、太鼓、太刀、金幣、鉾、各組の傘鉾（御渡り順）、オニ・ワニ、神輿、田井組の屋台、四つ太鼓、東組の屋台、四つ太鼓、西組の屋台、四つ太鼓、新濱組の屋台、四つ太鼓。西へ進み、途中で小休止のあと新濱の方へ曲がる。

一三時一五分、榊の先導で浜へ出た神輿とオニ・ワニは海へ入る。といっても神輿昇きもオニ・ワニも海に入るのは膝下ぐらいで、神輿が海水に浸かるようなことはない。これをシオカケ（潮かけ）という。「浜降り」の一種とみられるが、「浜降り」には二通りの意味があり、一、祭り前の禊ぎとして潮水を浴びる、二、祭礼のとき神輿を海や川の瀬に入れて揉むことで、ここでは二に近いとみられる。

一三時二〇分に神輿は御旅所へ着き、お鞘（『美浜町史』では「おきや」）に安置される。その神輿を取り囲むように榊、赤幟、傘鉾が立てら



6-31 松原王子神社鳥居前の四つ太鼓



6-32 神輿が海に入る潮かけ

れ、鯛一對のほか鏡餅、稲穂、洗米、神酒、勝ち栗、大根、蓮根、ゆり根、生姜、なす、いんげん、麩、高野豆腐、バナナ、みかん、りんご、水、塩などの神饌が供えられる。御旅所の神輿を安置するお鞘は宵宮に建てておく。昔は二番組が建てたが、現在は大工に依頼している。神輿と代表連合会長、各組の行司一人（当番行司は二人）が御旅所へ到着し次第、神前式が執り行われるきまりで、一三時四〇分から御旅所祭が執り行われた。そのあと榊の枝を取り合う。

一三時五〇分、神輿の前で田井組の獅子舞が奉納され、そのあと屋台が神輿の前で練る。一四時二〇分に西組が御旅所へ到着、同三五分から東組の獅子舞が始まる。各組は一五時までに浜に出揃うよう時間厳守とされているが、お渡り順序四番組の新濱組が一四時五〇分に御旅所に到着する。一五時五分から西組の獅子舞、幕をたくし上げ鈴と白幣をもって舞う獅子舞と、幕に四人はいる獅子舞とを演じる。一五時四五分から新濱組の二頭獅子舞、これが一六時一五分に終わる。

演じる組が変わると観客も代わる。田井組が獅子舞を演じると、多くの観客は田井の人で、田井組が終わると観客は席を立ち、東組が始まるとシートの周囲には東組の人が座る。というふうには、演じ手と観客が同じ組で、ほかの組の獅子舞を見ようとする。ほかの組の演技に関心がないのは、御坊祭と似ている。

一六時三〇分、役員が集まり相談が始まる。代表連合会長から高張り提灯などについて注意を告げる。高張り提灯は、組の名などが書かれてあり、組毎に複数本（田井組の場合十本近く）保有する。

同四〇分、御渡り順に幟差し、続いて屋台や四つ太鼓が神輿の周囲を「サイテクリヨウ」を繰り返しながら練る。終わった幟は棹から外してたたむ。各組の持ち時間は二十分で、これが一八時まで続く。途中で日が暮れ、屋台や四つ太鼓に吊り下げた提灯に灯が入り、役員も「行司」「組頭」「若連」などと書いた弓張り提灯をかざす。

四番目の組が練ったあと、神輿がお鞘から出ると、「サイテクリヨウ」から「来年も」に変わる。再び赤幟・太鼓・太刀・鉾などが行列を組んで神社へ還幸する。神輿の前後には前に新濱組と西組の高張り提灯、後ろに「御輿副」とある東組と田井組の高張り提灯が付き還御の道を照らす。神輿のあとに屋台と四つ太鼓が御渡順序の逆順で続く。

神社へ到着すると、赤幟以下神輿の前の行列はそのまま鳥居をくぐって宮入りするが、神輿はすぐに宮入りせずあとから来た屋台などと路上でもみ合う。やがて神輿も宮入りすると、鳥居前の道路で四番目の組から屋台と四つ太鼓が三五分おきに練る。どの組も「来年のー、来年のー」と名残を惜しみ、参道を南北に練る。最後に当番組が練り終わり地元へ戻って行き、祭りは終わりへ近づく。代表連合会の会長以下役員、各組の行司らはそれぞれ弓張り提灯を手に境内に戻り輪になる。会長から祭りが無事に終了したことの謝辞など挨拶があり、全員で手打ち式をして祭りは終了する。

### 【祭礼翌日以降の行事】

翌日は「かさ破ち」で、獅子が氏子の家々を回りご祝儀をいただく。

### 【奉納芸能】

各組の行事や芸能は全く同じ構成からなっている。順に、幟差し・屋台が練る・獅子舞を演じる・同時並行で四つ太鼓が練る、これを宵宮の午後と本祭の終日に、持ち時間にあわせて行うのである。獅子舞は宵宮に神社で、本祭には御旅所で舞われるが、同じ舞いをする。差異があるとすれば獅子舞の演技で、東組と田井組は一頭の獅子が舞い、新濱組は雌雄二頭獅子で舞う。西組は二種類の獅子舞を演じる。

吉原祭の芸能は獅子舞、用いられる楽器は、獅子舞のときに演奏する篠笛、

屋台に付いた太鼓、これには鉦止めの太鼓と締太鼓がある。それに鉦止めの四つ太鼓である。

獅子舞の芸態についてみると、たとえば東組の獅子舞は、舞場を時計回りに観客の前を一周したあと中央で舞う。篠笛一人が常に獅子に対峙する形で演奏する。獅子の舞い方としては、頭を左右に振る所作と口を上下に開閉する所作を組み合わせたものである。中央で伏せて動かない仕草もある。獅子



6-33 御旅所で獅子舞を見る四つ太鼓の乗り子

頭の操作は、左手であごを持ち、右手で縄を引き口を動かす。両手を使用するためか、採り物はない。舞が佳境にはいると客席から「よう舞う、よう舞う」と声がかかる。当初は東組だけが獅子舞を伝承していたとされる。明治二十三年（一八九〇）に他所から人足を雇って屋台を担ぐ、笛や太鼓を明治に購入したなどの記録があるという。

新濱組の獅子舞は、二頭獅子で、雄は御坊町、雌は上組から伝授された（『美浜町史』は紀小竹から）という。昭和三十八、九年（一九六三、一九六四）に屋台を購入した。西組の獅子舞は、乱獅子、玉獅子などあり、昭和四十七年（一九七二）頃古座（『美浜町史』は周参見）へ習いに行ったとされる。舞いは二種類あり、一つは獅子頭を被り女の着物を着た舞手が一人で、幣や剣を採り物として獅子芝居のように舞う。もう一つの舞いは、四人が入った獅子にお多福の面を付け赤い女の長襦袢を着た獅子あやしがからむ舞である。田井組は平成七年（一九九五）頃に名屋組から雌の獅子舞を教わった。

太鼓は屋台に固定して打つが、笛は獅子の動きに合わせてついてまわる。演奏者は女性の場合もある。

獅子に頭を噛んでもらうと頭が良くなるという俗信がまだ残されていて、子供たちも我先にと頭を出す。獅子が近づくと泣き出す幼児もある。

四つ太鼓は、四人の子供が乗り、四方から一斉に太鼓を打つ、一種の太鼓神輿である。ときに打ち手は体を後ろに大きくのけ反らせる仕草をする。

### 【用具など】

傘鉾は、各組一本ずつ所有し、いずれも緋羅紗を用い、先に白幣と榊の枝を差す。緋羅紗には、田井組は鳥居の絵、東組は金字で「東」と青竹にデフォルメした金の雀、西組は三つ巴紋と松、新濱組は波にはねる金の鯛が刺繍されている。幣串には、どの組も「松原王子神社御祭礼」、その下に組の名を書くが、東組だけは「東組」と組名だけを表記する。榊と白幣の紙だけを毎年取り替え、串は従前のを使用しているとみえる。田井組と東組は昭和六十一年（一九八六）十月、西組は平成二十三年（二〇一一）十月に新調した。境内の本殿に向かって左側に御渡り順序に従い並べて立てる。

幟は、布の大きさにより三反幟、五反幟などがある。組印の幟一本で祭りができるとされ、一番大切なのが幟という。社参のとき幟のうち一本は地元に残しておかなければいけない。幟には、「御祭禮」奉納者と思われる「〇〇若中」などと染められ、東組には宮元として神輿の近くにあることから「御輿副」と染めた幟がある。幟の文字は、田井組が、「田井」、「御祭礼 田井子供中」、「春日大明神 田井」、東組が、「御輿副 東組」と「御祭礼 東若中」、西組が、「西若中」、「御祭儀」、「御祭儀」、新濱組は、「新濱」、「新濱若中」、「御祭儀 新濱若中」。棹の先に笹竹を指す。

本殿の左右に立つ「王子神社」幟は、右が新濱組、左が田井組に決まっている。

屋台は、各組一基、いずれもよく似た形態をしている。長持にあたる箱がなく、上に吹き抜けの金箔と漆で装飾した屋形を構え、傘鉾のように白幣と榊を立てる。横に締太鼓、後ろに鉦太鼓を付け、二本の轆で担ぐ。屋形の下は紺系の幕で囲う。

獅子頭は、組ごとにいくつか所有しているが、舞うのは新濱組が二頭（顔面が赤と黒）、あとの組は一頭ずつである。東組の獅子は雌とされ、顔は赤く、両耳に黒髪をつけ、その間の毛は、赤、黄、白、緑、黒の五色が一行に並ぶ。頭に把手と縄がついていてそれを握り縄を引いて口を開閉させる。幕は緋の無地で前だけ段だら模様である。西組は顔面が黒で紺地に派手な柄模様の幕を付ける。田井組は雌で、幕は緋地に頭の近くは振り乱した毛が豪快に描かれ、前の段からもカラフルである。新濱組は雌雄二頭で舞う。

獅子舞を演じるときはシート状の敷物を敷く。組ごとに敷物を準備して屋台のそばに延べる。たとえば東組の敷物は、雀紋が描かれ、「東組」「平成二十年十月吉日」とある。

四つ太鼓は、屋根を緋羅紗で被い、四本柱で支え、その真ん中に太鼓を据え、井桁に渡した轆棒を担ぐ。緋羅紗には傘鉾と同様に組印が付けられる。楽器は、屋形に付けた鉦止め太鼓と締太鼓、篠笛である。いずれも両桴で、長さ三十 cm ほどの細いものである。昔はこの組にも子供四つ太鼓があったというが、現在は新濱組だけにある。

提灯は、組名を表示した高張り提灯と「行司」、「組頭」、「若連」、「世話人」、「連合会」と書いた弓張り提灯がどの組にもある。「行司」は少し丸い、「組頭」と「若連」は縦にやや長い。東組のは雀のトレードマークが描かれるなど組ごとに印などを付けてある。

## 【衣装など】

衣装は各組ほとんど同じ、奴と呼ばれる紺半纏を着た姿である。たとえば田井組は、紺半纏に白いパッチまたはズボンまたはパンツ、白地下足袋を履く。ヤッコの背には鳥居の組印を貼り付け、袖口に水色の当て布を付けて、同じ水色の腰帯を結ぶ。組ごとに異なるのはヤッコの背に付ける印で、それによってどの組の人か一瞥で識別できる。印は、田井組が朱の鳥居、東組が羽根を広げた雀、新濱組は赤い鯛が腹を上にはねている絵を貼り付けている。

東組には格子柄の腰巻きを着けた人が何人かいて、これが古くからの祭り衣装とみられる。新濱組の腰巻きは白無地である。首に手拭いを巻く。四つ太鼓の乗り子は、柄物の着物に緋の陣羽織、黒い胸当て、カルサン風の袴、顔は歌舞伎の隈取り、紫の鉢巻きを締める。

## 由来と歴史

『紀伊統風土記』には、「王子社 境内周二百四十間 本社二社 王子権現社 御霊宮 末社船玉社」とあり、本社が二社に分かれていたことが知れる。

祭神は、伊弉諾尊、伊弉冉尊、大日靈女貴神（天照大神）、月読命、倉稻魂神、武甕槌神、経津主神、天児屋根神、比売神（武甕槌神以下の四神はもと春日神社の祭神）。御霊神社の祭神は、事代主神、金山彦神、宇賀魂神、菅原道真。東組には明治時代雀踊があった。

「勘定帳」に、明治三十五年（一九〇二）すずめこしらえ、大正五年（一九一六）三味線弾きを雇うなどが記されているという。雀踊は、昭和二十三年（一九四八）に復活したが、同三十年に休止した。御坊の下組から三味線の指導に来てもらったという。また、新濱組は奴踊をしていた。（長谷川嘉和）



6-36 神饌 鯛のカケノオ



6-34 新浜組の獅子舞



6-35 西組の獅子舞

## 十二 和田祭

御崎神社（日高郡美浜町大字和田）

和田祭は、美浜町和田地区に鎮座する御崎神社の例大祭である。御崎神社は日高地域随一の社格を誇る古社として名高く、煙樹ヶ浜西端の松林の一角に浜まで伸びる参道のその奥に祀られた和田、入山、日高町小池地区の氏神である。当社祭礼行事に参加する氏子地区のなかで、和田は広大であるため、さらに祭組として、本の脇、西、西中、東、東中に分かれており、それぞれ祭具を所有し、祭祀組織を形成する。

### 祭礼日

十月第四日曜日であるが、戦前までは霜月の申酉祭として有名であった。

### 組織

祭りに参加する人々を若中とし、年行司として区長一人、総代が二人選ばれ、組中の中で若年行司の責任者をおいて統率されている。祭りの衣装は長襦袢にオコシ姿であるが、近年ではタツツケ袴が主流となってきた。

### 祭礼の次第と構成

#### 〔宵宮〕

宵宮行事は組中の地下まわりを中心に行うが、夜間に氏子の「裸参り」と称して、弓張り提灯を持ち、煙樹ヶ浜で潮垢離の上、社参する習わしが残されており、近年復活した。

#### 〔本祭〕

本祭は、九時までに各地区が祭具と共に宮入するが、四つ太鼓は神社の祭具

としてはまだ認められていないので、宮入せず、鳥居横で待機する。また和田地区内の西、西中、東、東中の四組で「まわり当番」として、屋台、獅子舞、馬などの諸役を分担している。

本殿式後には、氏子持ち回りの「鬼獅子」を境内で奉納し、各地区の獅子舞の奉納となる。現在の各地区の諸芸は左記の通りとなっている。

本の脇 幟・屋台・獅子舞

西 幟・山車・四つ太鼓

西中 幟・屋台・山車・四つ太鼓

東 幟・屋台・獅子舞・山車・四つ太鼓

東中 幟・山車・四つ太鼓

入山 幟・屋台・獅子舞

小池 幟（四つ太鼓）

一覧をみると、山車が多いことがわかるが、本来は山車を曳く祭りであることがわかる。祭具の数も地域差が見られるが、これは明治時代の神社合祀によって氏子域が広がり、合祀された氏子地域は、当初行っていた祭礼様式をそのまま取り入れているからとされる。

また四つ太鼓は、平成時代に入ってから取り入れたものである。囃子言葉も「ホーランエ」、「キリキリマイコ」など御坊祭を彷彿させる。

もとは山車が出る祭礼であり、祇園



6-37 和田祭の鬼獅子

囃子を奏で、ゆったりした祭りであったという。

各地区の獅子舞が終われば、渡御となり、神輿が担ぎだされ、馬に乗った神官や各氏子地区が祭具と共に御旅所に向かう。

御旅所では再度、鬼獅子を奉納し、ついで各地区の獅子舞、幟差しを奉納し、還御となるが、還御の際は四つ太鼓がメインになり、境内鳥居前において盛大に担がれる。



6-38 和田西中組の山車

#### 由来と歴史

御崎神社は、日ノ御埼を神格化した自然的象徴を神体とした社であり、海上航海の安全と地域住民への恩恵を司る神社といえる。

『日本三代実録』巻二十七・貞観十七年（八七五）十月十日己未の条に「紀伊國正六位上三前神從五位下」とあり、日高地域で唯一国史に記載された神社である。

一方、近世初期に、御崎神社の神官であった塩崎氏が京都の吉田家に入門、その折に御崎神社神体を天照大神・事代主大神・猿田彦大神・竜王豊玉彦命の四座に定めた旨が「御崎神社々伝付年中行事」に記されている。

御崎神社では、祭礼においても壮麗を極めたようであり、祭日は霜月申酉日（十一月の申と酉の日）に執行され、申酉祭りとして名高かった。その御旅所は御坊市湯川町丸山字齋であり、現在の齋橋の付近まで渡御が行われたという。

また御坊市藤田町藤井字神の木において大山神社・熊野神社との出会い祭りが行われたというが、中世末期の湯川氏滅亡によって出会い祭りは、廃絶したという。

御崎神社は、かつては馬場が存在し、和田祭において戦前まで数十頭の馬が馬場を駆けた「馬駈祭り」でもあった。  
(裏 直記)



6-39 入山の獅子舞

### 十三 印南祭(山口)

八幡神社(山口) (日高郡印南町大字山口)

御坊市名田町の野島、上野、楠井、日高郡印南町の西山口(以後「山口」、地方、浜、津井の七地区の氏神である。祭礼は、七地区すべてが参加している。なお野島は、加尾、野島、祓井戸の小字に分かれ、祭礼も小字ごとに練習等を行うが、本祭では、野島区として合同して参加する。

#### 祭礼日

十月二日(宵宮十月一日)

#### 組織

神社組織として、宮総代(宮議員)が十四人、祭礼に際し各区から区長を含む七人の「八幡神社祭典委員」が選出される。祭典委員は、神賑行事の統括責任者となる。

神輿を昇くのは、野島区の仮家一族とされるが、実際に仮家姓は現在三戸しか無く、神輿昇株を持っている家が出役している。それ以外は、野島地区で選抜している。内訳は、野島十一人、祓井戸六人、加尾三人、それに上野区から梅田の宮の由緒により梅田氏の末裔一人が加わり、合計二十一人である。

各地区で祭礼の実務を担うのは、青年団である。各地区でそれぞれ違いはあるが、中学・高校卒業後から三十五歳頃までの未婚の男性である。どの地区も人数の減少により、近年、年齢の上限を上げたり年齢制限を撤廃するなど、結婚後も青年団にとどまれるように対応している地区が増えている。

#### 祭礼の次第と構成

##### 【準備】

例年、九月の第二土曜日頃に氏子総代(宮議員)、祭典委員・副委員長、青年団長・副団長、年行司等が出席し「八幡神社祭典会議」が開催される。そこで、祭礼の申合せ事項が話し合われる他、御旅所までの屋台の渡御順などを、抽籤により決定する。

また、浜区は、御旅所のお仮屋の準備をする。彼岸の中日に榊を立て、その後お仮家をつくる。榊には海藻(ホンダワラ)をつけて海水を浴びせる。山口区は、神幸列の「お道具」の準備を行う。祭礼当日、お道具持ちの担当は、山口区と浜区の特定の家で担当すると決まっている。

芸能は、野島区が奴踊、上野区が祭礼踊、楠井区が耕作立願踊、地方区が雑賀踊(ケンケン踊)を奉納、獅子舞は、全七地区が奉納する。

野島区の奴踊は、幟、お傘(傘鉾)、額などを立て、それを中心に輪を作り、時計回りに回りながら手踊りする。先奴は赤い頭巾を被り赤い前垂れを垂らし大団扇を持つ。音頭取りは、扇子、それ以外は氏子総代や祭典委員も手拭いを振りながら踊る。

上野区の祭礼踊の衣装は、黒い袴纏の袖口を赤い布で縁取りした上衣に兵児帯を締め、お茶色の腰巻き、白シャツ、黒地下足袋、半纏の背には六角形の枠に三蓋松が描かれている。先奴は頭巾を被り前垂れを付ける。

楠井区の耕作立願踊は、真ん中に幟を立て、輪を作り時計回りに踊る。奴踊の一種で、先頭を一奴、続く三人を三役という。一奴は赤頭巾に赤い前垂れ、三役も赤い前垂れ、首に赤い手拭い、黒い袴纏に角帯を締め、白シャツ、緑色の腰巻き、白地下足袋、日の丸扇子を広げ持つ。ほかの踊り子は、赤い手拭いを右手に持って踊る。

獅子舞は、オニが獅子を誘導し広く動き回り、屋台の前では「ヘヤマワシ」

や「ブチマワシ」などと呼ばれる着飾った子供が太鼓を叩く仕草を踊る独自の

ものがある。屋台の太鼓の前で太鼓を打つ仕草をして踊る子どもの役である。

だいたい幼稚園の年中から小学生の男児の役で、三年から五年続ける。振り袖の美しい着物に帯を締め、背襷して五色の上がり、手甲、白足袋、白緒草履、鉢巻きはそれぞれの組の色のものを締める。赤黄の布飾りをしたブチ（ヘラ、桴）を持つ。西山口区のヘヤマワシは、黒の袴纏に白ズボン、白ストッキング、白緒の草履、臙脂の鉢巻き、黄の腰帯で他区の装束とは異なる。

オニは、紺地の迷彩色文様の袖なし上衣に同柄のモンペ風ズボン、綿入れの太い帯、頭に赤茶色の毛、赤い鬼面を被り、手甲、地下足袋、腰に黄色いフリルの付いた赤い布袋とお猿さんを下げる。右手にササラ竹、左手に木鉾を持つ。西山口区のオニは黒オニで、角があり、左足に黒足袋、右足に白足袋を履く。

野島区は、区の屋台とは別に小字三組も所有していて、獅子舞の舞い手もそれぞれある。本祭に御旅所で獅子舞を奉納するのは、野島、祓井戸、野島、加尾の輪番制である。地方区には、屋台とは別に雑賀踊用の屋台がある。屋形がなく、鉦太鼓の前に鳥居が立ち、小さな高欄の内に赤い造花を指したもので、下に鉦を吊るした簡素なものである。

なお、祭礼の装束は、白長袖シャツ、白短パンツ、腹巻き、地下足袋、手拭いを首に巻く。かつてはオコシと呼ぶ腰巻を巻いていたが、近年はごく一部の人に限られている。

各地区の練習は、九月一日頃から始めるので「八朔の宿入り」といった。踊りの奉納がある地区では、九月下旬に一日程度練習日がある。また、全地区ではないが、「十日ならし」と称して祭礼の一週間から十日前に獅子舞等を地元の地区に披露する日がある。

## 【宵宮】

印南町では浜区が午前中、御旅所で獅子舞を演じた後、屋台を担いで出発し、途中、地方区、山口区の出迎えを受けて合流し、道中笛と太鼓で囃しながら八幡神社へ向かう。一三時頃に八幡神社へ到着し、本殿へ参拝した後、順番に獅子舞を舞う。地方区では、その後地元集会所と浜（漁港）で雑賀踊を踊る。二〇時頃から隣接の祭礼である八幡神社（印南）参加の地区と屋台で競り合う（押す）余興行事が近年行われている。津井区は、神社へ行かず午前一〇時頃から津井の浜で獅子舞を演じ、夕方から地区内を屋台を担いで練り、最後に獅子舞を演じて解散する。

御坊市の名田地区では、各地区で行事を実施する。野島区では、小字ごとに地域の集会所や地域で祀られている神社の前などで獅子舞や踊りを披露する。夕方から、野島区の浜で野島、加尾が合流し奴踊、獅子舞を披露し、その後、野島・加尾と祓井戸が出会い、野島青年会館（八幡宮遥拝所の石碑あり）で奴踊と獅子舞を披露する。そのあと、三地区で二一時頃まで屋台で練る。

上野区、楠井区では、朝、青年団長等が獅子頭、幣を持って八幡神社（山口）に参拝する。上野区では、一五時頃から上野区独自の神輿が区内の恵比寿神社から出発し、屋台と練る。その後、区内の浜（漁港）で祭礼踊と獅子舞を披露し、屋台で練る。楠井区では、午後から地区内を屋台で練る。途中、区内の浜で踊りと獅子舞を披露し、最後に春日神社跡地でもう一度踊り、獅子舞を披露し解散する。

## 【本祭】

四時四五分頃から野島区の浜で仮家氏と神輿昇きの二十一人、野島区長、神主は、野島区内の海に入り「禊」を行う。

名田町の地区は、それぞれの行事を終えたあと八時頃に貸し切りバス（屋台



6-40 渡御風景

や幟などの道具類はトラックに乗って印南町の浜（漁港）に向かう。印南町の津井区は、七時頃から屋台を担いで浜（漁港）に向かう。野島、上野、楠井と津井区が集合し、一斉に屋台を担ぎ上げ、盛んに競り合い、出会いを行う。その後、御旅所付近で待つ地方、浜へと向かう。そこでお傘（傘鉾）、幟、屋台等の出会いを行い、八幡神社へ向かう。屋台とお傘（傘鉾）は、途中にある印定寺へ置いておく。

典委員長、副委員長（区長）、宮総代が出席し、神前式が始まる。本殿下で修祓のあと拜殿へ上がり、祝詞を奏上する。祭典終了後は参集殿で直会が行われる。

その後、神社で宮入が行われる。各地区の青年団長らが本殿前で獅子頭とともに参拝し、境内の広庭では地方区、浜区、津井区の幟を順に立てる。その幟と雑賀の屋台の周りで、地方区の雑賀踊（ケンケン踊）が始まる。雑賀踊を奉納する雑賀衆は、正面に三足の鳥を描いた鍬形の黒兜を被り、上下とも黒衣装、「おん」で「おんら子」をすって音を出す。先達は錦の陣羽織を着る。その他、各地区のオニ、地方区の年行司や青年団長なども一緒に踊る。その後、上野区の幟立てと祭礼踊、楠井区の幟立てと耕作立願踊、野島区の幟立てと奴踊の奉納が順に行われる。

踊りと同時進行で、神輿舁き、お道具持ちのお祓いが行われ、踊りの奉納が終わると、印南川右岸の浜辺にある御旅所までのお渡り（神輿渡御）が始まる。野島区の額、各地区の幟、雑賀屋台、お道具、神輿の順に行列が進む。途中「男

八幡神社（山口）では、九時から祭

山」で小休憩した後、正午頃、故事に因み、「梅ヶ坪」とよばれる場所で翁屋（湯川家）から神輿へお神酒とシトギ餅を供える神事が行われる。その後は、印定寺で待機していた屋台とお傘（傘鉾）が加わり、幅が狭い道中を抽籤で決まった順番に神輿と各地区の屋台が激しく競り合いながら御旅所まで進む。

神輿が御旅所のお仮屋へ納まると、神事が行われる。神事終了後、地方区、上野区、楠井区、野島区の順番で踊りが奉

納される。踊りが終わると、獅子舞が始まる。獅子舞は、まず四区同時に舞い、次に三区が同時に舞う。舞う時間は約三十分間、浜区だけは約四十分であり、浜区の獅子舞が終わりにかかると神輿舁きが還御の準備を始め、高張提灯が神

輿の前に整列する。

浜区の獅子舞の奉納が終わると、神輿は屋台と練ったあと、神社へ還御（お戻り）する。還御には、雑賀衆、雑賀の屋台がお供をし、神輿蔵に神輿が納まると、広庭で雑賀踊が踊られる。

各地区では、地元で獅子舞や踊り等をし、傘破り行事に入る。



6-42 野島の獅子舞



6-41 地方区の雑賀踊（ケンケン踊）

## 【祭礼翌日以降の行事】

祭礼日の翌日は、片付けとともに寄付者宅に獅子頭をもってお礼にまわる。また、十月四日に各地区の区長等が出席して、祭典反省会が開催される。

## 由来と歴史

神社祭神の由緒として宝暦九年（一七五九）「印南中村覚書」によれば、最初に野島区の被井戸に漂着し、被井戸で休息したが、波の音を好まず、野島にお仮家をもうけて長く逗留した。その時に世話したのが仮家の先祖とされる。その後、上野区の梅田の宮へ移ったが、そこも波の音が聞こえるので、楠井、津井、浜、地方を経て、男山に移り、西山口に勧請され、湯河右衛門太夫の保護を受けたといわれている。

この伝承から、神輿出御の際には、仮家氏の子孫が「お立ち」の合図を行う習わしがある。

「お立ち」のときの詞章は以下のとおりである。「男山、男山、男山、栄える御代は久方の、久方の、月は曇らじ、秋は最中なるらん、神まつる、神まつる頃はいつかなるらん、いつかそうろう、いつかそうろう、いつもおも影、影見れば、影見れば三五や中の月は、今宵なるらん」（『御坊市史』第二巻）。

また、渡御の途中に「梅ヶ坪の神事」を行う翁屋（湯川家）は、湯河右衛門太夫の子孫と伝えられている。この地域では、傘鉾のことを「お傘」と称し、山口区を除く各地区で所有しているが、湯川家はそれとは別に、足を上げて舞う三番叟の人形が傘の上に戴くお傘（傘鉾）を独自に所有している。なお、地方区は、打ち出の小槌を振る大黒人形、浜区は、釣り棹を肩にした恵比寿人形が傘の上に乗る。「梅ヶ坪の神事」は、「神が湯川家に立ち寄り酒を要求したところ、応対した奥様が妊婦であったため恐縮して、白布にて身を覆い翁の面をかぶって応対した」という伝承に由来している。

（前田和彦）

## 十四 印南祭（印南）

八幡神社（印南）（日高郡印南町大字印南）

印南八幡神社とは印南町沿岸部印南川左岸域に鎮座する神社であり、本郷、宇杉、光川、東山口の氏神として祀られている。

## 祭礼日

例年十月二日と固定であるが、かつては旧暦八月十五日に執行されていた「放生会」であり、当日が十五夜にあたることから「月見祭」として親しまれていたという。

## 組織

それぞれの氏子地区では青年団を結成し、祭礼行事の執行を担っている。現在、青年団と名称を改めているが、これらはかつての若衆組織であり、幟や衣装に「若」「若中」といったものを染め抜き、用いている。

青年団の構成員は、最終学歴終了後から二十五歳までが青年、二十五歳から四十歳くらいまでが中老となっており、各地区で若干のずれがあるものの、このような構成となっている。また、四十歳以上の人々が世話人会として祭りに於ける後援活動を行っており、それらとは別に年行司二人、宮総代二人、幟警護一人、祭典委員三人を選出する。年行司とは年間の祭事を担当する代表であり、祭りに於ける責任者である。宮総代は直接、神社と関わる職務であり、幟警護はその名の通り、幟の警護にあたる役職である。

青年団に入団してからは、最初は下働きの役目を負い、下の年代が入って来るまではこの役目からは離れられない。また二十五歳頃で青年団長を任されるまでは、祭りの練習などその他の準備には参加しなければならないとされている。それ以上の年齢になると中老として青年に対しての指導、教育等の役目を

負う。

その他組織として、祭礼当日、渡御の際に「御道具」といわれる神宝を持つ家筋が東山口で継承されており、特権として「御道具持ち」と呼ばれている。

また世襲制の脇神主という二人も東山口の家筋で決まっており、祭りまでの準備や特に御旅所に安置される神輿用に準備する大榎は脇神主が山から切り出して準備する習わしである。

### 祭礼の次第と構成

#### 【準備】

祭の準備は九月一日から行われており、かつては「八朔の宿入り」と呼ばれ、旧暦八月一日の八朔の日から祭りの練習を行っていた。

現在、東山口では九月の最終日曜日に「八朔祭り」と称して重箱獅子（鬼獅子）、獅子舞などを行っている。また東山口では祭り間近になると「衣装揃え」という祭りの支度を行い、祭りに参加する人を呼び、酒を振舞う風習が残っている。これは山口八幡神社の「御傘揃え」に相当するものであると考えられる。祭りの装束は、長襦袢に江戸又、手甲に脚絆で、オコシを巻いたスタイルであったが、近年は、手甲、脚絆及びオコシを巻かない傾向が出てきている。

これらの行事を執り行った場所が宿である。宿は輪番制のもので家並みに沿って年番で引き受ける。宿では神棚に若衆の提灯二張を飾り、祭りの練習をする場所であったが、若衆の寄り合いの場でもあり、特に飲食を伴うものであったので、その飲食代は宿の負担であった。東山口では平成時代に入って青年会場を設置するまで、宿制度を残していた。

#### 【宵宮】

宵宮は、各地区地下まわりを中心とした行事である。主に午前中は屋台等の準備をし、午後から各地区屋台を出し、要所で獅子舞を行い、宵宮行事は行われている。夜になると宇杉、本郷、光川、東山口（平成十七年（二〇〇五）より参加）は印南橋周辺で山口八幡神社の氏子である浜、地方、西山口と盛大な屋台押しが行われるが、これは今から二十年程前より始まったもので、神社の祭祀とは異なるものであり、余興であるといわれている。

#### 【本祭】

早朝、東山口の青年会場で「ネリコミ」と呼ばれるオニ両者と重箱獅子による宿を出る儀式が行われる。その後は東山口の屋台が印南八幡神社に向い、一の鳥居前で再度オニ両者と重箱獅子による神社に入る儀式「ネリコミ」が行われ、神社境内で本格的な重箱獅子を奉納する。重箱獅子を奉納するまでは屋台の宮人は認められず、東山口の屋台は一の鳥居前で待機する。

重箱獅子が終了すると宇杉、光川、本郷が一の鳥居前に参着し、各地区幟を差し上げ、川に向かって幟を振り、そのまま倒さずに鳥居をくぐらせる「幟の差し込み」が行われる。

その後は各地区の屋台が宮入し、獅子舞を奉納する。そして木下家当主による号令により、各地区の幟、屋台、御傘を先頭に御道具、神輿の御渡りとなる。



6-43 川渡御風景

一の鳥居を神輿が出ると再度、東山口の重箱獅子が「トビチガイ」を行う事になっている。「トビチガイ」とは通常奉納される形式より短い短縮版であるというが、この重箱獅子が舞わなければ神輿の渡御は出来ないと言われている。

重箱獅子奉納後は神輿、御道具、屋台、御傘、幟が順序を整え、印南川筋に沿って進み、途中の広場で東山口の獅子舞を舞う。ここまでの行程を「神事の行列」という。神事の行列での屋台の順序は宇杉、光川、本郷、東山口である。ここから本格的な御渡りが開始され、屋台の順序も光川、東山口、宇杉、本郷と神事の行列とは異なる。

渡御の順路は印南川筋を川下に向かう形で設定され、道幅が狭く家の密集度が高い。それ故、道中の家々は、玄関先に臨時の防護壁を築き、渡御の様相を見物する。屋台と神輿は激しく押し合い、その光景は壮絶である。印南川河口まで差し掛かると幟、屋台、神輿が勢いよく印南川に飛び込み、川渡御が行われる。

そして対岸の印南浜に設置された御旅所に到着すると、神輿は大きな柵の枝にホンダワラを大量に掛けた神輿置き場に安置され、東山口の重箱獅子、獅子舞を奉納し、東山口は諸芸奉納後に先に御戻りになる習わしである為先に帰り、その後は各地区が獅子舞を奉納し、神輿が還御となって祭りは終了する。

現在の各氏子地区の諸芸能は左記の通りとなる。

東山口 幟、屋台、重箱獅子（踊獅子）、獅子舞

宇杉 幟、弁財天の御傘、屋台、獅子舞、（奴踊）

本郷 幟、恵比寿の御傘、屋台、獅子舞

光川 幟、鶴と松の御傘、屋台、獅子舞、（奴踊）

坂本 松の御傘

以上となるが、東山口以外は、御傘という傘鉾を所持しており、特徴としては、風流を偲ばせる作り物や人形を載せているところである。また宇杉、本郷

にはかつて奴踊が伝承されていたが、戦後より継承されていない。

印南祭で奉納されている獅子舞は、全氏子地区同形態であり、非常に長い時間を要するのが特徴である。演者は小学校高学年から二十歳までの少年が多く、二人立ちで、先導には鬼が付き従い、鉾とササラの音を発して、「獅子の道」を示している。途中、ムシロの上で「寝獅子」に入るが、その時に獅子舞唄が入るのが特徴である。数え歌や「おると吉さ」、「高い山」などが確認できる。そして囃子として大太鼓、笛が入るが、太鼓打ちとは別にきれいに着物を着飾った少年が太撥を持ち、太鼓前面で太鼓の拍子に合わせて踊るように太鼓を打つ真似をする。この形態の獅子舞が印南町内で非常に多く確認できる。

#### 【祭礼翌日以降の行事】

当日はカサヤブチといい、祭りの後片付けを行うが、祝儀をいただいた家々を周り、獅子頭を用いて歯噛みをならす「カマバライ」を行っている。

#### 由来と歴史

本来「印南祭」とは二社で執行されている祭りを指しており、印南川右岸域に鎮座する山口八幡神社で執行されている同日の祭りとは区別されている。

伝承によれば印南八幡神社祭神は光川の小字坂本に上陸し、当時坂本に在住していた木下家当主によって現在地に遷座されたとされる。

印南祭の歴史的な内容は幕末期に記された『依岡宇兵衛諸事控』にも登場しており、近世後期において屋台（前記資料では「獅子箱」と傘鉾、幟、獅子、箱獅子（重箱獅子）などの記述が見られ、現行における祭礼行事が変化なく継承されていることがわかる。日高地域に多い獅子舞を中心とした祭礼であり、屋台の形態はかつて「長持」であった事を偲ばせる一本の担い棒である。

その他特徴として特権的な役割を指摘したい。神輿の先導役は、代々坂本に

在住した木下家であり、屋号を「住吉屋」とした神社創建伝説に因んだ特権である。また神輿昇の人選は宮本である光川小字にあたる坂本地区の担当であったが、現在は本郷での選出となる。

神社神宝である御道具を供奉するのは東山口であり、決められた家筋での特権となっており、現在も同じ内容を示す。

東山口奉納の「重箱獅子」は日高地域に十例存在する「鬼獅子」及び「当屋獅子」とも称される無音の獅子舞である。この獅子舞も東山口の特権として、年番で氏子地区をまわすことなく、継承されてきた。

(裏 直記)



6-44 東山口の重箱獅子

## 十五 稲原祭

大歳神社（日高郡印南町大字印南原）

稲原祭は、印南町印南原地区に鎮座する大歳神社の例大祭であり、氏子は奈良井、白河、南畑、柳畑、中越、滝の口の六地区となっている。

大歳神社は山間部に鎮座しており、氏子地区も小集落ということで祭祀組織は、白河・南畑組、滝の口・奈良井組と合同で行っており、両地区ともに四つ太鼓を一台ずつ所持している。

中越、柳畑両地区は屋台を所持しており、獅子舞の奉納を行うなど、多彩な面を見せている。

## 祭礼日

十月第二日曜日

## 組織

それぞれの祭礼組織として、若い衆頭、年行司、大年行司を置き、祭礼行事を取り仕切っている。

## 祭礼の次第と構成

### 【宵宮】

宵宮行事は各氏子地区内で地下周りを中心に行っているが、近年では稲原駅前で屋台、四つ太鼓を押し合う行事を行っており、見物人が多く賑わっている。

### 【本祭】

本祭では、神社鳥居前に奈良井、白河、南畑、柳畑、中越、滝の口の幟が立てかけられ、一一時頃より宮入が始まる。境内では鬼神楽が行われ、赤鬼、青

鬼によって各氏子地区を守り、新穀を奉納する舞などが演じられる。

四つ太鼓を所持する白河・南畑組は、雀の組印を用いており、奴装束や四つ太鼓の天幕にも用いられている。一方、奈良井・滝の口組は鳥居を組印としており、両組のみ組印を用いている。

なかでも白河・南畑組は古くから四つ太鼓を所持しており、戦前までは雀踊を奉納していたことが、組印の起源とされる。この雀踊は、御坊市小松原から日高川町山野に伝わり、当地に伝播してきたといわれている。白河・南畑組の四つ太鼓の囃子言葉は独特であり、道中は伊勢音頭も用いるが、「エーンヤイ」の掛け声を繰り返し、「サイテクリョ」や「キリキリマイコ」なども要所でみられる。そして盛大に盛り上がる場面では「ハリーシヨ、ヨイシヨ、ヨイヤッサ」の囃子がみられる。

奈良井・滝の口組の四つ太鼓は昭和六十二年（一九八七）に取り入れられたもので、それ以前は幟のみであったという。四つ太鼓は白河・南畑組のものを借りて作り、音頭は御坊市中組に相談し、「御坊節」を習ったといわれている。すべての祭具が宮入した後、境内では四つ太鼓二台、屋台二台が盛大に押し合う。

祭具の練り合いが終了すると、柳畑、中越の獅子舞が奉納されるが、獅子舞の芸態は、印南祭と同じ形態であり、獅子が歩き回るスタイルとなっている。

昼過ぎには渡御となるが、まず鳥居前に並べられた幟の順番通り、幟を指し並べ、神輿と共に御旅所に向かう。屋台二台、四つ太鼓二台がそれに付き従うが、その順番は毎年交代している。御旅所において、獅子舞を奉納し、還御となる。還御の際、四つ太鼓は「ラインノー」と囃子立て、祭りの終了を名残り惜しんで終了となる。

## 由来と歴史

大歳神社の創建は古く、「大歳宮田記」に中若太夫なる人物が、信濃国なつみが原より、大歳神を勧請したとされている。また白河上皇が熊野参詣の折、印南川上流に大歳神が鎮座することを知り、勅使を派遣して祈願したとされ、その名残りが、白河という地名である。

また祭礼行事では昭和初期に神輿が寄贈され、祭りが賑やかになり、かつては馬駆けも行われたといわれている。  
(裏直記)



6-45 境内の風景



6-46 鬼の神楽

## 十六 松原真妻祭

真妻神社（日高郡印南町松原）

印南町松原に鎮座する真妻神社は、氏神が最初に天降ったとされる真妻山の南麓、切目川中流域に位置し、氏子は印南町大字美里小字脇之谷・小字見影、大字松原、大字丹生、大字崎ノ原、大字皆瀬川、大字西神ノ川、大字小原の一部の八地区から構成される。

### 祭礼日

十月十五日に近い日曜日

### 組織

かつては近隣の字ごとに合同の若中が組織され、松原・丹生若中、西神ノ川若中、皆瀬川・崎ノ原若中にはそれぞれ屋台と獅子舞があった。

第二次世界大戦後、若中は真妻若中に統合され、各地区の屋台は所有を廃止して氏子共有のものとした。昭和五十年代に四つ太鼓や子供神輿が追加された。

### 祭礼の次第と構成

#### 【準備】

祭りの準備は、一か月ほど前に神社役員らが集まって寄合をもち、開催予定や費用など祭礼全体の打ち合わせを行う。

その後、真妻若中を中心に獅子舞、笛、太鼓、四つ太鼓、雀踊などの練習を行う。

祭礼の一週間前頃になると、境内の清掃や馬場道作りを行うほか、村の印である幟立てなど祭りに向けての準備が進められる。

#### 【宵宮】

祭礼前日は「宵宮」と称し、高張提灯が掲げられるなか、夕刻から若中が集まって屋台や四つ太鼓を昇き、神社境内や地下中において賑々しく宵祭りをを行う。

#### 【神賑行事】

松原真妻祭には、令和元年度現在、字幟八流、屋台二基、四つ太鼓一基、子供神輿一基が出され、巫女舞、獅子舞、雀踊が奉納される。

#### 屋台（獅子舞、雀踊）

獅子舞は、二人立ちで紙製の赤い獅子頭を用いる。松原真妻祭は中核となる神事は境内で行い、神輿がなく御旅所祭も無いため、獅子舞の奉納は拝殿前の馬場を舞場にして奉納される。獅子舞は昭和戦前期まで複数の若中により奉納されていたが、現在も神前で二基の屋台を据えて獅子舞が二番奉納される。また、神幸列の還御後には、子供獅子なども交えて複数の獅子舞を同時に舞う。

屋台は日高地域に多い唐破風屋根の宮型を長持の上に据え、後部に鉦太鼓を載せる。長持の担い棒には前後に横棒を縛り付け、数人の若中で早くことができるようにしている。

屋台囃子は笛（複数人）太鼓（鉦太鼓・締太鼓）で演奏され、屋台の前に子供の打ち囃しが付いて軽快な囃子曲に合わせて両手に撥を持って踊る。この形式は印南地域の特色である。

松原の雀踊は、獅子舞の合間の余興として子供や若中により演じられる。踊り歌はなく、笛太鼓の伴奏に合わせて踊るもので、手に持つ紅白の綾棒を肩にかけ右に左に振り下ろし、両手に持って掲げるなど素朴な動作が繰り返される。この踊りは、御坊下組などにみられる三味線伴奏付きの歌舞伎踊り風の雀踊とは明らかに系統の異なるものと判断できるが、踊りの伝来など詳細は不明である。

## 巫女舞

中学生の女子二人が巫女役を務め、社前で巫女舞（豊栄舞）を奉納する。

## 子供神輿

子供神輿は、秋祭りへの地区の子供の参加を促進するため昭和五十四年に新調された。

## 四つ太鼓

四つ太鼓は昭和五十六年の秋祭りから導入され、道具が新調された。

四つ太鼓の昇き方や囃子の取り方は御坊市菌の上組から習った。組印には氏神の使いである鳶が四つ太鼓の幕や乗り子衣装に金糸で刺繍されている。

## 【本祭】

一〇時頃、真妻若中が農協前に集合し、四つ太鼓の出発時間を待つ。若中の衣装は、組印の入ったシャツに、背中に鳶の絵のある黒半纏を着て、赤地に黒のネルのお腰を巻き、その上に腹巻や兵児帯、腰紐などを巻く。足もとは黒の地下足袋を履くのを基本とする。屋台は、四つ太鼓の運行に加勢が必要なため先に宮入りして境内に停め置く。

一〇時三〇分、四つ太鼓が出発して神社に向かって練り出しながら、一〇時四五分に神社に到着する。四つ太鼓の宮入では、拝殿の石段下でサイテクリョウやキリキリマイコをして氏神に対して礼を行う。その後、屋台一基が昇き出されて拝殿前で四つ太鼓と合わせ、祭りの雰囲気盛り上げる。

その後小休憩があり、一時から拝殿において祭りに参加する乗り子や打ち囃子、雀踊の子供のお祓いを行い、続いて神社役員や若中の代表など祭員のお祓いを行う。

一一時一〇分、拝殿の石段下にムシロを二枚敷き、獅子舞の奉納が行われる。獅子はムシロを中心に四方を祓う舞を演じ、前段を舞い終えるとムシロに戻っ

て休息する。ここで囃子は軽快な拍子から緩やかなものになり、これを合図に子供や若中らが獅子の周囲を取り巻いて輪になり、それぞれ紅白の綾棒もち雀踊を踊る。踊りが終わると、獅子舞の後段となり眠りから覚めた獅子が再び動き出して舞場をめぐる、最後に神前で舞い納める。

つづいて、屋台を別のものに入れ替え、囃子方も交替して一一時三〇分から獅子舞が奉納される。獅子舞の構成や芸態は最初に奉納した獅子舞とほぼ同様で、前段の舞の後、中休みには雀踊が入り、後段の舞が奉納される。一二時頃に獅子舞が終了して、いったん昼休憩となる。

一三時から神幸列によるお渡りの神事が始まる。神社からは、大榎を先頭に宮司、巫女、白御幣を持った神社役員や氏子・崇敬者らが二十人ほど並んで神幸列を構成する。神幸列の一行は、先行する氏子八か字の字幟をはじめ、屋台や四つ太鼓、子供神輿などに賑やかに出迎えられ、字幟を掲げる氏子の行列に先導されて馬場を練り歩く。

神幸列は、紙垂を付けた大榎を捧げ持つ白丁姿の男性を先頭に参道奥にある馬場の終点に向かって肅々と進み、その後折り返して馬場道を戻り、拝殿前を通って鳥居前にある馬場の始点に至る。そこからさらに馬場道を折り返して進み、一三時二五分ごろに拝殿の石段を登って社殿に還御する。その間、四つ太鼓と屋台二基が馬場に練り出し、拝殿前で並んでもみ合い、石段を担ぎ上げるなどして祭りの雰囲気盛り上げる。

一三時四五分には拝殿下に莫塵を敷き、巫女二人が豊栄舞を奉納する。

一四時〇五分からは獅子舞が二組合同により奉納される。はじめは拝殿前に獅子二匹が並んで舞い、雀踊を経て、獅子が加わって三匹の舞となる。その後、子供獅子と若中獅子の二頭立ての奉納があり、二度目の雀踊を経て獅子五頭による総舞が奉納される。

すべての奉納行事が終わり、一五時から境内で餅まきが行われ、神社役員らが

氏神に供えられた餅や菓子などを拝殿から投げ、氏子たちが競って拾い上げる。その後、一五時一五分に四つ太鼓が神社を出発して、本祭の諸行事を終える。

松原真妻神社の境内には馬場が設けられ、かつては旧切目川村見影・脇ノ谷、真妻村松原・丹生・西神ノ川で駆け馬を出して、流鏝馬の神事や若中らの対抗による馬駆けも行われた。

### 由来と歴史

真妻神社は、主祭神の丹生明神が鳶に乗って当地の主峯である真妻山に天降り影向したと伝えられる古社で、古くから山麓の村々から崇敬を集めるとともに、鳶は神の御使とされる。その後、平安時代に氏子の争論により社を真妻の峯から麓の各村に移して分祀し、そのうち当社は八箇村の氏神として初めに松原の神田へ輿を進め、さらに現社地に鎮座したという。また、『丹生大明神告門』に「日高郡江川丹生爾忌杖刺給比て」とある丹生社の一つに比定される。同社の祭りは、馬場で行われる大榎を中心にした神幸行列のお渡りを中核として行われ、氏子らは境内において屋台や四つ太鼓、獅子舞の奉納などを行う。祭式は時代ごとの変遷があったと考えられ、かつては馬駆けなどの馬祭りが主



6-47 松原真妻祭の獅子舞



6-48 松原の雀踊



6-49 松原真妻祭の四つ太鼓

体だったと思われるが、生活様式の変化とともに屋台行事に移行し、第二次世界大戦後に若中が統合されると、各地区の獅子舞も真妻若中に集約された。その後、第二次ベビーブームの昭和五十年代に至って、子供神輿と四つ太鼓が祭りに採り入れられた。  
獅子舞は印南周辺の影響が認められ、四つ太鼓は御坊祭の様式を手本として導入されるなど、神賑行事は時代ごとに周辺地域との交流のなかで採り入れられたと考えられる。  
(蘇理剛志)

### 第三節 日高地域の屋台・獅子舞

#### 屋台

日高地域の祭礼でみられる屋台は獅子屋台ともいわれ、獅子舞を奉納する際に囃子道具として用いられ、獅子頭を安置し、奉斎する祭具ともなる。屋台の形状は、ほぼ同一であるが、大きさには多少の違いがある。屋台は、上部をヤシロ（宮居）と大太鼓、下部を長持と称して、二つに分割できる。ヤシロは長持の内部で固定できるもので、ヤシロと長持を縄で括るもの、長持に通す担い棒でヤシロを固定するものがある。かつてはヤシロと長持は外部に補強的に渡された縄で固定されており、日高川町の土生祭の屋台は、これと同じ固定方法で、屋台の形状は様々である。

印南祭の氏子である東山口村の肝煎であった依岡宇兵衛の日記『依岡宇兵衛諸事控』の明治十二年（一八七九）八月十五日の条には、屋台を「獅々箱」と表記し獅子頭を納める箱と認識される。

印南町地方の湯川家所蔵「祭礼二付地方濱方両村定書」によれば、「一、御傘破之儀者、御宮より直二獅子太鼓は濱江出可申候筈（後略）」とあり、屋台を「獅子太鼓」と表記していることから獅子舞のための祭具であることがわかる。

本来、屋台は、長持の上にヤシロを置き、一本の担い棒によって担われている。獅子頭を安置し、その囃子を行う祭具という点からも伊勢太神楽の影響を受けていることは間違いない。しかしながら、そのヤシロの形状や大きさ、豪華さからもその初期の形態は変化し、日高地域で独自に発展したことを示唆している。日高地域北部の由良町の屋台は最も大きく、担ぎ手を三十人ほど要し、「屋形」と呼ばれる。日高地域で最多の御坊祭系の屋台は、その繊細な装飾や彫り物に豪華さを見せ、他地域と大きく違いを見せるが、屋型の構造は基本的なものである。

屋台の製作は地元か都市部の細工人とに二分される。土生八幡神社鐘巻地区

の屋台は寛政八年（一七九六）に地元細工人によって製作され、御坊祭濱之瀬組の屋台は、弘化四年（一八四七）に大坂南本町の細工所河内屋五郎左衛門によって作られている。また、印南町山口八幡神社の印南祭に出る地方地区の屋台は寛政年間（一七八九～一八〇〇）の墨書があり、同じく浜地区の屋台は嘉永六年（一八五三）の墨書が確認されている。

豪華に装飾される屋台は、日高地域の祭りの中心的存在である。諸祭礼において奉納芸能を行うにあたり、屋台は獅子頭を安置し、道中、地面に降ろすことを禁止されていることなど獅子頭及び屋台に神性が付与されている感が強い。また担い棒の形式によって屋台の製作年代が判断できる。屋台は長持を通す担い棒が中央に一本据えられ、現在もその形式を保っている地域が多い。また御坊祭で用いられる屋台はヤシロ部分の大きさが長持より若干大きく、長持よりはみ出して載せられている点も、他地域の屋台と異なる。これは、ヤシロと長持がもともと別物であり、運搬に応じてヤシロを据え置くようになり、構造上の不統一さが生じた名残りともみられる。その他の地域は、長持上ヤシロが嵌まる様に製作されており、屋台作成時に上段と下段が組み合うように作成されたためと考えられる。

御坊祭や土生祭、印南祭などの屋台は長持に白木を用いるが、志賀祭や丹生祭などでは漆が塗りあげられている。両者の違いは、長持部分に荷運びの機能を残しているかという点が挙げられる。

漆塗りの長持には、扉があり、中に獅子舞の用具としてのムシロなどが納められているが、白木の長持にはその機能が残されていない。

## 獅子舞

日高地域は祭りが盛んに行われる地域であり、どの地域も大小さまざまな祭礼行事が執り行われている。同地域において祭礼行事は年中行事の一環として大切に継承されてきた。奉納芸能の一つである獅子舞は祭りの中心的存在として位置付けられ、獅子舞が奉納できない場合は、祭礼行事自体が中止されるほど重要視される。日高地域で演じられる獅子舞の数だけでも百組以上といわれ、本編では同地域に継承されてきた獅子舞の中で「御坊祭」の影響を受けている地域の獅子舞の実態を見ていきたい。

祭りの数だけ獅子舞が存在し、氏子地区それぞれが獅子舞を奉納するのが、日高地域の獅子舞の特徴である。それに加え競争的内容を含み、他地域に負けじとその技術を誇示する傾向がある。日高地域の獅子舞は、主に二人立ちの獅子舞で、単に「シシ」と呼ばれることが多い。紙製の獅子頭を持つ頭持ちと胴幕を担当する幕張まくはりとに担当が分かれている。これを単にマエ、ウシロと呼ぶ場合もあり、地域によってはこの担当が前半と後半で入れ替わることもある。

主な獅子舞の内容は同じであり、擬人化された伊勢太神楽系統とは違う芸態を示している。その内容には霊獣として四方を祓い清めるかのように歯噛みをする仕草が確認できる。また神に従い、服従するという内容が盛り込まれているものも少なくない

一方、演目には「ノミ取り」や「芋掘り」などの獣的な内容も確認できる。

このような内容を含みつつ、複雑な芸態を示している日高地域の獅子舞は大きく分けて以下の内容に分かれている。

## 御坊祭の獅子舞

御坊祭に奉納される獅子舞は、ムシロ一枚もしくは三枚を敷き、その上で演目が始まり、ムシロを中心に正方形に右回りに獅子舞が展開される内容である。現在は正方形のシートを用いる組が多い。御坊祭の氏子組は同じ系統の獅子舞を奉納しており、その影響を受けた吉原祭、湯川祭、吉田祭でも御坊祭と同様の獅子舞を奉納する。

御坊祭の獅子舞は、獅子が野原で遊び、蝶や草花と戯れ、居眠りし、起きると（猟師に鉄砲で打たれて）暴れるが、神に諫められる内容である。この物語を演者は忠実に再現し、幕内に人が居る事を悟られないように、獅子を演じる事が一人前の証と言われている。動作の多くは、頭持ちが屈む体制で頭が前下りの状態となり、四方を一歩ずつ進む。マエとウシロの演者二人は幕が弛まない様に胴幕の張りを意識し、ウシロの演者は両腕を伸ばしたままで、幕を少しあおり、一定の距離を保ちつつ動く。見た目は少し細長い状態となる。演目中はその要所で頭を強く振り、前に進み、歯噛みを入れ、中央に戻り、演目を次へと展開する。獅子舞は、中央に戻った段階で、うたた寝や毛づくろいのような細かな所作があり、ウシロの演者が座り、マエの演者が立ち周囲を見渡すような所作を行う。その後は再度四方を回るという内容が続く。二回目に中央に戻ると、一度、演目上の区切りとして、音曲と共に動きが休止するものの、すぐに、最終演目へと入る。全ての演目時間はおよそ三十分となる。

御坊祭の動きは静と動が組み合わさった所作が多く、その洗練された動作や笛や太鼓（大太鼓、締太鼓）の演奏も含め、他系統の獅子舞とは違う優雅さが感じられる。獅子に獣的要素を残しつつ、霊獣としての動きや表現が存分に表されている点特徴といえよう。

## 北日高地域の獅子舞

北日高地域の獅子舞は、主に日高郡北限域に位置する日高町志賀地区及び由良町で演じられる獅子舞で志賀祭、由良祭、衣奈祭において奉納される。

志賀祭に奉仕する柏地区の獅子舞は、隣接する由良祭の獅子舞の要素が強く入っており、演目に肩車を用いた継ぎ獅子の「高舞」が存在し、久志地区の獅子舞も同様、肩車を用いた演目が見受けられる。一方、中志賀と下志賀両地区の獅子舞は、芸態と音曲が非常に似ているが、下志賀地区は演目中に獅子をあやす役「チョスリ」が入り、獅子とチョスリ二者によって演じられる。中志賀地区は獅子あやしがおらず、「ジ」、「前のゴシヤク」、「中のジ」、「後ろのゴシヤク」、「後ろのジ」という演目に分かれ、ムシロ三枚敷きより始まり、四隅を獅子が噛みに行き、右回りに獅子舞が展開する。「ジ」で四方をまわり、「ゴシヤク」でムシロの上で演じる。三周すると、ムシロに戻り、次の演目へと移行し、音曲もその都度止まり、再度演奏と共に獅子舞の演目が進む。獅子の見た目は御坊系と同じ前後の距離を張り気味にしている細長い状態である。

また演目の内容は、御坊祭と似ており、野原で遊ぶ獅子が（ジ）、「ノミ取り」など毛づくろいを演じ（前のゴシヤク）、再度、遊び周り（中のジ）、居眠りに入る段階で、周りを見渡して物音を聞き（後ろのゴシヤク）、獵師に狙撃されたことに怒り狂って暴れまわる（後ろのジ）という内容を示している。動き全体を見ても四本足で動きまわり、正方形を意識しながら魔を払うかのように四方を噛むといった霊獸的要素も感じられるのが特徴といえる。「ジ」の演目は動的内容で、「ゴシヤク」はムシロ上で展開される静的内容である。時間はおよそ四十分ほどかかる。

久志地区は、中志賀及び下志賀と芸態は少し異なるが、音曲に共通点がみられる。音曲も含め、所作の内容には由良祭で奉納される獅子舞と似通った点が多く、志賀祭は御坊祭のように正方形を意識した芸態を示しており、その影響

を受けた北限の祭りといえるが、音曲などは日高郡北部の由良祭の影響を受けているといえよう。

## 日高川流域の獅子舞

日高川流域の獅子舞は、日高地域では圧倒的多数を占め、内原祭、和田祭、土生祭、丹生祭、熊野祭、紀道祭に奉納される。日高川流域の獅子舞はムシロ三枚敷きの上で舞い、ムシロから出ずに演じることが特徴である。テンポは御坊祭に比べて早く、獅子頭を前後左右に振り動かし、細かな所作がみられる。演じられる時間も二十分ほどと短く、身体全体を使った大きな所作などもみられるが、全体を通して、頭を振り動かしながらムシロ内を右回りに動き、演者の前後の交替なども見られない。また演者の前後の距離感是非常に近く、ウシロの幕は立ったまま、マエの演者は中腰で全体的に前下がり演じられることが多い。「ゴシヤク」の演目に入る際に、一度獅子の動作と音曲が休止し、再開する例が多い。

一方、土生祭の獅子舞は、演目の展開や音曲などは、日高川流域の獅子舞と同じであるが、演者の立ち位置が御坊祭の獅子舞と同じ幕を張り気味にした前後の距離を取る。

日高川流域の獅子舞の特徴は、獸としての動きが少ないということである。ムシロから出ることもなく、頭の振り方によって獅子舞の物語を象徴的に表しており、獸的容姿であるものの、その動きはほとんどなく擬人化され、全体を通して動的な動きが多く、「ゴシヤク」の部分のみ動きが少ない。

土生八幡神社の鐘巻地区の屋台は寛政八年（一七九六）の作成であることから、十八世紀には獅子舞が奉納されていたことが示唆される。

日高川流域の獅子舞は御坊祭及び北日高地域の獅子舞とは芸態が全く違い、比較的短い演目やムシロより大きく出ない動作、四方を意識した舞い方に特徴

がみられる。

## 塩屋地域の獅子舞

塩屋地域の獅子舞は、塩屋祭、森祭で奉納される。日高川流域の獅子舞と隣接する御坊祭の影響も受けているとみられる。スローなテンポやアップテンポな音曲が伴い、ムシロ三枚の上で舞われる。動きに躍動感やメリハリがあり、一見すると日高川流域の獅子舞と御坊祭の獅子舞、北日高の獅子舞の混合型ともいえる。音曲は日高川流域と同一であるが、少しテンポが遅く、全体的にゆったりしているのが特徴である。

獅子舞の立ち方などは御坊祭や北日高地域の獅子舞と同じく、前後の距離を意識し、胴幕を張り気味に、土生祭の獅子舞に近いが、マエの演者が前屈みの姿勢や立った姿勢を繰り返す動作が多く見られる。獅子舞の展開は、前後の演者が立ったままで進められるが、ムシロを中心に円を描くように右回りに進み、大きな頭の振りや歯噛みの所作も少ない。ほぼムシロ上で演目が展開されるが、後半部分で音曲とともに一度停止し、再開される部分があるが全体を通して長いもので五十分ほどとなる。

## 印南祭と周辺の獅子舞

印南祭の獅子舞は、印南町で展開される祭礼行事で奉納されるもので、印南祭（山口八幡・印南八幡）・稲原祭、切目祭及び切目川流域で奉納される獅子舞である。

これまで紹介してきた系統とは全く異なる獅子舞で、前後の演者の距離が近く、比較的小規模の獅子舞となる。獅子は共演者ともいえる「オニ」に導かれ、「獅子の道」という複雑な経路を辿って物語を展開していくのが特徴である。その経路を辿る際、その他の獅子は足運びに一定の条件を見出すが、印南祭とそ

の周辺の獅子舞は歩いて移動する点の特徴といえる。

獅子頭も全般的に下向きに構えた状態で動かす所作が少なく、要所で歯噛みの所作を加える。ムシロ一枚を中心に大きな範囲で獅子舞を展開していく動的要素が強いものの、一定区間を歩くと立ち止まり、その場で停止するなど、静的内容も多分に含まれ、動きは一定のテンポを保つが、物語に合わせて素早く動いたり、止まったりする所作を繰り返す。

音曲は、非常に長い演目には以下の内容が含まれる。獅子が山から降りてきて、蝶や牡丹と戯れていると居眠りをはじめ。そこに獵師が現れ、獅子は手負いとなり暴れ始めるが、神に諫められおとなしくなるといふ筋書きである。獅子の動きや表現的に日高川流域の獅子舞と近い内容が多く見受けられる。

獅子舞は、演じる時間が長く、間に寝獅子が入り、獅子が寝ている時に「伊勢音頭」、「高い山」、「おるりと吉三」、「数え歌」などの歌が入る。この中で「おるりと吉三」は熊野地方を代表する盆踊りの歌であり、「高い山」は全国的に唄われている民謡である。

また獅子には雄と雌の二種類があり、雄の方は動きが激しく、雌の方が大人しいのが特徴である。獅子の雌雄の見分け方としては、尻尾の有無で判断でき、尻尾があるほうが雄であるという。

印南祭における獅子舞の初見は、湯川家所蔵の文政十一年（一八二八）の「祭礼二付地方濱方両村定書」である。「一、緒傘揃、御傘破共獅子舞八年々御傘之番附け二順じ相舞シ候筈（後略）」と、獅子舞の順番等の記述がみられる事から文政期には印南地域には獅子舞が存在したことがわかる。

日高地域の獅子舞を分類し、概観してきたが、日高地域の獅子舞は、基本的な音曲、獅子舞の物語はほぼ同一で、その表現方法に違いがあることが窺える。

御坊祭や日高川流域の獅子舞は、一連の流れをもって構成されており、音曲や獅子舞の物語の展開において、強弱を入れつつ流れをほぼ止めず進められる

点が特徴である。

一方、北日高地域の獅子舞は全ての演目において、獅子舞の展開ごとに動作と音曲が止まり、物語の構成に合わせた違ったテンポを奏でている。御坊祭および北日高地域の共通点は、物語の構成の一致以外にも芸態の構成もおよそ似た内容を示している。中央より右回りに四方を巡る構成や、舞場の中央で演じられる「ゴシヤク」もほぼ同じ内容である。

御坊祭の獅子舞はその洗練された獅子の動きに動的要素も静的要素も含まれ、その強弱によって獅子の動きを躍動感をもって示している。北日高地域の獅子舞は「ジ」の演目中は動的表現で、「ゴシヤク」の演目中が静的表現と動きを分けて演じられているところが特徴といえよう。またその動作に差があるといえる。

なお日高地域で多数を占める日高川流域の獅子舞は、その表現方法が舞の範囲ではなく、その場で頭を用いた動きで表されているところにあり、足運びより頭の動きや角度によって獅子の行動を表現している。複雑な頭の振りによって獅子の動きが制限されており、動物的な動きは少なく、動きの表現が象徴的となり、視覚的情報が少なく感じられるが、物語の構成は日高地域全域で共通する。

塩屋地域の獅子舞は、それぞれの要素を複合的に取り入れ、音曲や芸態に大きな違いが見られるも、構成に関しては、動きが少し小さくなり、強弱をつけた頭の振りや動きが特徴的に表されている。このような違いは、御坊祭の獅子舞、北日高地域の獅子舞の影響を受けつつも独自によって生み出されたものと考えられる。

次いで印南祭と周辺の獅子舞は、獅子舞の物語は一致するものの、芸態は全く異なり、「獅子の道」という独自の表現方法によって物語が展開されているところが特徴である。音曲も違い、和歌山県南部の獅子舞の影響を受けているとみられ、古座流といわれる獅子舞に近い内容を示している。

日高地域の獅子舞は、日高地域の中心に位置する御坊祭の獅子舞の影響は、細部では見られるものの、全体を通して模倣されたものが少ない。それは日高地域で祭祀行事が盛んとなる江戸時代において、他地域が獅子舞を奉納するにあたり、その内容を争うように習得し、独自の発展を遂げて現在に至ったからと考えられる。

### 神事芸能としての獅子舞

日高地域には、氏子が奉納する獅子舞とは異なる神事としての獅子舞が奉納される。御坊周辺の祭祀にも同様の獅子舞が奉納されており、志賀祭の「鬼獅子」、内原祭の「鬼獅子」、丹生祭の「踊獅子」、和歌山県指定無形民俗文化財の「土生八幡神社のお頭神事」にある「踊獅子」、紀道祭の「当屋獅子」、和歌山県指定無形民俗文化財である「印南八幡の重箱獅子と祭」にある「重箱獅子」などである。

神事としての獅子舞は、ハナタカ面の「オニ」、オニ面の「ワニ」、獅子で構成され、オニとワニは鳥兜を被り、鉾を持ち、ササラを用いてオニの舞を行い、中盤以降より獅子が登場し、三者が共演し、獅子舞を演じる。

オニ、ワニの呼称に関しても、オニを「王仁」、ワニを「和仁」と表すこともあり、内原祭ではハナタカ面を「タカ」、オニ面を「ビシヤ」ともいう。

一方、オニ、ワニの呼称は、神事芸能の獅子舞以外にも存在し、日高川町寒川神社の寒川祭、由良町宇佐八幡神社の横浜の獅子舞でもオニ、ワニと呼ばれる演者が登場する。

このような獅子舞は、和歌山県内においても日高地域のみで確認でき、現在十例確認される。音曲を伴わない芸能であり、オニとワニによる舞と獅子とオニ、ワニが共演する舞の二部構成で演じられる。

これらの獅子舞は、それぞれ芸態や様式が酷似しているが、名称の違いは、

その獅子舞の特徴を表しているからである。「鬼獅子」という名称は、オニと獅子の共演による「オニと獅子の舞」から由来し、「踊獅子」は、オニの「踊り」と獅子の何度も確かめるように臭いを嗅ぎ分ける演技が踊るような躍動感があり、「踊獅子」と呼称される。「当屋獅子」はその奉納形態である氏子地区の輪番制による「当屋」からきている。「重箱獅子」は、獅子頭の形状が木製の黒塗りであり、見た目が重箱に似ているからとされる。

この獅子舞が神事とされる所以は、祭礼行事に先立ち、最初に奉納されることである。また奉納形態の特殊性として当番という輪番制が挙げられる。

最初に奉納する理由は、神の降臨に先立ち、その場を祓い清める芸能とされ、浄められた祭場において祭礼行事を行い、神輿渡御に導く。

祓いの要素としては、前段のオニの舞でオニがササラを用いて四方を祓い、そして天を仰ぎ、地を踏みしめる所作が「反問」と酷似する点と、獅子が登場し、オニの持つ銚の臭いを嗅ぎ、その善悪を見極めるかのような所作から最後に獅子が歯噛みをし、魔祓いを行うといった点が確認できる。

また当番にあたると、「鬼番」、「鬼当番」などと呼ばれる地区もある。当番は、その年の祭礼行事を執行する責任が生じる。

例えば志賀祭では九月に行われる「初寄り合い」の日に、志賀王子神社より当番地区に鬼獅子道具一式が収められた長櫃が託されるが、鬼獅子道具は神社が管理する什物であることが窺える。

また神輿渡御においてオニ、ワニ両者が神輿を先導する役目を担っている例が多く、オニ、ワニ両者に従って神輿が渡御する。志賀祭や土生祭では、当番地区まで神輿を先導する。内原祭では「鬼当番」地区の各家をオニとワニ、獅子がまわる行事が残されている。

一方、土生祭の踊獅子は双頭の木製の獅子頭で奉納され、全国的にみても双頭の獅子舞は珍しく、獅子頭の形状は左右の大きさが異なり、当初は夫婦の獅

子であったのが、後に結合し双頭になったと伝承される。

また印南祭の重箱獅子も東山口地区一地区によって継承されてきた獅子舞であるが、丹生祭の和佐地区の踊獅子も同様である。丹生祭の踊獅子は、神社合祀によって祭礼行事も統合され、もとは和佐地区の丹生神社で奉納されていた踊獅子を継承しているためである。

この神事芸能として奉納される獅子舞は、御坊祭のように氏子が奉納する獅子舞とは区別されており、踊獅子と呼称される地域では、氏子が奉納する獅子舞を舞獅子と言い替える地域もある。氏子が奉納する獅子舞は、奉納芸能であり、神賑行事に数えられるが、神事芸能としての獅子舞は、奉納形態や芸能が奉納芸能である獅子舞とは大きく異なり、祭場を清めるための「祓い」を主体として演じられる点が特徴といえよう。

(裏 直記)

#### 第四節 日高地域にみる獅子舞の音楽

御坊市を含む日高地域には、獅子舞を伴う祭礼が多く存在する。そこで本稿では、日高地域一帯にみられる獅子舞の音楽について概観し、御坊祭の獅子舞との関連性を考察する。本稿でとりあげる祭礼は、調査を実施できた吉原祭、丹生祭（江川）、塩屋祭、森祭、土生祭（鐘巻、藤井）、熊野祭、内原祭を中心とする。

##### ◆曲の構成

第四章で述べたとおり、御坊祭における獅子舞の旋律構成は、獅子の動きと関連した六つに分類できる。このような曲の構成が、日高地域一帯の獅子舞にも同様にみられるのか考察したところ、次のような区分になる。

##### 複数の曲（旋律型）で構成される獅子舞

吉原祭、熊野祭、丹生祭（江川）、志賀祭、土生祭

吉原祭は田井組、東組、西組、新濱組の四組からなるが、西組を除く三組は同じ曲構成をもつ。さらに、その構成は御坊祭と同じように獅子の動きに関連した複数の曲が組み合わされている。熊野祭も獅子の動きに合わせて笛の旋律を変えるなど、御坊祭の獅子舞と近い要素がみられるが、全体のテンポが速いため、獅子舞全体の時間は他の祭礼に比べると短い。

また丹生祭（江川）については、笛の旋律が複数に分類できる点や、獅子舞の途中に一旦笛が途切れて締太鼓と太鼓が枠打ちになる部分があるなど、曲の構成においても御坊祭との共通点が多い。志賀祭（中志賀）では、「ジ」「前のゴシヤク」「中のジ」「後ろのゴシヤク」「後ろのジ」のように獅子の動きにそれぞれ名称が付けられており、笛の旋律も「ジ」と「ゴシヤク」で異なる。

##### 固定の旋律型を繰り返して演奏される獅子舞

塩屋祭、森祭、内原祭

塩屋祭では、獅子の舞い始めから終わりまで、笛は終始定型の旋律を繰り返して演奏し、御坊祭のように獅子の動きに合わせて旋律を変えることはない。ただし、舞の最後に獅子が左右に激しく倒れる所作をする際は、それまでと異なる旋律が演奏される。内原祭では笛役が複数名獅子の周囲に立ち、曲の構成は御坊祭と比べると少なく、固定のフレーズを繰り返して吹かれることが多い。

##### ◆楽器編成

吉原祭、丹生祭、志賀祭、土生祭、内原祭では、笛・締太鼓、太鼓の編成が用いられる。吉原祭を除く他の地域では、複数名の笛役が獅子に付く。塩屋祭や森祭では、この三種類の楽器に子どもたちによる小鼓とチャンポンが加わり、小鼓は紅白が巻かれた手製のバチや扇子で打たれる（6―50）。熊野祭では、舞い始めから太鼓類と笛の他、手拍子と「ソーレ」という掛け声が獅子の周囲からかけられる。



6-50 塩屋祭の楽器

##### ◆笛の旋律

日高地域の獅子舞の旋律は、御坊祭系統（御坊、吉原）、日高川系統（熊野、丹生（江川）、土生、志賀）、日高川南系統（塩屋、森）の大きく三つに分けられる。御坊系に含まれる吉原祭では、西組を除く三つの組（田井、東、新濱）の笛の旋律は、御坊祭の旋律と類似している。西組は芸能的にも大神楽系統の獅子舞であることから、三つの組の獅子舞とは異なり、笛の旋

律も大きく異なる。上組は吉原の東組と新濱組に笛を教えたという話があり、それぞれの笛を比較したところ、新濱の笛の旋律は上組と一致する箇所が多く、東は一致する箇所と異なる箇所が見られるものの、上組の笛の旋律と近いことが確認された。(譜6-1・2・3)

日高地域の祭礼で最も多くみられるのが、日高川系である。この系統の旋律は御坊祭と近い旋律が随所に見られるものの、笛の構成音をみると御坊祭の笛にはない音が含まれる点や、地域固有の旋律や音を擦りあげる奏法が存在するなど、吉原祭のように類似するとは言いい切れない。さらに塩屋祭と森祭の笛の旋律は御坊祭の様に拍節感を持たずに吹かれる。この二地域では、拍節の他フリーズの終わりの音を伸ばし、打音という奏法を用いてトリルのように吹くなどこの二地域での共通点がみられた(譜6-4)。

#### ◆太鼓・締太鼓のリズム

御坊祭のように、締太鼓が一定のリズムを刻み、そこに太鼓が少し細かいリズムを加える形式は吉原祭にもみられる。その他の祭礼では、締太鼓は両バチを用いて三回打つのを基本パターンとし、締太鼓が細かくリズムを刻むなかで太鼓が打たれることが多い(譜6-5)。塩屋祭や森祭、志賀祭などでみられる締太鼓のリズムはパターンa(譜6-6)で、丹生祭(江川)ではパターンb(譜6-7)のような付点のリズムが用いられる。

御坊祭の獅子舞には、途中に締太鼓と太鼓が杵打ちまたは杵を擦る箇所があるが、日高地域の獅子舞にも、内原祭(高家)、丹生祭(江川)、志賀祭(中志賀)、土生祭(藤井)に同様の杵打ち箇所が存在する。土生祭(藤井)では、最後テンポが速くなると太鼓は皮面と杵打ちを混ぜて打つ。

以上のように、曲の構成や楽器編成、笛の旋律、太鼓・締太鼓のリズムから

日高地域の獅子舞を考察すると、御坊祭に共通する音楽的要素をもつのは吉原祭である。その他の祭礼では熊野祭、丹生祭、志賀祭、内原祭に笛の旋律や打楽器のリズムといった複数の共通点がみられ、比較的御坊祭とも近い獅子舞の音楽性を有する。一方、塩屋祭と森祭では御坊祭の音楽的要素とは異なる点が多いものの、この二地域には類似した笛の旋律がみられるなど、日高地域の中でも複数の系統が存在することが明らかとなった。(出口実紀)

譜6-1 上組

♩=66 ca.

2019年10月4日録音

Musical score for '譜6-1 上組' in 7/8 time, key of B-flat major. The score consists of three staves of music. The first staff begins with a treble clef and a key signature of two flats. The melody features eighth and sixteenth notes, with some triplet markings. The second and third staves continue the piece, ending with a fermata.

譜6-2 吉原(新濱組)

♩=63 ca.

2019年10月20日録音

Musical score for '譜6-2 吉原(新濱組)' in 7/8 time, key of B-flat major. The score consists of three staves of music. The first staff begins with a treble clef and a key signature of two flats. The melody features eighth and sixteenth notes, with triplet markings (indicated by '3') in the second and third staves. The piece ends with a fermata.

譜6-3 吉原(東組)

♩=58 ca.

2019年10月20日録音

Musical score for '譜6-3 吉原(東組)' in 7/8 time, key of B-flat major. The score consists of three staves of music. The first staff begins with a treble clef and a key signature of two flats. The melody features eighth and sixteenth notes. The second and third staves continue the piece, ending with a fermata.



## 第五節 日高地域の四つ太鼓の音楽

四つ太鼓の芸は、御坊祭の周辺地域でも多くの祭りでも伝承されているが、印南祭（御坊市・印南町・山口八幡神社と印南町・印南八幡神社）では、祭の中に四つ太鼓の芸を持たない。また、祭りを支える地域としては、四つ太鼓の芸を伝承しているも、地区の事情でやむを得ず、芸の中断をしているところもあれば、祭りの芸として不適切という理由で廃絶したところもある。

このような事情の中で、筆者は、土生祭を支える地域のなかの鐘巻地区と藤井地区で、四つ太鼓の練習を見学することができた。他地域の祭りの映像記録にも、四つ太鼓の部分的映像は散見されたが、神輿渡御や屋台との合流場面が多く、音楽のデータとして取り上げることが難しかった。

本稿では、日高地域の鐘巻地区と藤井地区の四つ太鼓の芸を、四章で報告した御坊祭の四つ太鼓の音楽的特徴と比較することで考察した。

第四章では、御坊祭における独自の〈伊勢音頭〉の利用方法は、囃しことば部分に「乗り子のリズム奏」を取り入れたこととして、その結果生じた、太鼓のリズム奏と詞章旋律部分の演奏テンポの関係を考察した。そのために、短い歌と長い歌の構成を一覧にしたものが表4―9であり、構成部分のテンポ表現を示したものが表4―10である。

ここでは、鐘巻、藤井で演奏されている、囃しことばと〈伊勢音頭〉の構成、太鼓のリズム奏の役割、演奏テンポの変化を地区ごとに表6―3、表6―4にまとめた。構成表示には表4―10で用いた、「序」「IからVII」と長い歌の「長」を使って作成している。

また、演奏テンポの変化を見るための計測は、「MMJ≡○○」を用いたが、表では繁雑をさけて、「MMJ≡」を省略して示している。

## 鐘巻の四つ太鼓

鐘巻の四つ太鼓でも〈伊勢音頭〉が歌われており、その詩型には、御坊祭の多くのグループと同様、短い歌と長い歌の二つのタイプが採用されていた。次に、練習で演奏された数種の詞章の中から、短い歌と長い歌を一ふしずつサンブルとして選び、乗り子が表現する一連の芸の始めと終わりの部分も含めて、一覧にまとめたものが表6―3である。表6―3は、以下の項で藤井の表6―4と合わせて考察する。

鐘巻で歌われた詞章は、御坊祭や全国的に歌われる民謡の詞章の、多少変唱されたものがほとんどであったが、次のような祭りを歌った詞章も使われていた。

叩く太鼓の打ち出す町に

豊国豊穰の音がする

## 藤井の四つ太鼓

藤井の四つ太鼓でも、〈伊勢音頭〉の短い歌と長い歌が歌われていた。次に、鐘巻と同様に、練習で演奏された数種の詞章の中から、短い歌と長い歌をサンブルとして選び、乗り子が表現する一連の芸の始めと終わりを含めて一覧にしたものが表6―4である。表6―4の考察は次項で行う。

他に、藤井で歌われた詞章は、鐘巻と同様、御坊祭や全国的に歌われる民謡の詞章の、多少変唱されたものがほとんどであったが、次のような地元を歌った詞章も使われていた。

藤井よいとこ朝日をうけて

そのの母ちゃんきいとくれ

そのの兄ちゃんきいとくれ

その父ちゃん母ちゃんも

じいちゃんばあちゃんも

藤井若い衆のいいところは

(中略)

見てておくれよ男意気

練習では見られなかったが、藤井でも、いわゆる「サイテクリヨウ」の演技が行われるということであった。

### 鐘巻と藤井の四つ太鼓に見られる音楽的特徴(表6-3、表6-4参照)

#### ・テンポの変化について

御坊祭の四つ太鼓では、〈伊勢音頭〉の囃しことば部分に乗り子の太鼓奏が取り入れられたため、一部のグループで、ふしにテンポの変化が見られたが、鐘巻では、テンポの変化は見られず、藤井では乗り子の囃し部分(間奏部分)で動きが大きくなることでわずかに遅くなる変化が見られた。

また、後の項で述べるIの囃し部分の音頭との分担で太鼓が音頭の伴奏に回る部分でも、わずかではあるがテンポの変化が見られる。この部分の変化は、乗り子の演奏が、身体表現の大きい間奏表現か、身体表現の小さい伴奏表現かを示している。

#### ・拍節やフレーズの変化について

鐘巻や藤井の四つ太鼓の音声記録を提示できないので、説明がむずかしいが、鐘巻では、I(間奏)の囃しことばの前を延ばして、太鼓のリズムの打ち始めを拍の頭から始められるように変形したと思われる変化が見られた。

藤井では、詞章の「」のところを延ばして歌い、やはり乗り子の太鼓が拍の頭から演奏できるように変化させている。

### ※鐘巻、藤井のまとめ

・鐘巻では、音頭のふしについて「少し、御坊祭のふしが入っているが、鐘巻独自のふしも伝承されている」ということであったが、残念ながら聴くことはできなかった。

・藤井では、二つの特徴的な表現が見られた。一つは、乗り子のバチの使い方、「ハリシヨヨイシヨ」の囃しの部分で、バチを持つ手を振り上げたときに手首をねじる、御坊祭下組の「雀踊」に見られるような表現が見られ、二つは、先にも多少触れたが、Iの囃し部分に次のような珍しい乗り子と音頭の掛け合いが見られたことである。

乗り子…ソラヨイトコセエーヨイヤナソレ

音頭…アレワイヨイコレワイヨイ

乗り子…ソラヨイトセ

#### ・鐘巻、藤井の御坊祭とは異なる三つの大きな特徴

ア構成の序と後、すなわち、序奏と後奏のリズム奏の違い  
イ囃し部分で、音頭と乗り子の分担がはっきり分かれていること。

ウ御坊祭の複数のグループで見られた、Iの部分を間奏に使う演奏法は使  
用されていない。

・日高地域の四つ太鼓の見学は、二か所だけであったが、御坊祭とは異なる独自の芸の伝承が行われていた。

その違いは、四つ太鼓に合わせる「〈伊勢音頭〉の変化のさせ方」に見られた。御坊祭は、いわゆる曲としての〈伊勢音頭〉の範囲内での変化のさせ方であったが、鐘巻・藤井では、メロディーやリズムなど音を変えて合わせる方法であった。(梁島章子)

表6-3 鐘巻の詞章例と構成・演奏テンポ・太鼓のリズム奏一覧

歌	音頭	テンポ	乗り子 (太鼓を叩きながら)	テンポ	四つ太鼓のリズム
	<b>【短い歌】</b>				
序	ヨーンヤイ コラハリシヨ	72 60	ヨーイヨイ ヨーイヨイ を繰り返し、テンポを速める ヨイシヨ サッサ ハリシヨ ヨイシヨ サッサ・・・ サーヨーイヤ	72～連打 60 60	序奏
II	サーヨーオオーオイナーエー めでためてたの	72 72			伴奏 伴奏
III			ヨーイヨイ	72	間奏
IV	若松様ヨ	72			伴奏
V			サーヨーイセー コーラセ	72	間奏
VI	枝も栄えて ヨーイトソレサエ	72			伴奏
VII	葉も茂るヨ	72			伴奏
I			ソリヤ ヤーイトコセ ヨーイヤナ ハリワイヨーイ コレワイヨイ ソラ ヨーイトセ	72 72 72	間奏
	<b>【長い歌】</b>				
II	サーヨーオオーオイナーエー 安珍清姫	72			伴奏 伴奏
III			ヨーイヨイ	72	間奏
IV	蛇体となってヨ	72			伴奏
V			サーヨーイセー コーラセ	72	間奏
長	恋の一念蛇になって 日高川をば渡りつつ 六十二段のきざしを	72 72 72	ソレ ソレ ソレ	72 72 72	伴奏 伴奏 伴奏
VI	登り ナーエ 詰めたら ヨーイトソレサエ	72			伴奏
VII	道成寺	72			伴奏
I			ソリヤ ヤーイトコセ ヨーイヤナ ハリワイヨーイ コレワイヨイ ソラ ヨーイトセ	72 72 72	間奏
後			ハリシヨ ヨイシヨ サッサ サーヨーイヤ ハリシヨ ヨイシヨ サッサ サーヨーイヤ (上を繰り返し、途中から「サイテクリヨウ サイテクリヨウ」の囃しで、乗り子は「反り返り」の演技を数回繰り返す) ハリシヨ ヨイシヨ サッサ サーヨーイヤ ヨーイヨイ ヨーイヨイ	60 60 84 60 60	後奏

表6-4 藤井の詞章例と構成・演奏テンポ・太鼓のリズム奏一覧

歌	音頭	テンポ	乗り子 (太鼓を叩きながら)	テンポ	四つ太鼓のリズム
	<b>【短い歌】</b>				
序	サーヨーイヤ	78	サーヨーイヤ サッサ ハリシヨ ヨイシヨ サッサ サーヨーイヤ サッサ ハリシヨ ヨイシヨ サッサ サーヨーイヤ …… 途中から音頭の歌	72、84 72、84	序奏
II	サーヨーイナーエー とろりとろりとヨ	66 66			伴奏 伴奏
III			ヨーイヨイ	60	間奏
IV	「エーまわるは淀のヨ」	66			伴奏
V			サーヨーイセー コーラセ	54	間奏
VI	「淀の川瀬のヨーイソレ」	66			伴奏
VII	「水車」	66			伴奏
I			ソラ ヨーイトコセ エーヨーイヤナ ソレ ソラ ヨーイトセ	60 60	間奏 伴奏 間奏
	<b>【長い歌】</b>				
II	サーヨーイナーエー めでためてたのヨ	66 66			伴奏 伴奏
III			ヨーイヨイ	60	間奏
IV	「エーめでたい屋敷ヨ」	66			伴奏
V			サーヨーイセー コーラセ	60	間奏
長	めでたい屋敷に松植えて 松のぐるりに竹植えて 松竹梅のお庭先 梅に鶯・・・ 上から鶴さん舞い下りて 下から亀さん舞い上がり	66 66 66 66 66 66	ソレ ソレ ソレ ソレ ソレ ソレ	66 66 66 66 66 66	伴奏 伴奏 伴奏 伴奏 伴奏 伴奏
VI	「鶴と亀とでヨーイソレ」	66			伴奏
VII	「舞を舞うヨ」	66			伴奏
I			ソラ ヨーイトコセ エーヨーイヤナ ソレ ソラ ヨーイトセ	60 60	間奏 伴奏 間奏
後			サーヨーイヤ サッサ ハリシヨ ヨイシヨ サッサ サーヨーイヤ サッサ ハリシヨ ヨイシヨ サッサ (繰り返す)	72、84	後奏